
白い記憶 ~聖少女との日々~

霧島卿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い記憶 ～聖少女との日々～

【Z-ONE】

Z9009Z

【作者名】

霧島卿

【あらすじ】

赤い瞳に白い肌と髪。普通と違う姿のヒロール・レイスは、皇位継承者でありながら不遇の人生を歩んできた。ある日、彼は皇帝である父から呼び出され上洛し、結婚を命じられる。その相手は、教皇の娘である八歳の少女だった。

第一話 ～婚姻～

狭くて殺風景な部屋は、病人が寝るような簡素な寝台が一つ置いてあるだけで窓すら無く、まるで独房のような冷たさに満ちている。その寝台から、ガウンを纏つた男が這い出でてくる。男は何度か瞬きした後で立ち上がり、靴を履いてから部屋を出た。

早朝だというにも関わらず、全ての窓がカーテンで覆われている廊下は薄暗い。それでも男は慣れ親しんだ館の通路を躊躇うことなく歩いた。しばらくすると前方から女性が歩いてきた。男の館で働いている唯一の使用人だった。

「おはようございます、エロール様」

自らの雇い主の存在に気がついた女使用人は、そっと端に寄り、恭しく頭を下げた。

「ああ、ティファンヌ、おはよう」

一使用人にも、エロールは挨拶を欠かさない。自分を助けてくれる人間に対しては、最低限の礼を尽くすことが、エロールの方針だつた。それでも伯爵であるエロールはそれ以上の言葉は交わさずにティファンヌを横切つた。

しばらく歩き、それから一番大きな扉の部屋に入った。後ろからはティファンヌが追従してくる。

「ティファンヌ、服を頼む」

「はい、エロール様」

そこは衣裳部屋だつた。ティファンヌはエロールのガウンを脱がせて置んだ。彼女は慣れた手つきで真っ白なズボンを穿かせ、同じく真っ白な上着を着せた。

「エロール様、ご報告があります。今朝早くに、陛下の使いの方から伝言を預かりました」

「父上様か……」

エロールの表情が曇つた。一番距離を置いている人間から呼び出

されるのではないかと不安を覚えた。

「今日の晩餐時に上洛せよとの『命令』です」

雇い主のわずかな表情の変化を見逃さなかつたティファンヌは、逃げられないようにわざと『命令』という言葉を選んだ。言い訳が出来ないよう楔へきを打つたのだ。

「どうか、父上が私をお呼びか……」

一人だけではあるが我慢はできる。だが、父上と会うことになれば、仲の悪い異母兄弟たちとも顔を合わせてしまうかもしれない。第三皇子である彼が特に会いたくない二番目の兄に会う可能性もある。体調不良を理由に断つても、エロールを知る人間なら咎めはしないだろうが、幾度と無く続けてしまつては心象が悪くなる。

それ以前に、皇帝からの命令に背くことは、いくら息子でもできない。

「ああ、分かつたよ。田の入り時に出発するよ」

「かしこまりました」

ティファンヌは一礼してから部屋を出た。取り残されたエロールは髪型を確認するために鏡に近づいた。鏡は、彼が異母兄弟たちの顔の次に見たくないものだつた。それでも上洛する以上はしつかりと整えなければいけない。

「私も今年で二十歳だからな、そろそろ婚姻させられるのだろうな」帝国で最も頭脳的に優れていると噂される程の男であるエロールは、父親が自分を呼び出した理由をだいたい理解していた。一人の兄のように、古くからの家臣である貴族の娘と契りを交わせるつもりだらう。

「最も、こんな私に嫁ごうとする女がいるものかな」

乾いた自虐の笑いを浮かべて鏡を見る。

肩まで届くほどの真っ白な髪に、雪のように白い肌、真っ赤に充血した瞳を持つ自分の姿が寸分のぐるい無く映つていた。

城門を馬車で通過し、場内に通じる門の前で降りたエロールは、そこからは一人で歩いた。案内しようとした官吏には少し握らせて下がらせた。

およそ一年ぶりの場内は何も変わっていない。

建国の英雄五人の肖像画。

有名な彫刻家がこしらえた巨大な石造。

歴代の皇帝を祭る祭壇。

部屋振りもそのままだつた。皇帝が食事をするための部屋の前には、扉を挟む格好で一人の近衛兵が立つていた。

「陛下はそこか」

おもむろに話しかけたエロールに、一人の近衛兵は同時に目を細めた。身の前に現れた奇妙な外見をした男を怪訝に見ている。だが、しばらくして第三皇子だと気付いたらしく、慌てて頭を下げた。

「はっ、皇帝陛下はただいま晚餐の最中でござります！」

「入るよ」

皇帝の子息の顔を忘れるのは近衛兵としては失格だが、一年に数度しか上洛しないエロールは咎めようとしなかつた。もちろん手間だつたからではあるが。

「失礼します、父上。エロール・レイス・アルチエーロ・ベネレス
クでござります」

一年ぶりにエロールは頭を下げた。返事は無い。恐る恐る顔を上げると、一番会いたくない男が長机に一人で座つて食事をしていた。異母兄弟がないことに、彼はひとまずは安堵した。

「父上、どのようなご用件でしょうか」

再度エロールが呼びかけると、男は顔だけを向けてきた。深いしわが刻まれているにも関わらず、黒く生え際の整つている髪を持つ、いかにも皇帝らしい風貌の老人は、久しぶりに顔を見た息子に挨拶

もせずに一言だけ言った。

「……近いうちに、お前には婚姻してもいい」
推測は当つていた。それでも改めて告げられると少し身体が硬くなつた。

「相手は、教皇の一人娘だ」

「教皇様のお嬢様ですか」

これは意外だった。貴族の娘が相手だとばかり考えていたエロー
ルは虚をつかれて唇をかんだ。だが、それ以上に意外なことに気が
ついてしまつた。

「お待ちください、教皇様のお嬢様となると

「二人の兄の嫁は年下だつた。だが、せいぜい一つか二つだ。ほと
んど同じ年のようなものだ。
しかし。

「ロマリア様はまだ 八歳ではありませんか

「二人の年の差は十一だつた。

それでも皇帝は何も言わない。ただ沈黙しているだけで、無言で
圧力をかけてくる。いくらエロールが講義しても決定事項は覆らな
いのだ。

第一話 ～聖少女との邂逅～

王宮から館に着いた頃にはすでに周囲は漆黒の闇に包まれていた。すでに近隣の村からは物音一つせず、櫓から見張る兵士以外には人気が無い。普段から陰鬱な影を帯びている自らの館だが、外から見ると改めて不気味だと、エロールは自嘲した。まるで奇妙な外見をしている自分ようだ。

「お帰りなさいませ、エロール様」

まるで計算されたように館の扉が、ティファンヌによつて開かれた。彼女は燭台を片手に頭を下げた。他に明かりが無いためか、蠅燭一本でも眩しく感じられた。

「手間を取らせたな、ティファンヌ」

「いえ、とんでもございません」

二人は並んで歩いた。使用人が主人と肩を並べるのは無礼極まりないが、エロールは伝えたいことがあつたので何も咎めることはしなかった。階段を上り二階へ登り、それから一番奥の部屋へたどり着いた。独房のようなエロールの寝室だつた。

「座りなさい」

部屋に唯一設置されている寝台に腰掛けたエロールは、隣をティファンヌに進めた。彼女は逡巡したが、失礼します、と一礼してから座つた。

「ティファンヌ、君は独り身だったか

「……そうですが」

何の脈絡のない問いに、ティファンヌは違和感を覚えた。我が聰明な雇い主が意味の無い戯言を言うために、普段は入室を禁じている寝室に呼び出すとは思えなかつた。ならば何かしらの意図があるはずだが、彼女には推測できなかつた。

考えあぐねているうちに、エロールから問い合わせの意味が明かされる。

「実は、婚約を命じられた。相手は教皇の一人娘であるロマリアと

「 いう少女だ」

「 婚約……ですか」

一瞬にしてティファンヌの表情が強張る。第三皇子から結婚にして相談を受けると思わなかつた彼女としては、一の句がつなげずにいた。自分が未婚であるからではなく、王族の婚姻について自分がどうな一使用人が相談を受けていいものだらうかという役不足感が彼女を困惑させた。

「 確かに、そろそろ妻を娶^{めと}る時期だらうとは考えていた。もちろん覚悟もしていたよ。だが、いくら私でも、八歳の少女を妻に迎えるとは仰天したよ」

「 は、八歳」

声を張り上げそうになるのを、ティファンヌは必死で堪えた。それでも衝撃の年齢に、まことに無礼ながら皇帝陛下の考えを疑わざるを得なかつた。

少女と聞いてはいたが、十八歳程度だと考えていたが、それが普通だ。どれだけ若くても十五歳を迎える前に婚姻するなど、ティファンヌが知る限りでは前例がなかつた。八歳といえば、まだ初潮前。自分が八歳の頃には、まだ両親と仲良く寝ていた、彼女にとつて八歳とはその程度の年齢だ。そんな穢れ無き少女が、一回りも年上の男の妻になる。

エロールを嫌つているわけではないティファンヌだつたが、今回ばかりはそのロマリアという少女に同情した。

「 無論だが、父上の決定を覆せるだけの立場ではない私だ。明後日からは、ロマリアという少女がこの館で生活することまで決められてしまつたよ」

「 明後日ですか……」

たとえ第三皇子だらうと皇帝には逆らえない。エロールが少女との婚姻を望んだわけではないのだ。一瞬でも雇い主を軽蔑した自分を恥じ、ティファンヌは声にせず謝罪した。

「 それで、必要なものが増えるはずだ。面倒だらうが、明日までに、

女性から見て必要だと思われるものを準備して欲しい。金額を気にせず、高級品を選びなさい。相手は教皇の一人娘だ、私のような化け物とは育ちが違う

伝えることを伝えたエロールはそれ以上は口を開かずに、着替えすらせずに寝台に潜り込んだ。頭まで隠してしまった彼の表情はそれ以上窺いることはできなかつた。

時間は矢のように過ぎた。

緊張しているのだろうか、エロールはいつもより早く目が覚めた。それでもすでにティファンヌは館の掃除を終えていた。働き者な使用者に、エロールは改めて感嘆した。彼女はどれだけの時間を眠ることができるのでだろうか。

「おはようございます、エロール様」

存在に気がついたティファンヌはまだ口が昇つてもいないので反射的にカーテンを閉めた。少しの日光でも、エロールにとつては好ましくないからだ。

「ロマリア様は、明け方には到着なさるそうです。まだ時間はありますが、準備を致しましょ

う

着替えを済ませる前に、今日は朝から身体を洗うために水場に向かつた。綺麗好きなエロールは普段から欠かさなかつたが、いつも昼ばかりで朝に行つるのは初めてだつた。水が通常よりも冷たいからだ。

案の定、水は冷たく、痩身のエロールは何度も身体を震わせた。髪を洗い終える頃には震えが止まらなくなつていて。ティファンヌは素早く全身を拭き、厚手のガウンを羽織らせた。

「着替えの後は、御髪を整えさせていただきます」

「すまないな」

いつも通りの白い上下に身を纏い、化粧台に座るまでに要した時間はわずかだつた。すでに震えが収まつてゐるのもティファンヌの行動が迅速だつたからだ。

「このよだんな私の姿をみた少女は、どのような反応をするだらうか」
独り言のように呟くエロール。ティファンヌは返事をしない。
幼いころから外見で差別を受けてきたエロールは時々このような独り言を口にする。一見すると相手の反応を楽しみにしているようだが、実際には逆で、一切触れて欲しいとは思つていい。その重いとは裏腹に、誰もが初見では表情を強張らせる。ティファンヌですらも最初は奥歯をかみ締めたほどだ。

「怖がつて泣かなければいいが」

そんな台詞を口にしてゐるが。本当に泣きたいのは自分自身だと
いふことをエロールはまだ知らない。彼は物心ついたころから一度
も泣いたことがなかつた。

約束の時が來た。

エロールはロマリアが待つ部屋へゆつくりと赴く。相手はまだ子ども、どのように相手をすればいいか短時間で、その聰明な頭脳を駆使して考える。

数手考へ、その中から一番無難な方法を選んだ。優しく語り掛けつつ徐々に心を開いてもらうのが一番だらう。

扉の前に立ち、それから再度確認を行う。そして扉を軽く叩いた。

「どうぞ」

消えそななか細い声が聞こえた。少し舌足らずな声だ。

「失礼する」

貴族としての威儀を見せるかのように迷い無く扉を開いた。十人は楽に座れる長机に少女が座つてゐる。幸運なことに背を向けていた。

「こんにちは、ロマリア」

エロールは椅子の隣に寄り、ゆっくりと腰を折った。そして肩まである金髪を生やしている小さな頭を撫でてやつた。

「あつ　　」

ロマリアは一瞬驚いたように身体を震わせたが、すぐに目を閉じて大人しくなつた。

「私がエロールだよ。ほら、こっちを向いて……」

まだ柔らかい頬を両手で支えるように持ち、ゆっくりと顔の向きを変えた。それでもロマリアはまだうつとりと目を閉じていた。

「どうしたんだい、目を開けてくれないかい」

頬ラインを撫ぜ、そのまま首まで右手を滑らせる。小さな肩に行くと、可愛らしい鎖骨に当つた。するとロマリアは覚醒した。

「あつ、すみません」

「　あつ、ああ」

目が開かれた。それだけで、ロマリアの魅力が膨れ上がつた。まだ幼い顔立ちながら、金色の大きな瞳と形のいい鼻と口が、まるで陶磁器のように美しい肌をした小顔に納まつていて。触つていて分かつたが、その髪はエロールよりもさらさらしていた。手櫛をしても、指の間から髪が逃げるように素通りする。本当に八歳だろうかと疑いそうになるような、どこか神聖なほど清楚な雰囲気を發している。

二人はお互いに見つめあつてしばらく沈黙した。

ロマリアはエロールの特異な外見を怖がるどころか、まるで気にしていないようだ。彼女の視線は全くぶれることなく一直線にある部位を見ている。まるで極限まで集中した剣の達人のような眼差しに、言いうの無い威厳を感じたエロールは、彼女を子どもとして扱おうとした自分のあせはかさに笑いたくなつた。

「ところで　　」

子ども扱いした口調は止めよう。そう決めて口火を切ろうとしたエロールだったが、やわらかい少女の温もりにそれは憚られた。はぶか

「んつ

自らの半分も生きていな少女によつてエロールは脣を奪られた。
それでも怒りや驚きは湧いてこない。むしろ喜びに似た感情が、自らの心の水面に波紋を生んだように彼は感じた。

第三話 ～夜の小川～

陶磁器のよつて白い肌は、まるで熟れた林檎のよつて真つ赤になつてゐる。血ら顔を離したロマリアは恥じらひながらも、まだ残る余韻に浸つてゐる。一見すると真面目だが、すぐに何かに気を取られてしまつ性格のよつて、正面で放心しているHロールのことなど眼中になつてゐない。

「ロマリア、私の話を聞きなさい」

忘我していたHロールが我に返つた。彼は唇をハンカチでそつと拭い、それからロマリアの肩を優しくゆすつた。

「あつ

同じくロマリアも覚醒した。その途端に自分の行動を思い返してしまつたのだろうか、顔だけでなく耳まで赤くなつていく。目線はどんぐん下がり、ついには膝を抱えて丸まつてしまつた。

「じめんなさい

年相応の台詞が聞こえ、Hロールは少し安堵した。初対面の男性の唇を奪つようなどもなら、子どもらしくない言葉を使って話すのだろうかと心配したが杞憂だったようだ。相手がまだ子どもなら、やはり子ども扱いすることに抵抗はいらない。

「どうして、私にあんなことをしたのかな、ロマリア」

「えつ、それは、その……。私は、伯爵様のお嫁さんだから……」

「お嫁さん……か」

血らの口元が緩んでいくのを、Hロールは隠そつとせざるに小さく苦笑した。

「あ、あの、どうして笑つてらつしゃるのですか？」

「いや、すまない。お嫁さんという幼稚な言い回しが、君のような子どもには似合つていたからつい」

「や、そんな、私はもう子どもじや

「ほり、いい子だよ」

エロールは再び頭を撫ぜた。今度は馬鹿にするように、優しいこ
とばをかけながら長く撫でた。ロマリアは抵抗しようとするが、子
どもとしての本能といつべきものには逆らえず、徐々に心奪われて
いった。

「さあ、館を案内してあげるから、おいで」

「はい、伯爵様」

完全にロマリアを籠絡したと考えたエロールは彼女を伴つて部屋
を出た。

自分の寝室以外の一階部屋を全て案内したエロールは、ロマリア
の手を握りながら階段を降りていた。すると、階段の袂でティファ
ンヌが立っていた。彼女は一礼してから道を開けた。

「ああ、忘れていた」

階段を降りてしまつてからエロールは、まだティファンヌを紹介
していないことに気が付いた。今後この館で生活することになれば
彼女のことも教えておかねばならない。

「紹介するよ、彼女はティファンヌだ。私の身の回りの世話をさせ
ている使用人だ」

「ティファンヌです、ロマリア様」

主よりも高い場所にいるわけにはいかないティファンヌは素早く
一人の元に近づいた。

「ティファンヌさんですか？」

同じ女性とはいえ、子どもと大人である二人の身長さは歴然とし
ていて、ロマリアは完全に見上げる形となつた。ブロンドの髪を腰
まで垂らした、物静かで大人しい印象を受ける顔立ちの美人がいた。
夫の周囲にはこんなに綺麗な女性がいて、自分のような子どもが相
手にされるか不安が生まれた。

「どうぞ、私のことは呼び捨てでお願いします。身分が違います

すので」

ロマリアの目線にあわせるかのようにティファンヌは身を屈めた。大人の女性特有の香りが鼻をついた。

「よかつたね、ロマリア。同じ女性なら、君も相談できるだらうから頼りにするといい。もつとも、気のような子どもが、ティファンヌのような大人と会話が弾むとは思えないがね」

「わ、私は、子どもじゅあります」

「いい子だよ、ロマリア」

一見すると嫌がらせをしているようだが、エロールからすれば、ロマリアの頭を撫でることはそれなりに嬉しいことだつた。綺麗な金髪が指の間をすり抜ける感触は気持ちがよく、髪が揺れることで甘い香りを楽しむことができるからだ。

「さあ、今度は一階を案内しよう。夜には外を案内してあげるよ

雲ひとつ無い星空だった。

柔らかく小さな手を引くエロールは、ときどきロマリアの表情を確認しながら進んだ。すでに館からはかなり離れていた。夜間にこれ以上遠出するのは危険だと判断し、近くの小川で腰を下ろした。

「伯爵様の領土は、あの町までですか？」

指差された先には、エロールの領土で最も栄えている町だつた。彼が始めてこの領土を与えられた四年前に興した町であり、その当時は細々と商いをしていた寂れた町だつた。だが、エロールの指導の下で財政再建に取り組んだ結果、数年で大陸有数の商業町に発展した。

重税を課すだけの領主もいるが、そんな愚かなことをせずともこの方法なら税を割高にすることさえできた。それだけでなく、領民からもいい領主として見られる利点がある。それにより受けられる恩恵はさまざまあり、それらもまた、エロールは聰明な頭脳を駆使

して有効活用していた。

「いや、違うよ。私の領土はあの山の向こうまでだよ」

「あの山までですか？ 伯爵としての領土としては少し広いですね」「ほお、とエロールは関心した。さすがに教皇の一人娘となれば爵位についても詳しい。だが、そんなところも子どもらしくなく、少し意地悪をする。

「教皇領と比べれば小さなものだらう、教皇の一人娘殿」

「そ、そんなつもりで言つたわけではないです！」

「いいんだよ、私は気にしていないから」

露骨に爽やかな笑顔を浮かべながらさりに苛める。

「子どもの言つたことには寛容な態度で接するのが大人だからね」「わ、私は……」

ロマリアの声が弱々しくなる。彼女は身体を丸めて俯いた。

「ほら、子どもは泣いてもいいんだよ。いい子だね、ローラン」

「私は子どもじやありません！」

決して大声で無いにも関わらず、その声はエロールに響いた。いや、正確には彼の心に響いた。

「こ、子ども扱いされたくないから、初対面で唇を奪つたんです。伯爵様も嬉しそうにしてらしゃいましたよ？」

「……」

「もしも、私が子どもなら、伯爵様は子どもに興奮するような変態だといふことですか？」

変態。

その言葉が、エロールの理性を一瞬だけ吹き飛ばしてしまった。

「なら、君が大人か試してみよう」

「えつ……」

醜悪に笑うエロールの姿に、ロマリアは齧えた。次の瞬間、彼女は力づくで押し倒された。

「君が大人なら、私を受け入れができるだらう。さあ、見せてみなさい」

「えっ、それって」

その言葉の意味するところをロマリアは理解していた。婚姻が決定してすぐに色々な教育をされたためだ。だが、それがこれほど早くにしなければいけないとは思つていなかつた。

「ほら、やはり君は子どもだ」

まるで自分を慰めるかのようにロマリアの細くて白い足を撫でていたが、エロールは興ざめしたように解放した。最後に太ももを一度舐めた。

身体の自由を取り戻したロマリアは涙が湧いてくるのを感じた。

「やつぱり子どもだ、大人はこの程度で泣きはしないよ」

最後につきはなつようと言つたエロールは、これで確実に破談になると確信した。これでこの穢れ無き聖女は自由になれる。自分のような化け物じみた外見の男に抱かれるよりは、せめて末の弟にでも抱かれたほうが幸せだろう。自分には、この少女を汚さない自身がなかつた。

だが、それでもロマリアは逃げなかつた。

「ダメです、私を子ども扱いするかぎり、伯爵さまから離れません」背後からエロールを包み込むように、ロマリアは両腕を回して抱きついた。同時に甘い香りがエロールの理性を復帰させた。

「……すまない、ロマリア」

彼は自分の行いを恥じた。

自分が不幸だと考えていた自分を冷笑した。

自分と同じほどに不幸な少女がすぐ傍にいたことが、彼に温もりを与えていた。

第四話 ～家族のために～

小川での会話から数日後。エロールとロマリアは同じ机で朝食を食べていた。隣ではティファンヌが直立不動で控えている。

「ロマリア、残さず食べなさい。大人ならできるだろ?」

ロマリアはエロールが気になり、満足に食事が進んでいない。と言つのも、彼の服装が余所行きの正装だったからだ。

「あの、伯爵様……」

「どうしたんだい」

「その服ですけど……」

貴族は普段着ですら高級な品を選んでいる。エロールも例外ではなく、普段から身なりには気を使つていて。だが、今日の服は全体的に豪華だつた。白を基調としていることは変わらないが、ボタンには綺麗な彫刻が施されてあり、清潔なだけでなく気品がある。指には王家の紋章があしらわれた指輪がされている。彼が皇位継承者の一人であることを表すものだ。

「ああ、いつもと違うから驚いているんだね。今日は、久しぶりに仕事をしなければいけないから、それなりの服装でないといけないんだよ」

「お仕事ですか?」

「まだ教えていなかつたね、私は正五位上帝国図書長の位を預いているんだよ」

「図書長ですか?」

身分不相応だと思つた。皇帝の子息であり第四皇位継承者である人間が任されるような仕事ではない。この程度は、庶民上がりの官吏が任されるものだ。彼の兄弟は、国を動かすほどいの要職に就いているといつのに。

「まともに仕事をするのは四年ぶりだよ」

「よ、四年ぶりですか?」

さらりと言つたようだが、ロマリアからすれば軽く受け流せる言葉ではなかつた。

「どうして、四年間も休職されていたのですか？」

「いくらなんでも四年も休職することなどありえない、エロールが病弱な部類に入つてしようと、最低限の執務はこなさなくてはならないはずだ。」

「代理を派遣していたんだよ」

「あつ、代理ですか」

意外とあつさりとした理由に、ロマリアは少し拍子抜けした。だが、どうして今頃になつて復職する気になつたのか疑問になつた。「復職した理由か……。収入が必要だからだよ。私が領主だといつても、徵収できる額には限度があるからね。それに、半分は国に納める義務があるから、そこまで豪遊することはできないんだよ。それ」

「それに？」

「家族が増えると、支出も増えてしまつだろ？」

「あつ」

「だから、私は眞面目に働くことに決めたよ。ロマリアには楽しく生活してもらいたいからね。それに、教皇の一人娘に惨めな思いをさせてしまつたら、私の立場が無いからね」

一つ目の理由は付け加えたような雰囲気だつた。優しさを素直に表現することにまだ抵抗が残つてゐるようで、時々目が泳いでいる。そんなエロールの姿が、ロマリアは少し可笑しくて笑つた。

「……どうして笑つているんだい」

心外といった口調で、エロールが首を傾げた。自分の目が泳いでいる自覚がないのだろう。

「い、いえ、何でもありません」

ロマリアは必死に誤魔化そうと俯いた。だが、一回りも年上の男が、自分のような少女を本氣で大切にしようとする姿に、どうしても笑いが止まらなかつた。

帝都に到着したのは昼過ぎだった。一年に一度だけしか訪れない帝都に、すでに二回も来てしまったことに、エロールは自分のことながら不思議だった。空は一面の曇り空で、日光を気にする必要は無かった。

王宮には入らず、隣接している巨大な建物に入った。中には殆ど人がおらず閑散としていて、働いている下級官吏たちを除けば不気味に静かだった。身の丈の何倍もある本棚はまるで壁のように立ちはだかり、そこに納まる本も膨大な数だ。帝国中の出版物を揃えているだけはある。

エロールは下級官吏たちにも挨拶を欠かさず、一度室内を回つてから執務室に入ろうとした。

「よお、久しぶりの職場復帰だな」

扉を開けようとした瞬間、どこからか不愉快な声が聞こえてきた。振り替えると同時に、下の階から人影が飛んできた。

「はあ、相変わらず白いな。すこしは運動しろ、運動」

一階から階段すら使わずに五階まで跳躍してきた男は、エロールがよく知る人物だった。いつものように手入が行き届いている長い金髪、襟元が薔薇の花弁のように広がっている普段着を細身の身体に纏っている。だが、その身体には細身ながらも十分な筋肉がついていることも、エロールは知っていた。

「相変わらず、私を馬鹿にしているな、ローゼン・バルトシュタイン」

「『辺境伯』までつけて呼んで欲しいな、エロール」

口元だけを露骨に緩ませながら、鍔に薔薇の形の彫刻がほどこされている愛刀ぶら下げながらローゼンは近づいてきた。

「冷やかしなら帰つてほしいのだが。これでも、今日からは真面目に職務に取り組もうとしているのでね。ローゼン陪臣長も、少しは

姉上の命令に従つて職務をしてはどうか。姉上をなだめるのに、私はそれなりに苦労しているのですよ

「はつ、偉そうに。お前は正五位上、私は正三位だぞ。身分をわきまえてはどうだ？」

「剣の柄が胸にあたる。軽い力だが、それでも不快だ。

「ああ、すまないね、ローゼン。でも、君は薔薇と呼ばれたほうがお気に召すだろう

「ほお、よく俺を理解しているな」

「それは当然。私たちは変態仲間だろ？」

「つは、確かに、お前は少女の裸にしか興味のない変態だった。はつはは」

「君こそ、茨に包まれて苦しむ女性を見て興奮する変態だったね」
一人は肩を震わせて笑つた。お互いに相手を貶すのではなく、自分の性癖を確認するのが、友人である彼らの挨拶だった。

「お前が、八歳の少女と婚姻したと聞いたが、すでに調教は済ませたのか」

「馬鹿な。相手は教皇の一人娘だから、うかつ迂闊に汚すわけにはいかないよ」

「つは、お前ほどの変態が、あんなに可愛らしい少女を舐めたりしないとは、病氣にでもなつたか。いや、お前はすでに病氣だつたな」「私を甘く見るな、すでに太ももを舐めている。白くて細くて、甘い香りがしたよ」

「味は」

「今までで最高だつたよ。早く、他の箇所も舐めてみたいよ

「つは、例えばどこだ」

「それは言えないよ。私が変態だといつ」とは、ティファンヌにも秘密だからね」

「おつ、ティファンヌか。あの女も良いよな、庶民のくせに、半端な貴族の娘よりも美人だ。今度、俺に一晩譲れよ」

二人は白い歯を見せて高笑いする。人に暴露できない性癖を持つ

もの同士、彼らは幼いころより深く交流していた。エロールからすれば、ローゼンが五つ年上であつても、異母兄たちよりは親しみをもつていた。それは成人してからも変わらない。

「それで何をするんだい」

「つは、楽しみを教えるわけにはいかないな」

二人の性癖も変わらない。毎回会うたびに、二人でこっそりとこうして会話する。

それからも二人は話しつづけ、お互に話す内容が途切れまるまで、お互いの変態さを誇らしげに語つた。

「ああ、そろそろ時間だ。失礼するよ、ローゼン変態

「つは、またなエロール変態」

第五話 ～外出～

天気は曇り。作物を育てなくてはいけない農民からすればあまり好ましくない天候だが、日光を嫌うエロールからすれば絶好の外出日和だつた。彼はいつも通りの上下白に統一した服装で鏡の前に立つていた。

「少し、髪型を変えてみようか……」

急に思いついたことだったが、考えてみれば髪形を変えるのは初めてだつた。肩までの長さに維持しているだけで、縛つたりしたことはらなかつた。

「と言つても、どうすればいいだらうか」

その手の技術が一切無いので、とりあえず目に付いた櫛くしで髪を梳くとくかす。

特に変化なし。

前髪の分け目を変えようと両手でいじる。すぐに元通りになり、これも変化なし。

化粧台に置かれていた髪結い紐で後ろ髪を縛りつとする。身体が硬いので満足に手が回せず、変化なし。

「……不毛だな」

肩が外れそうになつたところで、エロールは落伍した。毎日付け替える白い手袋をはめて部屋を出た。

「あ、伯爵様、おはよひざわこます」

一階に下りると、ロマリアはすでに準備を済ませていた。真っ白な修道服を纏まつつた彼女の隣では、編み籠かごをさげたティファンヌが立つてゐる。

「おはよひざわこます、エロール様」

「ああ、おはよう」

挨拶しながら失礼だが、エロールはもう一人を探していた。二人と一緒にではないようだが、近くに姿は見えない。

「俺は挨拶なしか？」

柱の影から探していた男が顔を出した。薔薇の花弁のようを開いた襟が特徴の男は、エロールの古い友人であるローゼン・バルトシュタインだつた。何が嬉しいのだろうか、その声音は朝から機嫌が良さそうだ。いつものように一見爽やかに微笑んでいる。

「隠れている相手に挨拶などできないだろう。それに、私から挨拶しなければいけない理由はない」

階段を降りたばかりのエロールは真っ直ぐにローゼンに歩み寄る。

「それに、これは家族での外出だ。君を呼んだ覚えはない」

「つは、俺が護衛してやらないと危ないだろ？ 役に立たない兵士を連れて行くよりも安全だぜ」

今更ながらに、エロールは外出の話をしたことを後悔した。知つてしまつたローゼンはこうして無理矢理に参加しようとしている。それでも、夫の友人と会つてみたいというロマリアの要望を優先して、エロールは口だけの文句で押さえている。

それに、ローゼンが並みの兵士より格段に役立つことは事実だ。帝国全土でも十人程度しか存在しない『聖騎士』の位を、この変態薔薇男は叙位されている。純粹な剣術ならば、大の男が数十人束になつても問題にならない強さだと言える。

「まあ、いいだろう。いつまでも馬車を待たせるのも忍びないから、そろそろ出よう」

潮時だと感じたエロールは、先導するよつに歩き出した。

「つは、相変わらず優しいな、おい」

背後からからかう声が聞こえたが、振り返らずに無視した。

「なあ、ロマリア。もうエロールとは寝たのか？」

「いえ、まだ寝室は別ですけど……。正式な婚姻まではそれが普通ですね？」

「まあ、そりゃそうだけど」

言葉の意味が正しく伝わらなかつたようで、ロマリアからは清純な回答が返つてきた。やはりまだ子どもだな、とローゼンは内心でほくそ笑んだ。

エロールは近くの河原で対岸を、まるで死人のように眺めていたので、ローゼンはさらに質問を続けた。

「唇は重ねたのか？」

「あっ、それは……」

自分からしたとは言えずに、ロマリアは返事に困つて俯いた。両膝を抱えて身体を小さくする。

「まあ、いいか。そのうひ嫌でも、毎日する」とになるからな

「そうでしょうか？」

「絶対なるな。俺は独身だけど、知り合いの貴族は殆どが毎日だぜ」
本当は、貴族が毎日それらの行為をするのは、正妻となつた愛の無い相手とではなく、容姿に優れた妾だ。だが、ローゼンはそこまでいちいち説明するような細かい男ではなかつた。もちろん、少女を気遣つたわけではない。

「伯爵様は、私に何をして欲しいのでしょうか？」

「それは……」

発達途上の身体で奉仕することだよ、あの男は君のような少女に興奮する変態だからね」とは言えず、ローゼンは考えた。変態的趣味で質問をしている自分とは違い、少女が真剣に聞いていことは、目を見れば一目両全だつた。ひとまずは変態欲求に蓋をし、相応の態度で返事をする。

「とりあえず、髪型を変えてみればどうだ？」

「髪型ですか？ 伯爵様は、私のような髪型が嫌いなんですか？」

「いや、お前じゃなくて、エロール自身だ」

「伯父様も血頭ですか？」

男性貴族の中では最上級の容姿を持つているエロールだが、自らの目の色や髪の色を気にするあまりに、必要以上に自分を飾ることを避けっていた。古くから親交のあるローゼンが一番に考えた解決策は、偶然にも今朝のエロールがしていたことと一致していた。

「とりあえず、後ろ髪をリボンで飾つてやれよ。男でリボンが似合
うなんて、あの変エロールくらいだろうからな」

「でも、怒られたりしませんか？」

「そ、もうですか？ なり早速

意を決して立ち上がったロマリア。普段から懷に忍ばせてある赤色の布を取り出し。エロールの背後に忍び寄る。

一步一步一步一步一步

確實に距離は詰められているが、エロールは振り返る素振りもない。領内でも手がつけられてない小川に見蕩れているにしても反応がない。

「死んでたりしてな、つは」

遠目で見ていたローゼンだが、軽口を叩いている割には二人が気になっていた。皮肉な笑顔ながらにしつかりと見据えている。

「あ、あの伯爵様！」

ロマリアは意を決して声をかけた。いつでも縛れるまいにしつかりと布を握り締めている。

ゆつづとHホールが、白髪をなびかせながら振り返る。

「どうしたんだい、お腹が減つたのかい」

「えっ、あの、その、これは
そうです」

「それなら、早くティファンヌのところへ行くといい。彼女が今日の昼食を持っているからね」

「あ、その、はい」

完全に誤解されたロマリアは否定できずに、しぶしぶながら元いた場所に引き下がるが、ローゼンは呆れて口を閉じれずについた。

「どれだけ、空気を察知できねえんだよ。子ども相手ならいいが、大人なら捨てられるぞ」
ローゼンは、隣でロマリアを待つ女性使用人を見てそんなことを考えた。

第六話　～妹～

家族での外出から数日後。エロールはいつもどおりに帝国図書館で書籍の整理を行っていた。よほど暇のなのだろうか、ローゼンは今日も遊びに来ている。一人は談笑しながら、昨日ティファンヌに用意させた紅茶を楽しんでいた。

「それで、その髪型はどうしたんだ？」

今日のエロールはいつもと違った、髪型などには無頓着だった彼が、リボンで後ろ髪をまとめていた。男にリボンが似合うはずもないと思っていたローゼンだったが、あまりにも似合いすぎているので、笑うに笑えずにいた。

「ああ、これかい」

真っ白な頬が少し赤くなり、エロールは嬉しそうに今朝の出来事を話した。

「実は、ロマリアが整えてくれてね。まだ子どもだから小さいだろう。踏み台にを使って私の身長に合わせようとする姿が、どうしようもなく愛おしくてね。それにとても良い匂いがしてね、一瞬で眠気が覚めたよ。髪を触る小さな手も気持ちが良かつたよ。時々、『あつ』とか『わつ』とか言いながら健気に整えてくれたよ」

「つは、よく我慢したな」

「私もそう思うよ。彼女が教皇の一人娘じゃなければ、存分に味わえるというのに残念だよ」

心底悔しそうな表情で紅茶を啜る。

「そういえば、一年前に玩具だった少女はどうなった？」

「ああ、あの出来損ないか」

今から一年前、エロールは別荘で一人の少女を使用人として雇っていた。使用人といつても扱いは玩具同前で、気が向くままに弄んでもいた。弄んでいたといつても、女性としての尊厳を傷つけることまではしていないが。

「大変だったよ。すぐに失敗するから、結局は私が手伝うことになるんだ。まあ、申し訳なさそうにうつむく姿を見ると怒りなど湧いてこなかつたけれどね」

「だからどうしたんだよ」

「故郷に帰らせたよ。元々一年間だけの奉公だつたからね」「惜しかつただろ?」

「当時はね。でも、今はロマリアがいるから関係ないよ」「一度話を切り上げ、話題の転向を図る。切り出したのはエロールだった。

「イゼルナを覚えているか」

「お前の妹だろ? 第二皇女様だろ、今年の叙位式で話したな」「どうも、私と会いたがつていてるそうだ」

「つは、あいつが子どものころに散々可愛がつていたからな」

今年で十六歳になるイゼルナだが、幼少期に自分を可愛がつてくれたエロールを異常に慕い、いつまでも子どものような甘え方をする。最後に会つたのが去年の冬だつたが、そのときの甘え方を思い出すと、今でも恥ずかしくなる。

「まったく、いい年をした女性に抱きつかれても困るよ」

「普通、あんなに可愛い妹に好かれるなんて最高だけどな。俺だったら絶対に我慢できねえな」

バルトシュタイン家の一人息子として生まれたローゼンは肩をすくめた。

「いや、すでにイゼルナに魅力はないよ。胸もそれなりに大きくなつていてるし、すでに大人と変わらないほどの身体だ。顔からもあどけなさが消えかかっているよ。身長も私ほどだから、無理矢理に頬ずりしてきて煩わしいよ」

「つは、とことん変態だな」

「君もだろう、ローゼン」

変態二人はいやらしい笑みを浮かべた。お互いに口外できない性癖を抱えているだけに、この空間ほど羽伸ばしになる場所は無い。

仕事は面倒だが、復帰した意味はあったとHロールは割り切つていた。

「それで、イゼルナと会うのか？」

「遅かれ早かれ、いづれは会わなければいけないからね」

「そろそろ、禁断の兄妹になりそうだな」

「口を慎め。そこまで望むようなイゼルナではない。彼女は、あくまで兄としての私を慕っているだけだ。抱きつくことがあっても、脱いだりはしない」

「つは、つまらねえな」

「君を楽しませる必要はない」

ここで話題が途切れた。一人はいつも通りに、話題がなくなると早々に別れた。その別れ際、お互いを『変態』と呼び合つて。

「明日、イゼルナを招待するから、食事を余計に用意してくれ」
館に着くなり、エロールはティファンヌに命令した。彼女は一礼して了解の意を示した。

「おかえりなさい、伯爵様」

「ああ、ただいま」

「あの、イゼルナ様つて……」

聞いていたのだろう、ロマリアが尋ねてくる。Hロールはできるだけ簡単に説明した。

「私の妹だよ。あした遊びにくるんだ。ロマリアからすれば義理の妹だね」

「でも、私よりも年上ですよね？」

「ああ、そうだけれど、心配しなくてもいい。とても優しいからね

「そうですか……私がんばります！」

自分に異常なほど甘えたがる妹、それが自分の幼な妻と仲良くできるだろ？ そんな心配をするエロールは、ローゼンとの会話を

懇こびしづながい酒を飲んでいた。仲良くなつてくれねばよここが。

第六話 ～妹～（後書き）

感想があればお願ひします。作品に関するアドバイスやリクエストも歓迎します。

第七話 ～衝突～

晚餐が終わりエロールは先んじて席を立つた。まだ食事を続いているイゼルナは一言も話さずにロマリアを凝視している。その視線に気付いたロマリアは視線を落として眼を逸らした。

「ティファンヌ、イゼルナとロマリアを見ていてくれ。妹は食事中に話さないように躊躇られているから心配ないとと思うが、私のことになると我を忘れるからね」

「はい、承知しました」

「すまないね」

聞こえないように細心の注意を払いながら小声で会話する。エロールは部屋を出るとそのまま応接室に足を運んだ。そろそろ待たせている男が飽きだして徘徊しかねない。

「待たせてしまったね、ローゼン」

扉を開けると、偉そうにソファーに寝そべる男がいた。大人三人用のソファーも、ローゼンが寝転ぶと小さい。足が完全にはみ出ている。

「遅せえよ、飯くらい早く食え」

「私は食が細いから仕方ないだろう。これでも急いで片付けたつもりだ」

「つは、無理して死ぬなよ」

「黙れ、この変態が」

「つは、おまえ変態に言われたくねえよ」

いつも通りの挨拶を済ませてから本題に入る。

「それで、第一皇女様はどうだ?」

「まだ話していないよ。イゼルナは、食事中に会話をしないように

躊躇られたそうだからね」

「つは、愛しの兄上様ともまだ会話できずにいるのか。そんな状況で、ロマリアと一人にしてもいいのかよ。お前を取り合つて殺し合

いするかもしけねえぜ？」

一見すると「冗談のようなローザンの台詞だが、彼は冗談のつもりではなかつた。イゼルナがエロールに向ける愛情は並外れていて、過去にエロールの慰み物だつた女性が彼女に殺されたこともあつた。それだけに、例え公式な妻であり教皇の娘であつうと、イゼルナが強行に及ばないといふ保障は無い。

「私もそれは心配しているよ。でも、ティファンヌが注意してゐるから簡単にはイゼルナも動けないだろう。イゼルナはティファンヌの万能さをよく知つてゐるからね」

「ティファンヌを頼りすぎだろ、お前は。俺が一緒に居れば止めてやるぜ？ お前もそのほうが安心だろ？」

「その気持ちは嬉しいよ。でも、ロマリアが私の妻となる以上、色々と超えなければならない障害があるだろう。イゼルナは最初の障害だよ」

「おいおい、義妹を障害扱いしてもいいのかよ？」

「例えの話だよ」

「この部屋からでは向こうの音は聞こえない。もし何かがあつても駆けつけることはできない。エロールは久しぶりに味わう感覚に、普段は信じてもい神に心中で無事を祈つた。自分の考えた作戦が上手くいくように、と。

机の上の食事は全て片付けられた。イゼルナは口元を綺麗に拭き、口直しに水を飲んだ。

「あ、あの……」

か細い声でロマリアが話しかける。両手を机の下ですり合わせながら視線を泳がせる。

「ロマリア司祭」

イゼルナは、役職をつけてロマリアの名前を呼んだ。初対面の相

手を呼ぶには相応しいが、本来ならばエロールの妻である彼女は、年齢が低かるうとイゼルナの姉になる。その相手には、義姉上様と呼ぶのが相応しい。

あえて避けたイゼルナの意図。

それは。

「私は、あなたが兄上様の妻とは認めませんから」

「えつ
」

話し始めてわずか数秒での発言に、幼いロマリアは戸惑った。歓迎されていると考えていたわけではないが、ここまで正直に言われるとは思つていなかつた。どう返していいか分からずにはいるが、意識とは関係なく視線が下がる。

イゼルナはその動作を見逃さなかつた。

「兄上様のことなら、私は何でも知つてゐるわ

肩まで伸びる薄紫の髪を触りながら誇らしげに続ける。

「ロマリア司祭は、兄上様のことをどこまで知つていますか？」

「そ、それは……」

言葉に詰まるロマリア。イゼルナは勝ち誇つたような表情で立ち上がる。

「お話になりませんね。やはり、兄上様にはあなたのような幼女は似合いませんね。今までにも兄上様のお近くには女性がいましたけど、本当に兄上様が望んでいるのは、他でもなく私です」

勘違いを超えた誤解。だが、イゼルナは本気でそう信じていた。一人ぼっちで寂しい思いをした幼少時代に唯一遊んでくれたエロールだけが、今の彼女の存在理由であり。彼への思いに比べれば、神への信仰すら空虚だ。敬虔な信者であるイゼルナは、エロールのためならいつでも戒律を捨てる覚悟があつた。

「ティファンヌさん

「はい、イゼルナ様」

「悪いけど、この邪魔な幼女を早く寝かせて。私はこれから兄上様に朝まで話相手になつてもらうから」

「かしこまりました、イゼルナ様」

ティファンヌは機械的に答えて扉を開く。無表情な彼女だが、この場で何も起こらなかつたことに内心で安堵する。

「伯爵様と唇を重ねたことはありますか?」

回避したはずの危険が再び息を吹き返した。

「は?」

理解不能、といった表情でイゼルナが振り返る。

「お前なんかが、兄上様と唇を重ねたのか? 馬鹿な、ありえない。ふざけるな!」

優しげな顔立ちが一瞬で崩れ、嫉妬に狂つた女の顔になる。振り返つた勢いをそのままに大股で歩み寄り、ロマリアの肩を揺らす。「ふざけるな! 私が十六年間で一番欲しかつたものを、お前みたいな幼女が手に入れられるはずがないだろ? いい加減にしないと」

それ以上の台詞は、咄嗟に間に入つたティファンヌに止められた。イゼルナの利き腕である右手を押さえてから静かに説き伏せる。「エロール様から、もしもの時は止めるように仰せつかりました。これ以上、イゼルナ様がロマリア様に何かされようがされたら、全て報告させていただきます」

「し、使用者の分際で……」

第一皇女であるイゼルナからすれば、平民出身の使用者であるティファンヌに命令されているようで腹立たしい。普通なら近衛兵を呼んで肅清させるところだが、一人も兵士を配置していないエロールの館では不可能だつた。それ以上に、この会話が露見することをイゼルナは恐れた。

もしも、エロールに嫌われたら

もしも、エロールが口をきいてくれなくなつたら

もしも、一度と会えなくなつたら

さまざまな不安がイゼルナの脳裏を過ぎり、彼女の動きを止めた。イゼルナは崩れるように倒れ、叱られた子どものように泣きつむいてしまった。

「イゼルナ様、少々よろしいでしょうか 」

早々に切り替えたティファンヌは、事前にエロールから受けた命令通りにイゼルナに耳打ちした。

「 えつ、本当に兄上様が？」

「はい、昨夜お聞きしました」

たつた一言で、イゼルナの気持ちを安定させた。そこまでを見越していた自らの主に、ティファンヌは改めて感心せざるを得なかつた。

ロマリア今にも泣き出しそうな自分を押さえるために、唯一イゼルナよりもエロールを知っている箇所を触りながら堪えていた。

第八話 ～使用者～

「マリアとイゼルナが衝突してから数日後に、ローゼンは素知らぬ顔で訪ねてきた。門番のいない門をくぐり、屋敷に続く整備された小道を歩きながら、ローゼンは二階の部屋を見渡した。すべての窓はカーテンで覆われていて中を窺いることはできない。」

「ティファンヌ、エロールはいるか？」

途中でティファンヌを見つけたので声をかけた。彼女は、自分の腰ほどの高さの植木を手入れしていた。ローゼンの姿に気がつくと、作業の中止し早足で歩み寄った。

「いらっしゃいませ、バルトシュタイン辺境伯。申し訳ありません、エロール様は外出されています」

「あいつが外出？ 今日は仕事が無いはずだろ」

前日に会った際には、今日が休暇だと聞いていたのでローゼンは思わず肩すかしを食らった。残念そうに肩を揺らすと、ティファンヌは、是非ともお上がりくださいと頭を下げた。

「なら、お前が話し相手になつてくれよ」

「かしこまりました。準備をいたしますので、応接間でお待ちください」

ティファンヌは一礼して屋敷に消えた。残されたローゼンは、何気なく庭を見渡した。広い庭だが、どの植物も几帳面に手入れされている。使用者が一人しかいないこの屋敷で、この作業を行つた人間はティファンヌ以外には考えられない。容姿に優れているだけではなく、使用者として求められるよりも高度な技術を身につけているということだろう。それに比べて自分の使用者は情けないと、ローゼンは苦笑する。

まともなのは夜の世話だけだ

「お待たせしました、バルトショタイン辺境伯。今朝に仕入れた紅茶でござります」

無駄の無い動きで紅茶が注がれる。カップは装飾の類が無く、実用本位といった形だった。すぐにエロールの趣味だと、ローゼンは理解した。

「失礼でなければよろしいのですが、今日はどのような用件でしょうか？」エロール様がお帰りの際にお伝えさせていただきます」「あ？ そうだな……」

別に用事など無かつた。いつものように暇を消化するために会いにきただけだった。強いて言うなら、最近仕入れた女奴隸のことについてだつた。新しい奴隸が入るたびに、そのつどエロールに知らせていた。彼自身には大人の女子に興味がないので相槌を打つだけだが。

「輝かしい帝国の未来について語り合おうと思つて訪ねただけだ」本当のことを言つわけにもいかず、適当に思いついたことを口にした。皮肉にも、自分たちが最もどうでもいいと考えていることだつた。

「そうでしたか。さすがは皇族と陪臣長さまです。私のような浅学の庶民には考えもつかないような議論をなされるのでしょうか」「まあ、そうだ」

考えもつかないような内容という発想だけは正解だつた。八歳の妻に欲情するような変態と、大量の女奴隸を薔薇で痛めつけて喜ぶような変態の会話など、常人には想像できないだろう。

「私は、エロール様に仕えてから四年になります」

急にティファンヌが話題を変えた。その綺麗な黒髪が、普段は肩までかかっているにも関わらず、今日はしっかりと横で縛られていた。そのおかげで、少し冷たい雰囲気のある綺麗な顔立ちが、非常にはつきりと見えた。

「エロール様が十六歳になられた際に、このレイス領を陛下から下

賜され、同時に伯爵の位を賜つたそうです

「そらしいな」

その当時のことは覚えていた。エロールが成人した年に、バルトシュタイン家の家督を継いだからだ。陪臣長の官位に就いたのも同じ年だつた。

「エロール様の希望で、使用人として雇われたのは私一人でした。何故、私をお選びになつたか御存知ですか？」

「さあ？ 聞いてないな？」

自分よりも年上の女性を雇うことで、異常性欲を隠そうとしたのだろうとはすぐに察しがついた。しかし、他にも理由があるならば是非とも聞きたかった。

「私が、厳しそうな女性に見えたそうです」

理由を聞いて、ローゼンは第一皇女の顔を思い出した。

「それは、アレシアス第一皇女様に関係しているのか？」

「……」

返事は無かつた。皇族に対しての自分の個人的な見解を述べることを躊躇しているようだ。使用人だからというよりも、ティファーン又自身の忠誠心が許さないのだろう。

「気にするな。俺が個人的に知りたいだけだ。お前の意見を素直に言え」

「……恐らくは、バルトシュタイン辺境伯のお考えと同じでござります。エロール様は幼少より、アレシアス様に異常なほど偏愛されていましたとお聞きしています。その反動で、年上の女性に厳しくされたいとお考えになつたのだろうと……」

アレシアスがエロールに注ぐ愛は、姉弟の次元を超えていた。『偏愛』とされているが、その程度ではない。弟に無礼をした使用人、容姿を嘲笑つた貴族を、自らの手で殺害し、その親類を投獄したほどだ。事実、バルトシュタイン家創始以来から懇意にしていた男爵家が一夜にして改易されたこともある。当時まだ十三歳だったローゼンは初めて女性の恐ろしさを知り、一十五歳になつた今でも、ア

レシアスを畏怖している。

「アレシアス様とエロールの関係は、どこまで知っている？ 庶民たちも知っているのか？」

「それはございません。私は十三の頃より使用人として生活しているので、色々な噂を耳に挿む機会が多いからでございます。皇族の方々の噂が、庶民たちまでに届くことはありません」

「そうか……」

さほど皇族に忠誠を誓っているわけでもないが、下々に知られないないと分かると心配事が消えた。しかし、ティファンヌの表情は暗い。

「……ですが、使用人の間では、アレシアス様がエロール様と不義を犯したとの噂があります」

「うむ、俺の耳にも入っている……」

アレシアスは美人だ。身長が男性のローゼンより高く、女性の身で騎士の称号を得ていても、貴族からは人気がある。だから、そんな女性と関係があるエロールを、最初は羨ましく思っていた。しかし、今になつて考えてみれば恐ろしい。

「病弱な弟が愛らしくて仕方が無いんだろ」

エロールの異常性欲は、年上の女性に対する反動から生まれたのではないかとローゼンは推測していた。最初にエロールが手をつけた使用人は、その当時まだ十歳で、彼自身は十五歳だった。

「バルトシュタイン辺境伯は、エロール様をどのように見られますか？」

「……あいつなら昔から知っているが、最近は少し楽しそうだ。四年間も休職していた仕事にも復帰して、毎日懸命に働いているよ。俺との会話には、絶対にロマリアの名前を出すんだぜ？」

「ロマリア様が、エロール様に良い影響を与えていると？」

「多分な」

確信は無いが、少女を娶った喜びで浮かれているのではない。生きる希望を得たような様子だ。長い付き合いのローゼンだからこそ、

何気ない会話でも変化に気づけた。親友が好転していく」とは嬉しかつたが、その変化が寂しくもあった。

「ああ、そういえば」

不意に思い出したことがあり、ローゼンは辛氣臭い顔をやめた。ロマリアとイゼルナの衝突をどうやって収めたかが気になったのだ。

「あの夜の衝突を収めた方法ですか?」

「教えてくれ。かなり気になる」

「事前に仰せつかつたことをこなしたまでです。『これからは、いつでも職場に遊びにいで』と伝えるように指示されました」

「なるほど、さすがはエロール」

自分の親友ながらに、イゼルナの弱点を突いた言葉だつた。非公式だが帝国一の切れ者とされているだけはある。今後からは変態な会話には注意しなくてならないがが、日々麗しい女性が自分たちの会話に参加してくるのは大きな喜びだつた。

一息つくために紅茶を口にした。ちょうどよく冷めていて飲みやすい温度だつた。エロールの職場で飲んだ紅茶は甘かつたが、これはしつかりとした味で、薔薇のような香りがした。ローゼンの趣味に合わせて用意されたようだ。

「お前、幾つだ?」

脈絡もなく年齢を尋ねたことに自分のことながら驚いた。ティファンヌも少し意外そうにしているが、それでもすぐ返事をする。

「すでに二十九歳になりました」

「俺よりも年上か……」

年上は好みだつた。いや、年上こそが好みだつた。エロールとは対照的に、ローゼンは年上が趣味だつた。ティファンヌの姿は二十九歳にしては少し若いが、落ち着きがあり清楚で、胸こそはないが足が長く、使用人にしておくには惜しい女性だ。

「ティファンヌ、お前は独身だろ? 誰か好きな男はいるか?」

「いえ、いません」

予想通りの返事だつた。だが、それは彼女が使用人として一生を

終える覚悟をしていくという信念の裏返しもある。

「結婚はしないのか？」

「今の私には、エロール様とロマリア様にお使えることだけです。

このまま独り身のほうが使用人としては良いかと」

「つは、お前は使用人の鏡だな！俺の屋敷の使用人なんて、俺よりも先に結婚しやがった！」

「バルトシュタイン辺境伯ならば、素晴らしい相手が見つかることでしょう」

「つは、くそ貴族の娘に興味はねえよ！」

下品に笑い、さり気なくティファンヌの手を見る。握りたくなる感情を、親友の使用人だと自分に言い聞かせて抑える。

「つは、お前なら皇族に嫁いでも大丈夫だな」

「もつたいないお言葉です」

皇族に嫁いでも大丈夫だから、立場の不安定な辺境伯に嫁いでもいいだろう、ティファンヌ

第九話 ～不穏～

帝国図書館の執務室から見える空は一面灰色の雲に覆われていた。ちょうど季節の変わり目で、冬はすぐそこまで迫っていた。

ローゼンは憂鬱そうに眺め、少しでも気がまぎれないかと思い紅茶を一口啜った。温度管理が杜撰だったのだろうか、せっかくの高級品が台無しだった。書類の整理をひと段落終えて休憩していたエロールも同じことを思つたのだろうか、一度口をつけただけで容器を置いた。

「まったく、君は紅茶もまともに用意できないのか、ローゼン」「文句言つならお前が淹れり」

今日の紅茶担当はローゼンだった。昨日まではエロールが淹れていたのだが、どういつた風の吹き回しかローゼンが自ら志願し、見ているだけで不安になる手つきでやつと淹れたものだった。

「そもそも、貴族おれたちが自分で紅茶淹れるなんてありえねえだろ？」「始まつた。君はすぐに言い訳するからな」

完全に言い訳だが、ローゼンの言い分にも一理はあつた。紅茶を淹れることなど使用人の仕事で、自分で淹れる貴族など珍しい。辺境伯であるローゼンはそれが当然であつて、むしろ皇族であるエロールができることのほうがおかしい。

「ともかく、今度からは君は一切触れないでくれ。せつかくティファンヌが用意してくれた茶葉が無駄になつてしまつ」

「はいはい、ティファンヌが用意したならしかたねえな」

口調こそは嫌々だったが、ローゼンにしてはあつさりした引き際に、エロールは目を瞬く。

「驚いたね。君が一度の忠告で従うなんて……。ティファンヌと何かあつたのかい」

「つは、聞くか？ 聞きてえか？ 教えてやるよ」

話したくて仕方が無い、そんな口調だった。

ローゼンは以前にティファンヌと半口会話をした日のことを、異常なほどうれしそうに話した。

話し終えたころには、すでに放置していた紅茶が冷めていた。

すべてを聞いたエロールの口から、当然とも言える台詞が漏れた。

「……君はティファンヌが好きなのか」

それ以外に聞きたいことはなかつた。

「悪いか？」

威嚇するようにローゼンは言つた。彼からすれば、意中の女性が使っている男が気に食わないのだろう。薔薇の彫刻をあしらつた剣の柄に手が置かれているのも偶然ではないだろう。

「悪くはないよ」

剣の存在に気づいたエロールは、まさか切りかかつてはこないと思いながらも、落ち着かせるために紅茶を差し出す。

「飲むか！ そんなまずい茶！」

自分が淹れたものだといつことも忘れていたようだつた。寝そべつていたソファーから立ち上がり、講義するかのように机に拳を叩きつけた。

「ティファンヌを汚したら殺すぞ？」

目が本気だつた。凡俗なら腰を抜かすことは確実な気迫は、たとえ変態だろうと彼が聖騎士であることの証だつた。

だが、エロールの反応は

「貴様、私が成人女性に性的な魅力を感じるとでも思つてているのか」
激怒していた。表情こそはいつもと変わらないが、雰囲気が変態のものだつた。同じ変態にはすぐに理解できた。

「つは、そうだつたぜ、この変態！ この前、ロマリアの髪にいたごみをとるふりして、さりげなく匂いを嗅いでいたな！」
「黙れ。貴様こそ、奴隸三号が流した血を本人に飲ませていただろ

う

「あれは鼻血だ！ 髪がなくてふけなかつたんだよ！」

「また言い訳か。変態なら変態らしく素直に変態らしい返事を、変

「てめえ、殺すぞ」

「面白い。好きにするがいい」

殺すとは言つてゐるが、それは先ほどとは意味合いが違う。本気ではない。すでに変態の本性を丸出しにしている二人には、ぐだらない遺恨などない。どちらの性癖がすばらしいかが、それが争点になつてゐる。

「すばらしいのは十歳以下の幼女だ」

「年上のお姉さまだ！」

それを合図に本格的な変態争論が始まつた。この間に誰も執務室の扉を開かなかつたことは幸運だつた。ローゼンだけでなく、聰明なエロールですら我を忘れて幼女の魅力について変態全開で主張してゐた。本当に幸運だつた。

終止符を打つたのは、日の入りを告げる鐘の音だつた。

「……君のせいで時間を無駄にしたよ」

「それは俺の台詞だ」

お互ひの歪みに歪んだ性癖を主張した二人は心底疲れたように、二人がけのソファーに隣り合わせに座つた。

「そういえば、お前は何処にいたんだ？」

「……君とティファンヌが半日いつしょにいた日のことか」

服の第一ボタンを外しながらエロールは答えた。

「ロマリアと一緒に、父上に呼び出されただけだ」

「はあ？ ついに変態だと知られたか？」

「……来年の準備をするように言われただけだ。具体的には、婚礼の儀と」

エロールは口をつぐんだ。口止めされているわけではなかつたが、それでも勝手に伝えてもいいのだろうか悩んだ。この事實を知つてゐるのは皇族と、一部の大貴族だけだからだ。

だが、古くからの親友であるローゼンに伝えないことで、彼との距離をつくつてしまふのではないかと考へ、他言無用だと釘をさし

た。

「来春に備えて、領地において準備をしておくように厳命された。兵士、兵糧、武器、防具、馬、それと荷役の奴隸たちを規定数以上そろえなければいけない。守備拠点や補給経路も確保しなければいけない」

一瞬にしてローゼンの表情が強張った。瞳孔が開き、奥歯をかみ締めた。

兵士、兵糧、武器、防具、馬、荷役の奴隸、それに守備拠点と補給経路の確保。

それが意味することは一つ

「馬鹿な、戦争かつ！」

机を揺らしてローゼンは叫んだ。

すでに夕日は沈み、外では守衛が火を灯はじめていた。

登場人物紹介

主要人物

エロール・レイス・アルチョーロ・ベネルスク

赤い瞳、白い髪と肌という特異な容姿をした第三皇子。爵位は伯爵。二十歳。

その外見ゆえに幼いころより疎まれ、成人した今でもローゼン以外には心を開かない。姉からの偏愛により幼女崇拜者となり、困惑しながらもロマリアが妻になることに喜んでいる。

妹であるイゼルナからの偏愛をロマリアを利用することで平定するなど、聰明な頭脳を有する。

官位は、正五位上『ていこくすしょのかみ帝国図書長』

ローゼン・バルトシュタイン

金色の髪と瞳を有するバルトシュタイン辺境伯家の当主。爵位は辺境伯。二十五歳。

エロールを彼の親以上に知つており、主従の関係を超えて親友と豪語している。特に変態仲間としては、普段から溜め込んでいる変態的欲求を語り合う。

薔薇の栽培ばかりしている変態だが、帝国でも数えるほどしかない聖騎士の一人で、最高戦力の一人として数えられている。そのため職務怠慢を黙認されている。

ティファンヌを妻候補として見ている。

官位は、正三位『陪臣長』

ロマリア・デイルファ・ラスチエーノ

聖少女と呼ばれ、陶磁器のような白い肌と金髪、大きな金色の瞳が特徴。八歳。

デイルファ教教皇の一人娘で、皇室との調和政策としてエロールに嫁いだ。純粋な少女だが、初対面のエロールの唇を奪うなど、彼に対しては好意を抱いている。

大人びているが所詮は子どもで、ティファンヌに頼りながら生活している。そのため彼女に懐いており、同時に尊敬している。

官位は、正六位上^{「神祇巫」}

ティファンヌ・リベラ

エロールに忠実な唯一の使用人。二十九歳。

肩まで伸びた黒い髪と瞳が冷たい印象を与える美人だが、実際には心優しく、非常に有能な使用人。一般的な家事だけでなくあらゆることに万能で、馬術、剣術、槍術などの武術。さらには学問にも詳しく、特に地理学に造詣が深い。その能力は貴族間でも有名で、ローゼンは妻候補としている。

七年間エロールに使っているが未だにわからないことが多い、それについてはローゼンから助言を得ている。しかし、彼に対しては雇い主の友人として接している。

エロールの関係者

フロウリー・アッシュュレット

エロールの主治医で、アッシュュレット準男爵家の当主。三十一歳。引き込まれそうになるような濁つた瞳が特徴。髪は群青色の短髪で、後ろ髪を麻紐で縛っている。服は本来は真っ白だが、ところどころが破れ、黄ばんでいる。

七年前からエロールの主治医になつたが、形だけの適当な診療しか行わない。ローゼンと違い毎日仕事はしているが、常に飲酒している。だが、子供時代から毎日飲んでいたため、顔が赤くなつても酔つ払うことはない。エロールとローゼンの変態性欲についても知

つて いる。

官位は、従六位上『てつろくていんじはくし帝国典医博士』

リシャーナ・レフイスト

かつてエロールの後見人を務めた貴族で、レフイスト子爵家の当主。三十五歳。

茶色い髪と、年齢より若く見える顔立ち。

困窮を極めていた際に、エロールの後見人となり、成人まで援助する。現在ではすでに家を建て直したが、付き合いは続いている。一人の人物に集中して借りを作らず、偉い相手とは必要以上に仲良くなせず、ある程度距離を置いて関わることを信条とする。若く見えるが、年相応に肉体は衰えている。

官位は、正六位上『ていじくえんじのかみ帝国園地正』

第十話 ～白い皇子の変化～

目が覚めると、すでに室内は少し明るくなっていた。エロールはガウンを纏い、応接室に向かつた。すでに暖炉に火が灯されていた応接室に入ると、窓際に立っていたティファンヌがすぐに気がついた。

「お目覚めですか、エロール様」

彼女はカーテンで窓を閉ざした。途端に室内が薄暗くなる。

「ああ、少し寝過ごしてしまったようだ。昨日は、兵糧確認に時間を使いすぎてしまったからだろうね」

「左様でござりますか。さぞ大変なことだつたでしようが、昨日までに済ませていたことが幸いでしよう」

「それはどういう意味かな、ティファンヌ」

ティファンヌは無言でカーテンを開くことで答えた。空は雲に覆われ、庭は雪に覆われていた。肌を焼く日光がないことが分かると、エロールはゆっくりと窓際に寄つた。

「夜中から降つていたようだね」

庭で一番大きな木が完全に雪化粧をしている。眠りにつく直前はいつもどおりだった庭が、朝になると自分と同じ色に変化していた。親近感を覚えると共に、まったく知らない土地に來てしまったような違和感。

「確かに、君の言つとおりだ。私の徹夜も無駄ではなかつたようだね」

「そこまで言つたエロールだが、積もつた雪を喜ぶことはできなかつた。

「しかし、これでは当分は外に出られないね。今日の仕事は休まなければいけないな」

本当は今日中に、近隣の貴族たちを集めて戦争へ備えるように指示しようと考えていたが、この雪では簡単に集めることはできそう

に伝えたときのことを思い出すと、今でも早いのではないかと考えてしまった。

大陸東部のこの地域は、領土争いの最前線で常に一定の緊張感が保たれている。そこに領地を持つ貴族は、皇族の代表によりまとめられている。その代表がエロールで、事実上の副官がローゼンだ。彼にだけ極秘である戦争について伝えたことも、ただ友人であることが理由ではない。

だが、問題がある。それも非常に厄介な問題が。

「ところで、ティファンヌ、君は、コーハリス共和国についてどこまで知っている」

共和国。これまでの歴史では一度も実現しなかった体制で、主権は民衆にあるという、それまでの絶対王政を覆すものだった。帝国がその大部分を領有するテレモニア大陸において数年前に成立したばかりだが、絶対王政に真正面から対立する姿勢を貫くことから、改易された一部の諸侯が亡命するなどして帝国としても無視できなイ勢力と成長を果たしつつある。

それが、宣戦布告する予定であるコーハリス共和国。味方の諸侯にも内通者がいるという噂があり、エロールとしては開戦には反対だった。だが、宰相である大貴族に押されるかたちで決まってしまった。

尋ねられたティファンヌは、一度下を向き、まるで何かを吐き出すかのように口を開いた。

「存じております。バルト・シュタイン辺境伯が懇意にされていた、ゴードレス元男爵が加わっているという噂がある、と」

やはり知っていたか、と表情が曇った。

「それも、すでに総司令官代理にまで昇進されているとも噂されています」

そこまで言われているならば、それはすでに噂の域を出ている。エロール自身も、間違いない情報だと認識している。

ローゼンが戦争に消極的な姿勢を見せてているのにはそれが大きな原因となっている。ゴードレス元男爵は、爵位こそ男爵と下から二番目だったが、帝国滅亡の危機であつた約百年前の戦いでの英雄の子孫であつたために民からの信頼も厚く、諸侯からも尊敬された。事実、第一皇女アレシアスの逆鱗に触れて改易された際にも、二千人以上の民が蜂起した。

さりに、ゴードレス元男爵は、聖騎士であるローゼンの剣の師匠だった。自身は聖騎士になることはできなかつたが、その指導技術は高く、彼が総司令官代理を務めている軍隊の兵士もおのずと強いだらうと予想できる。

「やはり、姉上の判断は間違つていたようだ。私に対しても少し冗談を飛ばしただけで改易にするなど、どう考へても、何度考へてもおかしい」

誰に言つてもなく口から言葉が漏れた。今まで心に秘めていた姉に対する不満と共にティファンヌの耳へと届くと、彼女は表情を変えた。そして静かに囁く。

「……エロール様。ロマリア様が自室でお待ちです。執務をお休みになられるなら、どうぞ、ロマリア様とお過ごしください」

何気ない言葉だが、それはティファンヌにとって最大の気遣いだつた。目の前の難題と、これから難題、その『双子の難題』に立ち向かわなければならぬ主にせめてもの安らぎを、たとえ一時的な気休めとしても。

「ああ、そうだね。この頃は忙しくてあまり会話をできなかつたから、ロマリアも退屈だつただろうね。今日はそうしてみるよ」

素直にその好意を受けたエロールは踵を返した。

「私は、これから除雪を行いますので、御用があればお呼びください」

エロールはそのまま一階にあるロマリアの部屋に向かった。そして、そこで立ち止まつた。勝手に入るのも無礼だが、これから夫婦になる関係の相手の部屋に入るのにわざわざノックまでする必要があるのか悩んだ。彼は少し考えてから声をかけた。

「ロマリア、起きているかい。私だ、エロールだ」

ノックはしなかつた。すぐに扉の向こうで動きがあつた。

「おはよー」やがてます、伯爵様。と言つても、もう朝は過ぎていますよ？」

「ああ、そうだね。つい遅くまで仕事をしてしまつて、いつもよりも就寝時間が遅くなつてしまつたよ」

腰を屈め、視線をロマリアに合わせる。お互いの瞳にお互いの姿が映る。

「でも、今日は図書館には行けそうにならないから、お休みするよ。だから、少しお話しようか、ロマリア」

「えつ、少しですか……」

途端に表情が曇つた。悲しそうに半歩下がり、そのまま両手を胸の前で組んだ。

「やはり、伯爵様は、何か用事があるのでしょうか？」

「いや、そうではないよ。時間はたくさんあるから、今日はずっとお話しよ」

改めて言葉を代えて言つと、今度は満面の笑みで答えた。

「はい、うれしいです！」

心なしか、普段の彼女からは見られない子供らしさが垣間見えた。嬉しいことや楽しいことに無邪気な笑顔で反応できることが、大人にはない子供の特権だ。

自分の子供時代に、自分はどんな顔で笑つていたのだろうか。不意にそんなことが気になつた。今までに教育されてきたことは全て覚えていたが、それは覚えていなかつた。その記憶だけが奪われてしまつたかのように抜けている、もしくは元から存在しない記憶なのだろうか。だとすれば、自分の子供時代は何だつたのだろうか。

「さあ、どうぞ伯爵様」

ロマリアの招きに応じ、立ち上がると同時に脱力感を払拭するかのように前髪をかきあげた。

室内は、独房のようなエロールの部屋ほどではなかつたが簡素だつた。寝台、鏡台、机と椅子。どれも高級品だが、広い部屋にあると何の変哲もない家具にしか見えない。

「どうぞ、お座りください」

「失礼するよ」

進められた椅子に腰掛けたエロールは、寝台に移動しようとするとロマリアを呼び止めた。

「ここに座つても構わないよ、ロマリア」

両手を広げ、自分の膝に座るように促した。最初は躊躇いと恥じらいを見せたロマリアだったが、照れくさそうな表情で頷き、そつと腰を下ろした。

「ロマリアはいい匂いがするね。どんな香水をつけているのかな」「えっ、は、伯爵様？」

エロールはロマリアの小さな体を包み込んだ。耳元で囁くと、甘い香りに鼻腔がくすぐられた。

「ローゼンは薔薇の香水を使つてゐるそうだけれど、私にはどうしても合わなくてね。それに、ティファンヌは香水の匂いが苦手らしくて、彼の匂いが大嫌いだと言つていたよ」

「そ、そうですか？ 私は上品な香りだと思いますが……」

いきなり後ろから抱きしめられて困惑するロマリアはたどたどしい口調で答えるが、エロールの胸板に頭を預けている。

「それで、ロマリアはどんな香水を使つてゐるのかな

「いえ、私は何も使っていません。デイルファ教では、修道女が必要以上に飾ることはいけないことだと、お父様から教えを受けましたから」

「さすがは、オーゼフィス六世教皇だね。歴代で最も敬虔な教皇だ

と、父上もよく仰っていたよ。それなら、ロマリアは何もしなくても素敵な匂いがするということかな」

少し悪戯っぽく聞いたHロールは、ロマリアの反応を見るために顎を持ち上げた。

「そんな……意地悪です……」

小さな口を真一文字に詰め、これ以上は会話させようと田で伝えてくる。

「はは、かわいいね、ロマリア。そんな顔をするなんて、君はまだ子供だね」

「私、もう子供じゃありません! 意地悪な人には、もう髪を整えてあげませんよ」

Hロールがリボンをつけられてから、彼の髪を整える役田はティファンヌからロマリアに代わっていた。だから今日はまだ髪は寝起きのままで、長い髪は跳ねたまになってしまっている。

「それは困るよ。じやあ、大人なロマリアに整えてもらひつかな」
なだめるように頭をなで、それから両手を垂らした。ロマリアは早足で鏡台に向かい、櫛と何色かのリボンを手にして戻ってきた。

「今日のリボンは何色にしますか?」

「そうだね……ロマリアの髪と同じ色がいいな」

「ふふ、それだと、ローゼン様とも同じですよ?」

「ああ、私としたことが、忘れていたよ。それなら、黒色を頼むよ。

今日はティファンヌの色にしてみよう」

「はい、伯爵様」

久しぶりの休日はいつもして過ぎていく。外では、雪が止むことなく降り続け、白くなつた庭をさらに染めていく。この雪が消えるころには戦争が起ることを、ロマリアはまだ知らない。本来なら伝えるべき相手だが、Hロールはあえて伝えなかつた。彼女がまだ子供だからではなく、一人の女性だからこそ、そんな物騒な話題での幸せを汚してしまいそうで出来なかつた。

愛する女性には幸せでいてほしい。そう考えることができぬほど

にエロールは落ち着いていた。ロマリアがこの館に来た日から、彼の中で止まっていた何かが動き出した。それが何かは分からぬ。だが、彼女との日々を過ごすことで分かるかもしれない。

その日が来るまで、歩幅の違うこの少女と共に生きていくとエロールは決心した。

第十一話 ～薔薇と酒治医～

グラスにはワインが並々に注がれていた。ローゼンはそれを一度に飲み干した。庶民には到底手が届かない高級品にもかかわらず、まるで井戸水のように味わいもせず舌の上を滑っていく。昼間にも関わらず、ローゼンは普段は少しだけしか飲まないワインを朝から飲み続けていた。

エロールから戦争の話を聞いてからしばらくは、表面上は落ち着いて振舞っていたが、今朝、雪を見た瞬間に無性に現実から逃げた衝動に駆られた。廊下を歩いていた使用人に命じて用意させたが、高級品を手渡されたときには笑いそうになつた。

今の自分に、この高級品を飲む価値があるのだろうかと、普段ならありえない考えが脳裏をよぎつた。貴族とはいつたいどこが偉く、平民たちとは違っているのだろうか。そんな階級主義の意味についてなど、考えたこともなかつた。剣の師であったゴードレス元男爵が改易されたときにも、帝国の支配者である皇族への不敬だから仕方が無いと割り切つた。

だが、今になつてみれば、何も考えていなかつたにすぎない。皇族は偉いという一般論を自分の考えと同化させ、自分自身は何も考えていなかつた。その結果が、今の苦しみだ。

グラスを机に置き、視線を暖炉の上に向ける。薔薇の形をした鍔、柄と鞘にも薔薇の彫刻がされ、彼が外出の際には必ず身に付けている剣が掛けられている。

千鳥足で暖炉に進み、小刻みに震える手で剣を抜いた。刀身は曇りなくローゼンの素顔を映している。真っ赤になつた顔で笑おうとするが、口元の感覚が鈍つてしまつて上手くいかない。右だけが引きつてしまい、冷酷な笑いになる。もしも、悪魔がいればこう笑うのだろう。

鏡は真実を映し出すという言い伝えがあるが、この悪魔のような

表情が本性なのだろうか。ローゼンは刀身を収めた。また、考えもせずに逃げた。

もう一度、酔いたい。逃げたところで誰も自分を責めはしない。再び、ワインの置かれた机に戻ろうとするが、扉を叩く音がした。

「ローゼン様。お客様がお見えですが、お会いになりますか？」

この館で一番の古株である使用人の声だった。ワインを用意させた男だ。剣を戻しながらローゼンは舌打ちした。

「客？ この雪の日に客だと？」まあ、いい、通せ」

あのエロールがわざわざ雪の日に訪ねてくるとは思えなかつたので、仕事の催促に来た役人だらうと考えたローゼンは、早々に追い払うために許可した。それから、部屋の隅に置かれている豪勢な棚を一番上から開いて、探し物をする。地下で飼つている奴隸たちの体液や体毛を入れた小瓶が転がり落ち、まるでゴミのように放置されていた金貨を無造作に一掴み取り出す。いつも仕事を催促にくる庶民上がりの役人には、餌としてこれを与えて帰らせるのが彼の常套手段だった。

一般庶民の年収に半分以上に相当する額の金貨が無造作に床にまかれた。庶民上がりの役人からすれば大金だ。しばらくすると、「入るぞ、変態」という声とともに扉が開いた。

「それを拾つて、俺の前から消える。陪臣どもにはいつも通り、俺は体調が優れない」と伝える

相手の顔を見ようともせずに背を向けながら、ローゼンはグラスにワインを注いだ。これでいい、いつも通りの逃げ腰だ。

だが、今日の反応はいつもと違つた。床から金貨を拾い集める音はせず、返事もない。それに、この匂い。酔いもさめるよつた酒の匂いだ。

「賄賂を払つて仕事を怠けるとは、薔薇馬鹿にしては賢いな、ローゼン？ ん？」

声は耳元で聞こえた。だが、声だけではなく、とてつもない口臭がした。

「つまうー、げほつー！」

思わず吐き出しそうになり、口と鼻を片手で押さえ、鎖を外された犬のようにその場から逃げた。千鳥足で寝台にたどり着き、やつとのことで振り返った。

「おつ、お前、フロウリーかつ！」

激臭で酔いは完全に醒め、目の前にいる人物が誰か気がついた。

「見ればわかるだろ？ まだ、酔つているのか？」

「酔つているのは、お前だ！ 酒女！」

今しがたまでローゼンが座っていた椅子に、エロールほどの身長の女性が座っている。髪は群青色の短髪で、唯一長い後ろ髪を麻紐で縛っている。服は、典医療の役人が着るものだが、どこかで転んだのだろうか、破れ、泥がついている。本来なら真っ白なはずの服が茶色や黄色に変色している。一重の瞳は揺れることなくローゼンを見つめているが、完全に濁っていて、見ていると引きずり込まれそうになる。

「私は、酔つていなーぞ？ これは食前酒だ、ローゼン」

手には安物のワインが握られている。彼女の標準装備は、典医療の役人として必要な薬ではなく、庶民が飲むような安酒だ。初めて会つた七年前からまったく変化しない容姿は三十一歳には見えないが、酔つている状態も変わらない。

「おつ、これはワインだな？ 何だ？ いいことでもあつたのか？ ああ、いい奴隸が手に入つたのか？ 今度は、幾つだ？ どうせ年上だろ？ エロールほどにとは言わないが、お前も少しは好みの年齢を下げたほうがいい。女は三十を超えると、肌の維持が難しくなることを知らないのか？」

そう言いながら、彼女は赤くなつた頬を軽く平手打ちした。意味もなく笑いながら。

「奴隸はしばらく購入してねえ。こんな匂から酔つ払つている官吏

は、お前くらいだ、フロウリー」

「仕事をしていない官吏も、君を除くと珍しいな？」

彼女は手にしていた酒を全て飲み干した。そして、空になつた瓶を机に置いた。表情こそは酔つているが、足取り軽やかでローゼンに歩み寄つてくる。吐きそうになるほどの口臭だが、これは今日昨日の話ではなく、水の代わりに酒を飲み続けた結果だ。

「お前が、陪臣長になつたのは二年と少し前か？ それまでは最低限の仕事はしていたな？ 職務放棄の理由を当ててやるつ、コードレス男爵だろ？」

ローゼンは答えなかつた。とぼけたように肩を揺らし、明後田の方向を向ぐ。

「私を無視して、せらに目をそらすとは、お前も偉くなつたな？ ならば、お前の歪んだ性癖を城下で暴露してやるつ、喜べ、薔薇馬鹿」

貧しい胸を張りながら彼女は、空になつた瓶の口を人差し指でなぞつた。

「……勝手にしろ、酒女」

「何？」

「聞こえなかつたのか、酒女。暴露されよつと、バルトシュタイン家が改易されるわけでもないからな。お前の好きにしろ」

視線だけではなく、全身をフロウリーからそらした。その背中は今にも逃げ出してしまいそうだ。

「お前は 馬鹿そうだが、以外に纖細で、それでいて分かりやすいな。私の患者も、お前のように分かりやすい男なら助かるな」「なら、早く行け。あいつのことは、お前が一番目にわかつているはずだ。俺に追いつくまでは、もう時間はかかるないだろ」

自分が行く必要はない、と言い聞かせた。主治医はフロウリー・アッシュュレットであり自分ではない。そう言い聞かせて、親友の傍からも逃げようとした。戦争が起こることを一番に伝えてくれて、自分の力を頼つてくれた親友から逃げようとした。

だが、逃げ切れなかつた

「そつはいかない、お前には同行してもらひ。同じ戦争協力者とし

てな？」

直接肩をつかまれたわけでもないのに、ローゼンは振り返ってしまった。フロウリーはまだ椅子に座っている。飲み残された高級ワインに直接口をつけて飲んでいる。

昼食の後始末を終えたティファンヌは、庭に出て除雪の続きを取
り掛かろうとしていた。すでに館から門までの道は全て取り除かれ、
移動に不便はないが、門を一歩出れば、そこにはまだ雪が残つてい
る。足の甲が埋まる程度の雪だが、それでも馬車が通るには不便で、
今後のことを考えれば少しでも早く行動をしたほうがいい。

特に、主であるエロールの唯一の友人であるローゼン・バルトシ
ュタイン辺境伯がいつ訪れても問題がないように注意を払わなければ
ならない。彼と過ごす主の表情はどこか晴れやかで、幼妻と過ご
しているときはまた違う。皇族でありながら疎まれる主の人生に
おける、たった一つだけの希望。守ることが使用人である自分の使
命であると、ティファンヌ・リベラは、それを行動原理の一つとし
ている。

外見で他人から普通でない扱いをされるのは辛いことだ

「おい、ティファンヌ・リベラ！　久しいぞ」

風上から声がした。ファミリーネームで呼ばれるのは久しぶりだ
った。そう、ファミリーネームをいっしょに呼ぶ人間は珍しい。彼
女が知る限りでは、常に呼ぶのは主の主治医だけだ。

「……収穫の季節以来になります、アシュレット準男爵。それに、
バルトシュタイン辺境伯。エロール様は、お食事を終えて、ロマリ
ア様のお部屋でござります」

一匹の馬にまたがつた二人の貴族に、使用人であるティファンヌ
は一礼した。すぐに馬の傍により、手綱を受け取る。ローゼンは何
も言わずに降り、彼の後ろにいたフロウリーがゆっくりと足をつい

た。

「おっ、これはお前が全てやつたのか？」

門から館までの道を見たフロウリーは濁った瞳を見開いた。ローゼンの視線も動いたが口は動かなかつた。

「はい、先ほど終えました」

「お前に、こんな重労働をさせておいて、私の患者は幼妻と仲良くお話か……。これは少し、荒療治の必要ありだな」完全に濁っていたフロウリーの瞳に、帝国典医博士としての光が垣間見えた。利き腕の左手を何度も開き、それからティファンヌへ言つ。

「私は先にお邪魔する。お前は、薔薇馬鹿といつしょに私の馬を馬小屋に入れてくれ」

踵を返す直前に、不自然にローゼンの肩を叩いたが、嬉しそうな反応は無い。怒っているようで、それでいてどこか諦めたような表情だ。だが、気にせずにそのまま進んだ。

「ああ、そうだ」

数歩進んだだけで立ち止まつた。ローゼンは反応しない。ティファンヌだけが姿勢を正す。

「高級ワインを貰うぞ、バルトシュタイン君たち？」

口元を緩ませ、酒の臭いを漂わせながらフロウリー・アッシュレットは、ティファンヌとローゼンをまとめて呼んだ。

「はい、どうぞご自由に」

ティファンヌは短的に答えた。

ローゼンは両肩を大げさに揺らし、口の片方だけをつり上げて悪魔の笑いを真似た。

第十一話 ～薔薇と酒治医～（後書き）

登場人物紹介に、フロウリー・アッシュレットを追加しました。

すでに一本もボトルを空けているにも関わらず、フロウリーは酩酊^{てい}することもなくしつかりとした足取りで廊下を歩く。右手には、地下の貯蔵庫から拝借した高級なワインを握り、左手には同じく拝借したものを開栓状態で、時々口に運んでいる。

「醸造年、皇暦978年か……。私より年上だったのか」

気まぐれで醸造年を見ると、自分が産まれる三年前の代物だった。自分よりも長生きしているものを飲むのは久しぶりだったフロウリーは、各上に打ち勝つたような気分になり、酔いも手伝い、走り出した。十分に助走したところで廊下を蹴った。それなりの高さまで跳んだが、着地に失敗して尻餅をついた。それでも、酔いがまわっている彼女はほとんど痛みを感じなかつた。

突然響いた音に反応したのか、近くの扉が開き、白髪の青年が顔を覗かせた。フロウリーは腰をなでながら開栓前のワインを持った手で手招きした。

招きに応じてエロールが傍に来ると、彼女はボトルの底で彼のふくらはぎを軽く叩いた。

「よう、患者さん。か弱い使用人に除雪をさせて、自分は新妻と楽しくやつていてるそつだな？」

「博士、止めてください」

ふくらはぎに対する悪戯を止めさせるためにエロールは屈み、フロウリーの手を両手で押さえた。顔が近づいたことで、強烈な臭いが鼻をついた。

「……酔つておられるようですね」

真つ白なハンカチを取り出して鼻を庇つた。

「これは目覚めの一杯だ。私は、まだ酔つていなさいぞ」

悪臭と言つても差し支えない臭いを発しながらも、フロウリーはふらつくことなく自力で立ち上がつた。今度はボトルの底で、自分

よりも低い位置にいるヒロールの頬を押した。

「痛いので止めてもらえませんか、博士。口の中が切れてしまいま
す」

「切れる。婚約したんだから、我慢しろ」
理不尽なことを言いながら、フロウリーはヒロールをしばらく弄
び、飽きたと彼を放置して、開けられたままの部屋に入った。最低
限の家具だけが置かれた質素で広い部屋に足を踏み入れると、純白
の法衣を着た少女が突然の侵入者に戸惑いながら、その背丈には合
わない長椅子で膝を抱えていた。

「あの……貴方は？」

切り出したのはロマリアだった。たどたどしい口調で尋ねられた
フロウリーは酒臭い息を吐きながら名乗った。

「フロウリー・アッシュコレット準男爵だ。お前の旦那様の主治医を
仕方なくやつている」

「典医療の方ですか？ 伯爵様の主治医？」

「官位は『帝国典医博士』だ。患者とは、十四年の付き合いになる。

「それで、お前がロマリアだな？」

「はい、ロマリア・ディルファ・ラスチヨーノです。伯爵様からは
お世話になっています」

椅子から下りて一礼するロマリア。フロウリーはそれを無視して、
ワインを口に運んだ。そこに、ヒロールがちょうどよく戻ってきた。

「おい、患者さん。お前の新妻は、教皇の奴の娘だそうだな？」

耳元で囁かれることで酒臭い息がかかり、ヒロールは唇を歪めた。
それでも、ロマリアの手前で汚い言葉を吐くこともできずに不承不
承ながら答えた。

「正しくは、一人娘です」

「どっちでもいいだろ、そんな細かいこと。 それで、私にディ

ルファ教への宗旨替えを勧めないのか

「勧めてほしいのですか」

「誰が、宗教に無駄な時間を費やすか！ 寄るな、離れろー！」

「近づいたのは『自分でしょ』う……」

遠慮なく耳元で怒鳴られたエロールはゆっくりとフロウリーから距離をとった。彼女は威嚇するかのようボトルを突き出した。
「いいが、これだけは言っておくぞ。私は、絶対に宗教といつものを許容しない！ いいな、ロマリア・ディアル・ラスチート！」
「ロマリア以降から全て間違いです。やはり、酔っていますね」「つるせえ！」

唾を飛ばし、同時にボトルを容赦なく近距離から投げた。それは右に逸れて、運よく軟らかい寝台に落下した。あわや大怪我をするところだったエロールはため息をつきながらボトルを回収するため寝台に向かった。

そこに、金髪の青年が介入した。

「大声が廊下まで聞こえたぜ？」酒乱の相手は大変だな、^{エロール}「君が連れてきたのか、^{ロゼン}変態」

厄介なことを、と聞こえないように咳いたエロールは、寝台に腰掛けでロマリアを手招きした。彼女は救いの手にすがり、可愛らしい動作で膝の上に座った。

なおも暴れようとするフロウリーだったが、ローゼンによつて背後から抱きかかえられるかたちで押さえ込まれた。酒で勢いをついているとはいえど、女性である彼女には、聖騎士に勝てる力などない。

「離せ！ 後ろから抱きつくな！」

「押さえているだけだ！ 誰が、お前を抱くか！」

その失言が発せられた瞬間、フロウリーの後頭部がローゼンの鳩尾へ直撃した。闇雲に暴れたことが、油断していた聖騎士を大いに怯ませた。彼女はその好機を逃すことなく、足の甲を踵で踏みつけた。

「がつ！」

端正な顔立ちが歪んだ。同時に、枷となっていた両手の力が緩み、フロウリーが抜け出すだけの隙間を作り出してしまった。

「はつ、お前の年上趣味には、軽蔑の念すらも覚えるぞ。三十一歳の私に手を出そうとするとは、想像できなかつたぞ」

体の自由を取り戻すと、開栓してあつたボトルを口に運んだ。先ほどのもみ合いで、中身が少しこぼれたようだ。二人の服にはシミが目立つ。

「子どもの前で、勝手な嘘ばかり言うな！ お前は、論外だ！」

服に染み付いたワインを気にかけながら叫んだロー・ゼンの視線の先には、エロールの膝の上で呆然とするロマリアがいる。彼女はフロウリーを凝視することで、彼女なりに冷静になろうとしているようだが、破綻的すぎる性格を理解することに窮しているようだ。

少女の視線を感じたのだろうか、フロウリーが舌打ちする。

「おい、じろじろ見るな。切斷するぞ」

大人気ない怒声を発しながら一步踏み出ると、ロマリアは小動物のようにエロールの背中に隠れた。そこから様子を伺いながら彼女は謝った。

「申し訳ありません。今までに出会ったことがない方だったのでも、つい……」

「はつ、希薄な人生経験だな。私よりも厄介な人間はこの世にすかさずローゼンが横槍を入れた。

「いるはずがない。ていうか、いたら困る」

「いるぞ！ エブリーンスとか、厄介すぎて、私でも近寄りたくない！」

あり得ない、と言いながら嫌な記憶を払拭するために、フロウリーはボトルを傾けた。一口ではなく、残り全てを飲み干すような勢いで。

「ああ、思い出したら、寒気がしたぞ……」

「飲みすぎで、体温に狂いが」

「うるせえ！」

再び一人がいがみ合つ。どうしたものかと毎回悩むエロールだが、毎回のことだと諦め、ロマリアにかまうことにしてた。隠れていたの

を優しく引き戻し、再び膝に乗せた。

「ロマリアは、あんな下品な人に影響されてはいけないよ。特に、あのおばさんは、酒乱だからね。一人でいるときに話かけられても、絶対に返事をしてはいけないよ。下手をすると、暴れだすからね」「えつ、それは可哀相です……」

「ああ、ロマリアは優しいね。でも、あのおばさんは無神論者だから、經典を説いても無駄だよ。下手をすると暴れだすからね」「そ、そうですか？ ディルファ教を信じしない貴族がいるとは知りませんでした」

〔冗談にも真剣に答えるロマリアに、エロールは微笑んだ。隣では、金髪と青髪の男女が幼稚な言い争いをしている。

ティファンヌが真顔で、失礼します、と断つてから入ってくるまでそれは続いた。

第十一話 ～戯れ～（後書き）

次回更新は、三月二十九日です。変更があった場合は申し分けございません。

第十二話 ～どにでもある不幸～

周囲など見向きもせずに言い争いをしていたローゼンとフロウリーだったが、ティファンヌの登場により二人は凍りついたように口を閉ざした。ときに何かを言われたわけではないが、彼女のもつ固有の雰囲気がそうさせた。

このままでは埒が明かないと考えたエロールは、ロマリアの相手をティファンヌに任せ、自分はローゼンとフロウリーを応接室に誘つた。彼らも気まずさを覚えていたのか、黙つて従つた。

紅茶を淹れながらエロールはため息をついた。

「君たちは、いい大人が恥ずかしくないのか」

「まだに不機嫌そうな表情で顔を合わせない二人。エロールの問い合わせにも答えようとはしない。」

「コーハリス共和国とは争いたくないそうだな、ローゼン」

ローゼンの隣に、体が密着するほど近くに座り、できるだけ刺激をしないように注意しながら伝聞したことのように言った。すると

彼は酒臭さが残る口を歪ませた。

「当然だ。だが、自分の大切な人と殺し合いがしたい？ 僕にそんな苦しみを背負わせて、お前は幸せに生きるのか？ はつ、馬鹿にするのもいい加減にしろ。」

「それについては、心からすまないと思つてはいる。だが、君の力がなくては、この戦争は不利になる。父上が、私にどれだけの兵を預けたか知つてはいるだろう。たつたの八千人だ。コーハリス共和国は、総兵力二万を擁すると間者から報告があつたにも関わらず、その半分以下の人数だ。周辺の貴族たちも、私には非協力的だ。私が信頼できる貴族は、今のところ君たち一人だけだ。後生だから、聖騎士である君の力を預けてくれ」

険しい表情で懇願するエロールには、すでに見栄を張る余裕などなかつた。ティファンヌやロマリアの前では皇族の対面を無意識の

うちに守っているが、実際には八方塞といつていい状況だ。兵糧の買い付けはすませたが、これも普通は国が用意するものだ。これだけでも十分に悪意に満ちているといつていい。

薄々だがそれに気がついているローゼンだったが、すでに歯止めがかからなくなっているようだ。思いつく悪態をエロールに対しても矢継ぎ早に浴びせた。

「はあ？ 自分に都合がいいことばかり並べるな！ 僕に辛い思いをしろと言つなら、お前も諸共だ！ その手で、妹を切れるか？ 姉を切れるか？ レフイスト子爵を切れるか？ そんな覚悟も無い奴に、俺に命令する資格はない！」

「お、落ち着かないか、ローゼン」「

「これが冷静になれるか！」

怒声と共にローゼンは掴みかかった。胸倉を掴まれたエロールはそのまま床に押し倒されて、その衝撃を背中で感じた。内臓が跳ねたような感覚だ。

「痛いから、離してくれ。謝るよ」「

「口先だけだ！ 当事者の俺以外に、この辛さは理解できない！」

離すどころか、掴む力はさらに強くなる。エロールの細く白い首が圧迫されるにつれて、彼の呼吸が徐々に苦しくなる。同じ男でも、虚弱なエロールには外すことはできず、自由が利く脚で抵抗するくらいしかできない。それすらもほとんど無意味だ。

見かねたフロウリーが立ち上がった。まだ少しだけ残っているボトルの中身を急いで飲み干し、空になったことを確認すると自分の頭の位置まで振り上げ、迷うことなくローゼンの後頭部に叩きつけた。

「がつ、ああつ！」

これにはさしものローゼンも堪えたのか、後頭部を押さえた。彼の手が留守になつたことで解放されたエロールは這つよろに逃げた。簡素な装飾ながらも高価な絨毯にボトルの欠片が散乱している。

「貴様あ！ 僕を殺すつもりかあ！」

血走った眼でローゼンはフロウリーを睨んだ。片方の手は、薔薇の装飾が施された鎧が特徴的な剣を握っている。まだ納刀状態だが、いつでも抜刀できる姿勢だ。

「抜くな、ローゼン。抜いてはいけないぞ」

命の危機を感じたエロールは必死に説得しようと試みた。帝国の最高戦力とされている聖騎士であるローゼンが剣を抜けば、自分とフロウリーなど抵抗すらできずに命を落とすことになる。いつもは軽口を交わす仲だが、二人はいわば兎と虎のようなものだ。虎を怒らせた兎は餌になるしかない。

「怖いか？ そうだな、俺は聖騎士だから怖いよな。その俺をここまで鍛えたのは、ウォーレン・コードレスだ！ あの人は、俺にとっては育ての親だ！」

まだ剣は抜かれていない。怒りで見境がなくなりつつあるが、騎士としての礼儀は体が覚えているらしく、あと一歩を踏み出せないようだ。丸腰の相手には剣を抜かないことが騎士の美学である。

お互いにけん制しあう一人をフロウリーは冷めた目で見ていた。

「おい、ローゼン。殺せるなら、殺してみろ」

必死に説得を試みるエロールなどまるで無視した挑発。酔つているからではない。酔つている状態こそが彼女にとつての通常で、その通常ではほとんどのものは恐れるに足らないだけだ。

「お前、最後に戦場に立つたのはいつだ？」

割れてしまい先が鋭利になつたボトルを突きつけられたローゼンは、口を閉ざして答えることはなかつた。代わりに、質問したはずのフロウリーが回答した。

「最後に戦場に立つたのは、三年以上前だ。覚えていないのか？」

「黙れ。覚えている」

「それなら、そこで骸をさらした兵士たちの死に顔は覚えているか

？」

「……どういう意味だ」

察しが悪い、とフロウリーは呆れた。

「どうもお前は、自分が不幸だと暴れているようだが、その程度なら道にでも落ちているような不幸だ。最大の被害者は、戦争に利用される兵士だということがわからないのか？だから、貴族は嫌いだ。民の上に立つてることが当然だと勘違いしている」

その口調は、馬鹿にするというより哀れんでいるように聞こえた。荒れていたローゼンだけなく、それはエロールにも向けられた言葉だったようだ。二人は明らかに意氣消沈している。

「そんなことがわからず生きるなら、死ね。生きているだけで迷惑だ。お前たちと一緒にいる私まで、腐った貴族と思われたくないからな」

完全に突き放したフロウリーは、それ以上は言わずにそのまま退室してしまった。まだ何か言われるかと身構えていたエロールは肩すかしを食らった気持ちになり、その場に座り込んだ。

「エロール」

ばんやりと天井を見ていたエロールは慌てた。すでにローゼンは剣から手を離していた。怒りがある程度收まり、今は行き場を失った暴力が彼の中で葛藤というかたちで残っているようだ。

「悪かった」

謝罪の言葉を短く告げただけで、会話につながることはなかつた。エロールとしては何を言えばいいかわからなかつた。自分が不幸な境遇だということを理由に、周りのことなど考えずに我を通していたことは自らにも当てはまつていた。ローゼンには彼なりの苦悩があり、誰にでも辛いことはある。それは当然で、それでも耐えなくてはいけない。耐えがたきに耐えることが人の上に立つ者の義務だ。エロールは窓から門につながる道を覗いた。ローゼンが金髪を揺らしながら去っていく姿が見えた。門前では馬上のフロウリーが待機している。これからローゼンがどういう道を選ぶかは、彼女によって決まるのだろうとエロールは想像した。

完全にローゼンたちの姿が消えたことを確認したエロールは、ティファンヌを呼ぼうにボトルの欠片を始末した。本来ならば使用人に任せた仕事だが、これだけは自分ですべきことだと勝手に体が動いた。小さな欠片も全て丁寧に取り除き、最後に確認までして証拠を隠滅した。

そして、何食わぬ顔でロマリアの部屋に戻った。

「すまなかつたね、ティファンヌ。二人はすでに帰られたから、君は仕事に戻りなさい」

「はい、承知いたしました」

ティファンヌはいつも通りの動作で命令に従つた。先ほどの言い争いには気がついていなかつたようだ。それでもエロールは楽観しなかつた。近いうちにそれとなく聞いてみようと決めた。

「伯爵様。もう、お一人はお帰りになられたのですか？」

二人になるなりロマリアが尋ねてきた。エロールは努めて優しく答えた。

「ああ、もういないよ。驚かせてすまなかつたね。ローゼンはともかく、フロウリー博士は常人離れしたところがあるから、君と引き合わせる機会はまだ先だと考えていたのだけれど、上手くいかないものだよ」

「ふふ、そうですね。でも、私は平気ですよ。伯爵様の近くにあられる女性は把握しておかないといけませんからね」

悪戯っぽくロマリアは笑つた。大人の女性がすれば妖艶だが、年端も行かない彼女がするどどこか笑いを誘う。

「あつ、笑つてはいけませんよ」

「笑つてないよ。可愛らしいから、頬が緩んでしまつただけだよ」「もう……、子ども扱いは嫌ですよ」

「ああ、すまない、とエロールは頭を撫でた。子ども扱いされるとに抵抗があるロマリアだが、これだけは嬉しいようで文句は言わない。

自分にはあつて、ローゼンはないもの。それは自分を愛してくれる人間。一般的な感覚からすれば異常である腹違いの姉と妹からの愛情も、広義では幸福な部類だ。まして、自分にはロマリアがいる。これまでの人生がある程度不遇でも、自分は皇族としての立場は保障してきた。だが、ローゼンはどうだ。努力の末に聖騎士となり、当主となり、そして今は尊敬する師との殺し合いを迫られている。これほどの苦痛も珍しい。

だが、エロールにも譲れないことがある。コーハリス共和国をこれ以上放置することは国を左右する問題に発展しかねない。国の未来と親友との絆を秤にかけてみる。当然、それは前者に傾く。

衝突は避けられないだろう。そうなれば、親友との絆を壊してでも自分は進まなくてはいけない。皇族としての地位を利用して彼に命令を下す。

穏やかな表情を崩さないエロールだったが、それとは裏腹にすでに彼は決意をしていた。

第十二話 ～ここでもある不幸～（後書き）

次回の更新は未定です。申し訳ありませんが、決まり次第に活動報告でお知らせします。

北城門の門番はいぶかしむ様な視線で目の前の女性を見ていた。また真昼だというのに酒の臭いを漂わせる浮浪者のような女性だ。群青色の短髪を麻紐で結んでいる。

臭いだけで酔っぱらいそうな口臭を漂させながら彼女は抗議した。「だから何度も言つてるだろ。私は、フロウリー・アッシュコレットだ。準男爵にして『帝国典医博士』のフロウリーだ」

「ですから、身分を証明できるものが無くてはお通できません」規則を盾にすることで門番は頑なに拒んだ。このやり取りがすでに何度も繰り返されている。後では順番を待つ行商人や市民が口にはしないが明らかに不満そうな表情を浮かべている。

金髪の青年もその一人だつた。薔薇の花弁のように開いた襟が特徴的な白い服を着た彼は、その退屈を紛らわすため手持ちぶさたに剣で遊んでいたが、そのうちに痺れを切らしたのか自ら割つて入つた。

「おい、ちょっとといいか」

彼は門番に対して右手を突き出した。その薬指には精密な薔薇の彫刻が施された銀の指輪が輝いている。

「こ、これは」

屈強な門番が見る見る青ざめていった。アッシュコレット家は知らなかつたようだが、やはりバルトシュタイン家のことはよく知つていたようだ。

「俺は、バルトシュタイン家当主であるローゼン・バルトシュタインだ。早く開門しろ、門番」

軽薄ともいえる普段の態度はなりを潜め、さながら獅子のように彼は命令した。その声が届いたのか、背後にはひれ伏す人々がいた。フロウリーだけは不愉快そうにそっぽを向いている。

北城門を通過した二人は城に向かう前に市場に立ち寄つた。そこ

には多くの市民が混在していて歩けば必ず肩がぶつかる程の人と人との距離は近い。それ故に、フロウリーの臭いは圧倒的な避けられた方だった。

「お前のおかげで歩きやすいな」

「感謝しろ。これが私の仁徳だ。指輪を見せなくては何もできない馬鹿貴族とは違うだろ?」

「つるせえ、とローゼンは後頭部を撫でながら悪態をついた。そもそも北城門は市民などが利用するための門であつて、貴族には専用の城門が用意されている。南城門と呼ばれる門だ。そこでは指輪を見せる必要などない。門番が貴族の顔をすべて記憶しているからだ。」

「いちいち文句の多い男だ。何が気にくわないか言つてみろ」
市場の中央でフロウリーはいきなり進行方向を変えた。これまでの大通りから薄暗い小道に進んでいく。

「星の数ほどあるが、とりあえずは俺を帝都に連れてきた理由を教えないことに文句がある」

「そんなことか。お前は小さい男だな」

文句には応じるつもりはなかつたようだ。彼女はさらに細い道に入つていいく。ローゼンの肩幅では体を横にしてやつと通れるほどの狭さだ。

「おい、どこに行くつもりだ。これは明らかに猫の通り道だろ」「猫に似ているとよく言われたものだな」

「ああ、化け猫ならそつくりだ」

少し広い場所に出るとフロウリーが振り返つた。先ほどの軽口に怒つたわけではなさそうだが、ローゼンは一応身構えた。

「ここは常連なんだ」

それだけ言ったフロウリーはそのまま脇を通り過ぎた。手前には一軒のバーが店を構えている。看板は無いが、外に放置された空ボトルが代わりをはたしている。

「フロウリーだ。邪魔するぞ」

店内にはまったくと言つていゝ程に何も無い。あるのはカウンタ

「だけで、奥の棚にはボトルが一本も置かれていない。ローゼンには空き家にしか見えなかつた。

「おこ、こんな空き家で何をするつもりだ」

「つむさい。別に、お前といやらしさーとをするつもりじやないから安心しろ。それに、ここは空き家じやない」

「その通り」

フロウリーの言葉に便乗するかのよつにカウンターの奥から低い声がした。振り返ると懐かしい男が立つていた。

「ローゼンか……、久しぶりだな。エロール様はご健在か？」

「レフイスト子爵ですか……」

カウンター越しに手を振る壯年の男は、リシャーナ・レフイスト子爵。第三皇子エロールの成人までの後見役を務めたことで知られる貴族。茶色の髪にどことなく愛嬌があり、歯をむき出しにした子どものような笑顔がまぶしい。

彼との再会はおよそ四年ぶりだつた。エロールが十六歳で成人して以来だ。

「いや、まさかこんな場所で再会するとは……」

何と言つてよいかわからずに口ごもるローゼン。リシャーナはカウンターを飛び越えてこちら側にやつてきた。
そしていきなりこう言つた。

「エロール様と仲違ひしたそじやないか？ 理由はフロウリーから聞いているぞ」

ローゼンはさらに戸惑つた。つい十日前のことだけにまだ鮮明に覚えていたからだ。

「いや、それは……」

「はは、緊張するな。俺が聞いた限りでは、エロール様はちと強引だ。もう少しはお前のことも考えて行動されるべきだ」

狭い道を通つたために汚れた肩を叩かれたローゼンは、無性に何かを言いたくてたまらない衝動に駆られた。それを言葉にしようとしたがどうにも上手くいかず、助けを求めるように振り返つた。

フロウリーは壁にもたれかかった状態で瞑想していた。自分はここにはいない、と誇示しているようだ。それは不介入の姿勢だ。

「さてさて、お前は戦争への参加を渋っているらしいが、理由はゴードレス男爵への恩義か？ そうだらうなあ」

頷きながら、ローゼンの肩に手を回す。友達のような動作に、古い知り合いながらも抵抗を覚えた。

「でもな、敵は敵だぞ。一兵卒だつて、身内で殺し合ひをさせられてるはずだ。俺たち貴族だけが、わがまま言つちゃいけないだろ」

「……同じようなことをフロウリーから言われました」

そう切り返すと、リシャーナの表情が固まった。小さく口笛を吹きながら、視線をフロウリーに送る。

「おい、重複したぞ。せつかく、渾身のかつこいい台詞を考えてきたのにどうすりやいいんだよ」

「知るか」

一言で切り捨てられてしまつたリシャーナはため息をついて脱力した。全体重がローゼンにかかり、崩れそうになる。

「重いです、ちゃんと立つてください」

「これしきに耐えられない男が、ゴードレス男爵を斬れるか、馬鹿」「俺は、絶対にの方とは剣を交えたくありません。エロールの頼みでも、これだけは譲れません」

「そう言つなよ。ゴードレス男爵の強さは知つてゐるだろ。聖騎士にはなれなかつたことが信じられない実力者で、倒すとしたら、それこそ聖騎士じやないと無理だつて。北から呼び出すような余裕がないことは承知だろ？」

「首都から、適當な騎士を呼べばいいでしよう」

「役に立たないだろ。お前じやなきや、敵わないつて言つてるだろ」
堂々巡りになる会話。最初は熱心に説得していたリシャーナも、だんだんとやる気を削がれ、ついには投げた。

「フロウリー、代われ」

「放棄するな！ 最後まで粘れ！ 相談したときに、偉うこと

言つてたのは、誰だ！」「

「俺の幻影さ

「子どもか、お前は！」「

怒鳴りながらも、フロウリーは渋々進み出た。ローゼンの胸倉を掴み、自分の顔の位置まで引き込む。

「何だよ、酒乱」「

「つるさいぞ。いい加減に、腹を決める。過去がどうだろうと、ゴーデレスは敵だ、裏切者だ、倒さねばならない相手だ。理解していられるなら、すぐに納得してしまえ」

リシャーナと違い、彼女は強く詰め寄る。貴族たる役目云々など細かいことは言わず、単純に敵を倒せ、とだけ。

だが、肝心のローゼンはそれを鼻で笑い。一呼吸置いてから、逆にフロウリーを高々と持ち上げた。片腕で成人女性を軽々と自分の身長より高い位置に。

「つるせえよ、下級貴族」

罵りながら、解放した。フロウリーは受け身を取れず、強打した腰を押された。すでに酔いは醒めていたようだ。

苦悶する相手を無作法にも跨ぎ、出口立てたところローゼンは振り返った。

「こんな汚い場所で説得とは、お前たちも馬鹿だな。俺は、絶対に戦わないぞ。お前たちで好き勝手にすればいい」

呼び止めようとするリシャーナの声を無視し、ローゼンは帰ってしまった。取り残されたフロウリーはすぐに追いかけよつとするが、腰の怪我が許さない。

「あの、変態め……。無駄なところで強情を張りやがって……」

声を出すだけで鈍い痛みが走る。この怪我は治癒するだろうか、と考えながら彼女はリシャーナの介抱を受けた。

第十四話 ～説得～（後書き）

次回の更新は、5月4日です。よろしくお願ひします。

第十五話 ～救いとは何か～

やがて雪が融けようとする時季。冬季における兵糧の確保は、何よりも困難だつたが、それでもやり遂げたことにエロールは安堵した。

領内から徴兵した兵士は千人。いずれも、農村から集めた。すでに収穫の季節を終えていることもあって、ある程度の給金を与えるという誘い文句に乗る若者は多かつた。訓練された傭兵を雇うことも考えたが、後腐れ考慮してそれは避けた。

いくつかの諸侯へ使いとして向かわせたティファンヌが戻ってきた。

「ただ今戻りました、エロール様」

腰を折るととも、彼女は書簡を差し出した。

「グロリアーナ侯爵、ヴェルギス伯爵より、各保有戦力に関する詳細な記録を受け取つてまいりました」

「ごくろうだつたね。しばらく、休むといい」

簡単な労いの言葉をかけ、そのまま下がらせた。エロールは暖炉の前に立ち、書簡を開いた。そこには、予想していたよりも頼もしい数が記されていた。

グロリアーナ侯爵 保有戦力、騎兵一百、弓兵五百、槍兵七百。

ヴェルギス伯爵 保有戦力、騎兵一百、弓兵四百、槍兵七百。

両者合わせて、二千七百。事前に用意させていた、フロウリーとリシャーナの兵力は、各一千。これにエロールの兵力を足せば、計

七千七百。

「厳しいな……」

思わず唇を噛んだ。少ない兵力ではないが、それでも心もとない。敵となる、「一ハリス共和国の兵力はさらに増強され、一万近くまで膨れ上がっているとなれば、どうしても七千七百では不利になる。もちろん、兵力がすべてではない、戦争において勝敗を分けるのは

将の器だ。一千三百の差を埋めるほどのがれどの能力が、ヒロールにあればだが。

そうなれば、どんな手段だらうと、ローゼンを戦場に引っ張り出さなければいけない。彼が自ら剣を振るわざとも、そこにいなければ彼の軍隊が動かせない。その保有する兵力は、味方では最大の三千。辺境伯ともなれば、領地の立地条件により一般諸侯よりも多く保有することになる。

さらに言つならば、ローゼンは聖騎士。まさに一騎当千の実力者。その圧倒的な戦闘能力があれば、敵の士気を削ぎ、味方の士気を鼓舞できる。

せめて彼の軍隊だけでも、と考えたがそれはできない。むしろ、彼一人のほうが重要だ。敵の総司令官代理である、ゴードレス元男爵は聖騎士ではないが、それに匹敵する実力者であることは周知の事実だ。対抗するには、ローゼンしかない。

「やはり、皇族しての権力を振りかざすしかないのだろうか……」もちろん、エロールとしてはそんなことは避けたい。ここで、皇族としての地位を利用するということは、主従の関係なしに自分を慕つてくれている人たちを裏切ることになる。

ティファンヌ、リシャーナ、フロウリー。そして、ローゼン。彼らがいなければ、今の自分はないだろう、とエロールは自覚している。

苦悩する彼の傍に寄り添う者がいた。彼の腰を少し超えるほどのがれどの身長 ロマリアであった。

「伯爵様。顔色が良くなりませんよ？」

「ああ、暖炉の火にあたりすぎたのかもしれないね……。あそこで、休むとするよ」

無理に微笑みながら、エロールは腰かけた。その膝に、ロマリアが座る。

「……ティファンヌさんから伺いました。その、バルトシュタイン様と仲違いされたそうですね。何故でしょうか？」

「ロマリアが気にすることではないよ」

「そんなことはありません！」

珍しく強気のロマリア。しっかりと、エロールを見据え、ぎゅっと両手を握つてくる。

隠し事はよそう、とエロールは正直に話すこととした。

「コーハ里斯共和国と戦争になることは、知っているね？」

「はい、ティファンヌさんから……」

「原因はそれだよ。敵の総司令官代理つまり、一番田に偉い人が、帝国の元貴族で、ローゼンの師匠だった人なんだよ。彼は、どうしても自分の師匠と剣を交えることを拒んでいてね。私は、どうあつても戦つてもらわないと困るんだよ

なるべくわかりやすく噛み碎く。ロマリアは真剣な表情で耳を傾けている。

「何とか説得しようとして、博士に頼んでみたのだけれど……。ローゼンは彼女を床に叩きつけてまで抵抗したそうだ」

先日、腰を押さえながら報告してきたフロウリーは、彼女には珍しく苦しんでいた。それは、肉体的なものだけではなかつただろう。

「正直なところ、もう時間が無いんだよ。どうしようもないんだよ

……

弱音を吐くエロール。彼はロマリアの身体を片手で抱きしめ、もう一方の手でその頭を撫でる。美しい金色の髪が心地よく、わずかに眠気を誘う。

そんな眠気が、一瞬にして吹き飛ばされた。

「どうして、そんなに辛いことなさるのですか？」

ロマリアが、全力でエロールの手を振り払つたのだ。彼女は身体を反転させ、正面から向き合つた。

「伯爵様は、バルト・シュタイン様と国からの命令を天秤にかけて、ご友人を裏切るのですか？ それが、人間のすることですか？」

厳しい指摘。それは、デイルファ教の教義に基づいた裏付けある指摘。だが、そんな精神的なことに耳を貸すほどの余裕は、エロー

ルにはなかつた。

はじめて、彼はロマリアに対して語調を強くする。

「宗教的な君にはわからないだろうが、戦争において慈しみの心など無意味だ。いや、その存在 자체が不必要と言つてもいい。くだらない感情を背負いながらでは、勝てる勝負にも勝てない」

「それは、詭弁です。誰かを思いやることができない愚か者がする言い訳でしかありません。恥ずかしくはないのですか？」「誰もがしていることだ。すでに、宗教など衰退している。敬虔に

毎日教会に通つたところで、神は私たちに何をしてくれるというのだ」

「宗教を根本から否定するかのような言葉の数々。教皇の娘である、ロマリアからすれば、例え婚約者だつと許しがたい。だが、彼女は怒りを抑えつけた。代わりに、否定されたばかりの慈しみの心で接することに切り替えた。

「確かに、我らが主は、私たちを必ずお救いになるとは限りません。ですが、助けることだけが救いだというわけではありません。その考え方は間違っています。試練を与えることも、我らが主による救いです。伯爵様がどんな選択をされるかによつて、あるいは救わるかもしだせん」

「それこそ、詭弁だ」

「違います。これは、教典をいかに解釈しているかによる価値観の相違です。私は、あらゆる試練は、我らが主に救われるためのものだと考えています。伯爵様は、どうお考えですか？」

「私は……」

言葉に詰まる。教典こそはすべて暗記し、最低限の主教的儀礼も果たしている彼だが、今回はじめて、本質を理解できていなかつたことに気付かされた。

「答えられませんか？」

しばらくして、ロマリアはエロールの膝から降りた。重みが無くなつたにも関わらず、彼にはまだ何かがあるかのような負荷を感じ

た。

部屋から出ようとするロマリアを、エロールは慌てて呼び止めた。
「待ってくれ。教えてくれ。私は、どうすれば救われるのだ」
すがるような言葉。苦悩する表情で、ロマリアは思わず心が揺れ
たが、すぐに立て直した。

「情けないです、伯爵様」

八歳と少女はまるで、北海に漂う棚氷のように冷たい目をしてい
た。

「一生、悩んでいいなさい」

それだけ言い残し、彼女はエロールの前から姿を消した。
取り残されたエロールは、しばらく呆然と立ち尽くした後、暖炉
の上の燭台や装飾品を、感情に任せて薙ぎ落つた。椅子を振り上げ
て窓硝子を砕き、机の果物を暖炉に投げ入れ、素手で壁を殴り、何
度も蹴つた。壁は、当然ながら痛がることはない。

一通り暴れたエロールは、暴力がいかに虚しいか気が付いた。こ
れから、自分は戦争というさらなる暴力に身を投じようとしている。
それを終えた自分は、どれだけの虚無感に苛まるのだろう。

第十五話 ～救いとは何か～（後書き）

次回の更新は、5月6日です。よろしくお願ひします。

第十六話 ～君が、親友だから～

応接室では、不機嫌な金髪と悲しそうな白髪が睨み合っている。自分が呼び出したにも関わらず、白髪は自ら口火を切らつとしない。金髪も同様に。

しばらくして、使用人が恭しく一礼して紅茶を運んできた。

「すまないね、ティファンヌ」

「恐れ入ります」

一瞬だけ、ローゼンとティファンヌの目が合った。お互に口を動かそうとするが、言葉にならず、応接室には再び男一人だけになる。紅茶は適温で飲みやすかつた。一口だけ口をつけ、ローゼンが切り出した。

「俺を呼び出した用事なら、大体は察しが付く。何度も言つが、俺は戦争には参加しない。お前が皇族だろうと、改易されようと、な」

「そう言つと思っていたよ」

あまりにも呆気ないエロールの態度。これまで、どうあっても参加させるつもりだった人間がここまで変わってしまったことに眉をしかめるローゼン。

「だから、私は、君を戦力として数えないことにした。無理矢理に戦場に引き出しても、半端な覚悟では役に立つどころか、邪魔になつてしまふからね」

ああ、とエロールは付け加えた。

「これは皮肉でも嫌味でもないよ。じつくりと考えて、私が自分で出した結論だ。そもそも、コードレス元男爵と君が戦う姿など、私も見たくない。悲しすぎるよ、師と弟子が命のやり取りをするなんて」

「それが戦争というものだ。お前もその程度は理解していく、納得しているだろ?」

珍しく感傷に浸る姿に、おもわずローゼンはつまらない一般論を

持ち出してしまった。これまでの自分が戦争参加を拒んできたことを考えれば、これ以上の矛盾はないだろう。彼は、やられたな、と自嘲した。

だが、エロールはその点には何も言わずに続ける。

「そうだ、君は正しい。それが戦争だ。その正しいであらう概念に正面から反発する姿勢こそが正しいのだろうね」

エロールは腰を上げ、暖炉に歩み寄った。視線を炎に向ける。

「先日、ロマリアからお叱りを受けてね。彼女の宗教観を説かれたよ。我らが主は、我々をお救いになるが、それは必ずしも優しいとは限らない、時に我らが主は試練という形で我々に救いを与える、とね。もっと拙い言い方だつたけれど、要約するならこうだろうね」振り返った彼の表情は晴れやかだった。巣くっていた迷いをすべて取り除くことに成功したというよりも、それは妥協した人間の晴れやかさだ。

それでも、諦めたわけではない。諦めと妥協は全く違う。エロールは後者で、自分は前者だとローゼンは気付かされた。

だが、すでに遅い。

「エロール、俺は――」

「もういいんだよ、ローゼン。君を悩ませ悪かったね」

優しく微笑むエロール。暖炉から戻り、ローゼンの肩に触れる。

「後は、私に任せてくれ」

そのまま立ち去ろうとするエロールを、ローゼンは立ち上りて引き留めた。必死に声を張り上げた。金切声だ。

「何故だ！ どうして、俺を責めない！ 自己中心的な、我儘な俺を、どうして責めない！ お前は皇族で、俺はただの辺境伯だぞ！」

その立場を利用して、俺に命令すれば済むことだろ！ どうしてだ！」

「君が、親友だからだ！」

暖炉の炎が揺れた。まるで、その声に揺さぶられたかのように。

「私たちの関係は親友だ！ 一人で馬鹿なことを語り合う私たちは、

決して皇族と辺境伯ではない！ 一人の人間としてお互いを見ている！ だからこそ、私は君の意志を尊重したいだけだ！」

すべてを吐き出したエロールは不格好な走り方で、その場から離れた。

取り残されてしまったローゼンは全身の力が抜け、座り込んだ。机が揺れ、紅茶がこぼれた。彼の容器だ。

あれは絶縁宣言だったのだろうか、と考え、それが被害妄想だと自分を恥じた。エロールは親友である自分の心境を汲み取ってくれたのだ。親友を傷つけてしまうならば、自らが棘の道に進もうとする自己犠牲。

「俺は……、馬鹿だ……」

泣きたくなつた。エロールがかつて暴れた部屋で、今度はローゼンが暴れた。

*

一階から物音がする。独房のような自室で、エロールは耳を塞いだ。耳障りだつたわけではない。以前の自分の姿がそこにあるようで恐ろしかつたのだ。

扉が開いた。ロマリアがゆっくりと中に入つてくる。

「バルトシュタイン様に、ご自分の気持ちをお伝えになられたのですね」

少し躊躇つてから答えた。

「……ああ、そうだよ」

「それでこそ、伯爵様です」

エロールの背中にロマリアがすり寄る。彼女は目をつぶり、まるで母親のように語りかける。

「辛いことをよく我慢しましたね。これで、伯爵様は救われます。いずれ救われます。それが、明日か、半年後か、一年後か、十年後かはわかりません。ですが、私はいつまでも拍車様と共にあります」

「ロマリア……」

その身体を抱きしめたい、と思った。エロールは何もしなかった。自分が触れてはいけないものだと感じた。今の自分では触れることは許されない。聖少女なのだ、ロマリアは。

神が彼女ほど慈悲深ければ、世界はどれだけ平和で、人々の笑顔に満ち溢れるのだろうか。

聖歌が聴こえる。ロマリアの声だ。まだ舌足らずだが、それはどんな教会で聴くよりも心地いい。同じ歌でも、歌い手ひとつで変わってしまうように、すべての事象は関わる人間によって変わる。何が中心になるか、それも事象を変える。

友情を優先した自分の判断は正しいのだろうか、とエロールは自問する。

自答することはできなかつた。

少なくともこの戦争が終わるまでには答えは出さなければいけない、と彼は心に決めた。

第十六話 ～君が、親友だから～（後書き）

次回の更新は、5月9日を予定しています。よろしくお願ひします。

す。

第十七話 ～布陣完了～

エロールが率いる共和国討伐軍は、早朝から出陣、正午にはアルス平原に至った。早々に布陣、各隊の隊長となる諸侯への連絡を済ませ、フロウリーを個別に呼び出した。

本陣を置く小高い丘には、農村からの志願兵が緊張した表情で遠くを見ている。すでに、共和国の帝国迎撃隊も布陣を完了しているのだ。両軍の距離は半里ほどで、間には水深が脛ほどまでの浅い川が流れている。

鎧がまるで様になつていらない兵士に案内されて本陣に入ると、屈強な一人の兵士に挟まれるかたちでエロールが腰かけていた。フロウリーに気付くと、彼は立ち上がり、ついてこようとする兵士に待機を命じた。

「忙しいところを申し訳ありません、博士。そちらの準備は整いましたか？」

「ああ、大丈夫だ」

彼女が率いる一千の兵だが、その半分は兵站に回されている。軍隊を進軍させるにおいて、どうしても補給するために兵力を割く必要がある。効率を考えて配置したが、それでも千人を失うことになった。

自隊の兵力を割かることを、戦功をあげようと躍起になつてゐる諸侯は嫌う。そういう事情もあり、エロールからすればフロウリーの隊の存在はありがたかった。彼女の隊が、それほど熟練していないことも気がかりだったので、できるだけ前線に出したくないという本音もあつたが。

エロールは本題を切り出した。

「やはり、指揮官はゴードレス元男爵でしょうか？」

「偵察兵曰く、あいつの家紋が軍旗になつてゐるそうだ。間違いないだろうな」

「ここからは到底見えないが、敵軍の大将旗には双剣が印されている。「アーダレス家と親交が浅い、フロウリーですら知っている。彼の家系は、その昔、外敵から帝国を死守した英雄の一人からはじまつているからだ。」

予想はしていて、覚悟もしていたことだったが、実際にそうなつてみると心が抵抗を示す。

「そうなると、どこから攻めるべきでしょうかね？」

「知るか。私は、あくまで『帝国典医博士』であつて、軍事は専門じゃない。正直なところ、まともに指揮ができるか不安になつているところだ」

そう言いながらも、その手はボトルを握つていない。不安を解消するために酒を飲まず、酒を飲まないことで平静を保とうとしているのだ。

「お前は、どう考えているんだ？」

「私ですか？」

ゆつくりと視線を、自軍と敵軍の間を流れる川に向ける。中州に、布陣している隊がある。共和国側の隊だ。それが、なかなか攻められずにいる最大の理由だった。

脛ほどまでの水位といえども、武装した状態では進軍速度は遅れ、そうしている間に敵軍の先制攻撃を許してしまつ危険性があるからだ。弓兵による一斉射撃があれば、それで完全に浮き足立ち、一気に敗北へ突き進むだろう。

だからこそ、慎重にならずにはいられなかつた。

「ですが、それは敵軍も同様だと思われます。私たちが先に動けば有利ですが、動かなければ有利にはならない。かと言つて、自らが先に動いても特に利点はない。そうなれば、敵もうかつには動きませんよ」

「それって、要するに膠着状態つてことだろ？」

論理的に説明したつもりのエロールは苦笑するしかなかつた。そう言わてしまえば、その通りだ。

「ところで」

頭をかきながら、フロウリーは周囲を見渡した。

「ロマリアとティファンヌ・リベラは留守番か？」

「当然です。ここは戦場ですから、使用人がいてもどうしようもありませんし、『神祇巫^{じんぎかんなぎ}』であるロマリアからすれば地獄ですよ。そもそも、女性が戦場に立つべきではありません」

「何だ、その男尊女卑思想は。本当は、私が戦場に立つことにも反対つてことか？」

「いえ、そういうつもりでは……」

不愉快そうに問い合わせられてお茶を濁したエロール。なだめながら、話を上手にすり替える。

「ところで、ゴードレス元男爵との交流は？」

「うん？ ああ、ほとんど無かったな。私は、正直なところ真面目な人間とそりが合わないからな」

「それは、博士に問題が……」

「あ？ 何か言ったか？」

「いえ、何も、とエロールは誤魔化した。

「貴族のくせに、あいつは領民のことを考えて行動しそぎなんだよ。税が納められないって相談されたら、馬鹿みたいに期限を延ばすし、馬上から降りて話すし、あれば貴族つていうより、庶民上がりの小役人だつたぞ」

「それこそが、元男爵の魅力ですからね。素晴らしいことですよ」

「そう、素晴らしいことだったのだ。」

「彼が改易されたことで領民の暴動が発生したことも不思議ではない。あれは間違った処分だったのだ。第三皇子に対する失言は許されないが、領地をすべて召し上げられるほどのことではない。」

「それを考えれば、やはりこの戦争も無意味なのだろう。」

「後腐れなど気にせず不参加を表明したローゼンの判断は、あるいは正しいものだったのかもしれない。」

「それでも。」

「いかに過去に功績を残した素晴らしい人間であつて、帝国に刃を向ける者は切らなければならないのでしょ？」

「そう……、だな」

戦わなければならないのだ。

どちらに正義があるかと問われれば、貴族制を廃したゴーハリス共和国にあるだろ？ だが、帝国にも正義がある。正義の反対は別の正義だとは断言しないが、それでもどちらにも『是』と『非』があることだけは明白だ。

ヒロールは咳払いしてから言った。

「そろそろ、お戻りください。」こちらから攻めるにしても、あちらから攻めてくるにしても、今は少しでも英気を養うべきです。博士もお休みになられたほうがよろしいかと」

「ああ、そうさせてもらひつ」

踵を返し、そのまま立ち去つたが、すぐにまた振り返つた。

「仮に 仮にだぞ？」

「そう、前置きしてから彼女は言つた。

「……『コードレスが自ら前線で剣を振るつた場合、お前はどうやって食い止めるつもりだ？』

「それは

」

彼にとつてこれほど答えづらに問いはなかつた。答えが手元に無いうえに、そもそも考えたくないのだ。

しばしの沈黙の後に答える

「大型の騎馬に鎧を着せた兵士を乗せて囮ませます。後から『兵』による一斉射撃で足止めを行い、槍兵を突撃させる計画です」

悪くない作戦だ。まさに兵法の定石。教育されたことがそのまま実践で應用できるわけではないが、強敵を討伐するにはこれしかないだろ？ 質で勝てないならば、量で勝るしかない。

「そうか、とだけ言い残してフロウリーは立ち去つた。

ヒロールはすぐには戻らず、もう一度敵軍を眺めた。小高い丘からよく見える。中州の隊もそのままだ。少しだけ視線を逸らすと、

自軍の前線が見える。ガイゼル・グロリアーナ侯爵率いる隊と、ハイドロ。ヴェーゲン伯爵率いる隊が一番手柄を争うことは容易に想像できる。リシャーナ・レフィスト子爵は争い事では後手に回る性格で、能力があるにも関わらず地味な勲功をあげるだけに甘んじている。今回もそうなるのだろう。

だが、どれだけ善戦しようと、コードレスが自ら出陣すれば戦況は一転して最悪になるだろう。それを考えると頭が痛い。

ローゼンの顔が脳裏をよぎる。彼の存在があれば、憂いなしに指揮を執ることができるのである。だが、それは友情を壊すことが条件だ。それを天秤にかければ、やはり友情に傾いてしまう。皇族として、一軍の将としてそれはあつてはならないことだろう。しかし、エドワールは後悔していない、少なくとも友情を守ることができたのだ。まだ負けると決まったわけではない、と自分に言い聞かせ、彼は本陣に戻った。

第十七話 ～布陣完了～（後書き）

一章を開始しました。次回の更新は、5月11日です。よろしく
お願いします。

中州に布陣する、自軍で最も小規模な隊を小高い丘から眺めながら、「ゴードレスは開戦の時を静かに待っていた。

「ここ数年からしわが目立つようになつた彼だが、鍛えられた筋肉は二十代の若者にも引けを取つていない。事実、今年で四十三歳になつたにも関わらず、彼に敵う者は共和国内にはいない。

背後から声をかけられて振り返つた。

「ゴードレス司令官代理、少々、相談があります」

声の主は、この軍団の副司令官を務める男、カール・スレットマンであった。二十五歳と若いが、実直な人柄を評価されたのだ。部下から信頼されているという点では、ゴードレスには及ばないが、それに次ぐほどの人望の持ち主でもある。

「どうしたというのだ、カール？」

彼は気軽に名前で呼ぶ。それは、一兵卒にいたるまで同様だ。自軍の仲間の顔と名前を、すべて記憶しているのだ。

「作戦についての最終確認をお願いしたく参上いたしました」

ゴードレスは苦笑させられた。カールを評価する一方で、心配性すぎる性格については余計だと時々思つていた。

遠くに布陣する隊を指さし、彼は言う。

「まず、帝国軍が先制攻撃を仕掛けた場合、中州に布陣する隊が足止め。その隙に、近くにいる隊から順に突撃。我が隊は、後手詰め。これで間違いはありませぬか？」

完璧だ　　とゴードレスは応じた。

「しかし、中州に布陣する隊は、わずか五百。いささか、寡兵ではありませぬか？」

「カールは、そう考えるか」

真剣な表情のゴードレスに、元々姿勢のいいカールがさらに背筋を正した。司令官代理に過ぎた進言をしてしまつたか、と自分を責

めた。

姿勢とは対照的に伏せがちな視線をあげると、腕組みをしたゴードレスが笑みを浮かべていた。

「その判断は、確かに正しい。よくぞ、申したな」

ゴードレスはカールの肩を叩いた。とてつもなく強い力であるはずが、同時に優しい力でもあった。そこから元気と勇気を与えられているような気分になってくる。

「よし、その進言を採用しよう。伝令、ここに」

すぐに軽装の伝令がやって来て、腰を折った。

「中州に布陣するムーアの隊に、私の隊から三百人移す。ムーアに伝えた後、すまないが、私に報告してくれ」

布陣が完了している状態から兵を動かすことは、軍略の基準からすれば邪道だ。普通の軍隊なら、規律を乱す進言だとして、きつい叱りをされるところだ。

だが、この共和国軍には、そのような古臭い基準は存在しない。この国が、帝国に真正面から挑むと決めた際に、『既存の規則はすべて不問とする』という決意を掲げたからだ。だから、各隊の指揮官も貴族ではない。平民だ。司令官代理であるゴードレスすらも、あくまで国の代表であるというだけで、それ以上でもそれ以下でもない。

伝令が去っていくのを最後まで見送り、再び視線をカールに向ける。

「立派な指揮官になつたな、カール。帝国の馬鹿貴族どもとは比べものにならんぞ」

「い、いえ、私などまだまでござります……」

滅相もない、と彼はかぶりを振った。その様子がおかしく、ゴードレスは豪快に笑つた。

カールは、農村の出身で、身分は当然ながら農民であつた。それが、今は立派に甲冑を着こなし、千人の部下の命を預かる立場にある。彼の進言を聞き入れることは、ゴードレスにとつては当たり前

のことであつたのだ。

もう一度、肩を叩く。

「そろそろ、隊に戻れ。いつまでも隊長が不在では、部下が不安になるぞ？」

そうやつて、カールを戻らせた。ゴードレスは再び帝国軍の軍勢を凝視する。

赤い薔薇の刺繡がされた軍旗は無い。

「ローゼンはいないのか……」

懐かしい記憶が不意に蘇る。

まだ、ゴードレスが帝国の貴族であつた時代よりも前、彼が家督を継いだのは二十九歳のときであつた。ちょうど、その頃、バルト・シュタイン辺境伯家の長男が彼の弟子になつた。まだ十歳であるにも関わらず、すでにローゼンからは将来の端正な顔立ちを予測させるものがあった。それだけでなく、彼には剣の才能も備わっていた。強い聖騎士になるだろうな」とゴードレスは期待していた。その期待を裏切ることなく、ローゼンは鍛錬を重ねて、ついに聖騎士に叙任された。自らが叶えられずに終わった夢を叶えてくれた弟子を、彼は手放しに褒めた。

なつかしい思い出だ。

自分にとつては最も楽しい時期であつただろ。

回顧すれば必ず、頬が緩む。

「はは、私も歳を重ねたな……」

肉体的なことではない。精神的なことだ。

身体こそはまだまだ動くが、昔のことを思い出して、いちいち躊躇しているようではすでに年寄ではないか。

今はこの戦場に集中しよう。ゴードレスは視線を逸らそうとした。

その時、彼は見てしまった。

新たに中州へ向かわせた三百の兵が到着した途端、明らかに帝国軍が動搖を示したのだ。配置換えを増援だと勘違いしたのだろうか、

と一瞬だけ考えたが、すぐに行動に移した。伝令を呼び、各隊への指示を伝えた。

「全隊、川を越えて帝国軍を殲滅せよ」

数分後、共和国軍は獣のような咆哮をあげて突撃を開始した。

第十八話 ～コーサリス共和国～（後書き）

次回の更新は、5月13日です。よろしくお願いします。

第十九話 ノアルス平原の戦い 前編

すでに両軍が激突している状況にも関わらず、リシャーナ・レフイスト子爵は壮大なため息をついた。隣の副官が驚いたような目で見ている。

そんな態度の彼だが、決して不真面目になっているのではない。冷静に戦況を見極めた上で、呆れたのだ。敵軍が少し布陣を変えただけで、それを攻撃の動作だと勘違いした前線の二隊 グロリアーナ侯爵とヴェーゲン伯爵は我先にと進軍をはじめたのだ。

中州に布陣していた敵軍から足止めされているのは、グロリアーナ侯の隊だ。そして、敵に川越させまいと必死に防戦しているのが、ヴェーゲン伯の隊だ。

「馬鹿ども、皇子からの命令がまだされていないだろ？」「……」

彼が隊をとどめている理由はそれだった。いかに勳功をたてようと、勝手な行動は処罰の対象だ。

そろそろ、グロリアーナ侯の隊が雲行き怪しくなってきた。満足に動けない状態では、敵の弓兵から狙い撃ちにされ、中州に上陸するなり槍兵から突かれ、あつという間にやせ細っていく。

川越を防いでいるヴェーゲン伯の隊はまだ大丈夫だろうが、地の利を活かせていないため、いずれは突破されるだろう。

舌打ちしたくなる気持ちを押さえて待つこと数分。待ちわびた伝令が姿を現した。

「おお、来た、来た！」

指揮官である彼自らが歩み寄ると、伝令は明らかに表情を強張らせた。普通、こういうことは側役がするものだからだ。

「皇子からの命令は？」

「は、はつ！ レフイスト子爵におきましては、隊の一部をヴェーゲン伯の援護に回し、槍兵に盾を持たせて一列にせよ、とのことであります！」

「よし、『苦労！』

すぐに側役を呼び、自隊を一つに分けた。七百を、ヴェーギン伯の隊に合流させ。のこった千三百から、槍兵を選び、盾を装備させた。命令通りに一列の横隊を完成させた。背後には弓兵と騎兵が控える。

ついに、グロリアーナ侯が後退をはじめた。中州に布陣していた敵も、じりじりと押しながら向かってくる。ヴェーギン伯は立て直しに成功したようだ。

「ああ、来るぞっ！　怯むなよ！」

鈍い音がした。衝突音だ。自隊の兵と敵兵の勇み声が聞こえる。グロリアーナ侯の隊は、そのまま後退を続ける。合流するよりも、後方で立て直しを図り、再起するつもりだらう。

そのまま帰つてくるな、とリシャーナは毒づいた。一度でも後退してしまえば、混乱してしまえば、それはもう邪魔になるだけだ。皇子の周囲を護衛してくれ、と彼は願つた。

弓兵に命じて、敵に向けて斉射を行う。槍兵を一十歩後退させ、騎兵を投入する。これだけで随分と有利になる。共和国側には、帝国と違い騎兵は用意されていなかつたため、容易に突き崩すことに成功した。

全員が平等であるといふ精神を持つ共和国軍は、特定の誰かが馬に乗ることを意図的に避けたのだ。乗馬できるといふことはそれだけで身分が高いといふことを表しているからだ。

敵が若干浮き足立つてゐることをリシャーナは見逃さず、すぐに指示を出す。

「槍兵、構えよ！　密集して突撃！　槍のない者は、剣を持ち、援護せよ！　帝国に栄光と勝利をもたらせ！」

大木槌で杭を叩くかのような突撃がはじまる。川を越えたばかりの隊が、再び押し戻されようとしている。すでに最後尾の兵は、足元が浸水していた。

押し切れるだらうか、と邪推する。あくまでこれは一時的な勢い

であつて、主導権はどちらかといえば、敵にある。川の向こうにはまだ待機状態の隊が布陣している。今後の戦況を見極めて、それから前進するつもりだろう。有利になろうが、不利になろうが、いずれは攻めてくる。遅いか早いかの違いだ。

視線を目の前の敵に戻す。

「恐れるな！ 押し返せ！ 槍兵は、騎兵の援護に切り替える！」

弓兵は側面から斉射せよ！ 徐々に敵を囮め！」

その声に従い、兵士たちは徐々に敵を取り囮む動きを見せた。共和国側もそうはさせまいとして、積極的に広がるうとする。

今度は、ヴォーゲン伯の隊に視線を移す。少しづつではあるが、押されているようだ。このままでは、グロリアーナ候の一の舞を踏みかねない。

脳裏に、合流という選択肢が浮かんだ。別々に戦うよりも一か所で戦うほうが、味方も増えて安心だが、その代わり、指揮系統を再編しなければならないことが問題になる。それらを天秤にかけると、その選択肢を破棄せざるを得なかつた。

後ろを振り返る。フロウリーの隊はまだ動かない。あれが助けに来れば、ほぼ確実にこの場を治めることができるだろう。

だが、やはり、動く気配はない。後退したグロリアーナ候の負傷兵の処置に追われているのかもしない。『帝国典医博士』であるフロウリーならば十分にあり得る。常に酔つていて、乱暴で、毒舌でも、彼女が怪我人を無視していられるはずがない。優しいのだ、本当は。

それでも、リシャーナからすれば今回だけは後回しにしてほしいところだった。

「くそ、一進一退だな！」

押されたと思えば、次には押し返す。堂々巡りだ。

その頃、本陣ではエロールとフロウリーが口論を繰り広げていた。

第十九話 ノアルス平原の戦い 前編（後書き）

次回の更新は、5月15日です。よろしくお願いします。

負傷した兵は、本陣にまで流れ込んでいた。あまりにも数が多くたために、治療するにしても場所がなかつたのだ。

そのことについては、全軍の司令官である、エロールも文句はなかつた。だが、目の前に敵が迫つてゐるにも関わらず、治療にばかり人員を割くやり方には目をつぶることはできなかつた。

自ら陣頭指揮を執る、フロウリーに抗議する。

「博士、今は、前線に兵を送ることが先決でしょう。負傷兵については、後程処置を施せば」

「黙つてろ！ 生きているやつより、死にかけているやつの方が優先だ！ 何もできないなら、指でも咥えていろ！」

手にしていた当て木を投げつけた。寸前でエロールは回避する。

「いいか！ こいつらは怪我人だ！ 私は、『帝国典医博士』として、こいつらを見捨てることはできない！」

「ですが

「くどい！」

普段からは想像もできない気迫。酔つてゐる彼女とはまるで別人だ。憑りつかれたのよに、彼女は自らの職務に直向きであつた。

本来なら、それも評価されるべきことだが、エロールからすればそうはいかない事情がある。共和国軍は、あきらかに帝国軍よりも勢いがあるのだ。リシャーナが中心となつて善戦してゐるもの、近いうちに押し負け、本陣まで侵略されることは容易に想像できる。この局面で、フロウリーの隊から援軍を出せるかによつて、勝敗が決すると言つても過言ではないのだ。

だから、エロールも引かない。

「司令官命令です。早々に、自隊を率いて、前線に向かつてください

「断る！」

聞く耳を持たない、フロウリー。さすがのエロールも、この状況で苛立たないわけがない。端正な顔を歪ませて、唾を飛ばす。

「いい加減にしてください！ 負ければ、すべてが終わりです！」

我々も、捕虜の恥ずかしめを受けることになるのですよ！」

「それがどうした！ 嫌なら、今すぐにでも帰れ！」

睨み合つ一人。側役ですらも、その間に入り込む隙がない。

*

共和国軍司令官代理である、ゴードレスは戦況を落ち着いた眼差しで見ていた。予想以上に、自軍に勢いがある。一見すると互角の争いだが、軍略的な良識を兼ね備えていて、経験豊富である彼には、じきに大きく片方に片方が蹂躪されるであろうことが想像できた。敵軍で特に息を吐いているのは、紫の朝顔の軍旗を掲げた隊だ。記憶が正しければ、あれはレフイスト家の家紋だ、とゴードレスは瞬きした。

レフイスト家といえば、当主が第三皇子の後見役を務めていたことで知られている。取りたて何かに優れている家系ではない。それが皇帝の子息を預かるまでに認められたということは、当主は優秀なのだろうと、これまでゴードレスは考えていた。

だが、それは見込み違いだった。そう判断せざるを得なかつた。いくら善戦しているといえど、指揮能力は平凡だ。

「農民であった、カールの方がよほど優秀だ」

本陣の背後に控える、カール・スレットマンの隊からは、静かにがらも鬼気迫るものを感じる。彼らを前線に投入すれば、勝利は確実だろう。経験が無かつたとしても、それは誰にでもわかるのではないだろうか。

それでも、まだ投入はしない。じつくりと、少しずつ敵を疲労させたところで、その時にこそ引導を渡すのだ。

ああ、これは負けたな リシャーナは周囲をばからずにつめ息をついた。

すでに、こちらが押されている。一度は川まで押し返したが、あつという間に逆転された。この隊の指揮官は、本当に農民出身か、と自分が情けなくなつた。

離れた場所にいた副官に声をかける。

「副官、少しずつ後退するぞ。アッシュコレット準男爵の隊と合流する」

隣を見ると、ヴォーギン伯の隊が壊滅状態で敗走していた。勢いを増した共和国側の隊が、それを追撃する。このままで、本陣に至つてしまつ。それまでには、確実に合流を済ませなくてはいけない。

それには、自隊の一部を切り捨てなくてはいけない。それを考えると頭が痛くなる。

「最前線にいる兵たちには後退することを伝えるな。俺が合図をしたら、すぐに離脱できるように準備させ」

冷酷非道な命令を副官に与える。唇を噛みしめて、副官は頷く。俺の苦しみも少しほとぼつしているのか、とリシャーナは苦笑した。

前を向いて言う。

「無能な司令官で申し訳ない。お前たちは、命を捨てて国に貢献した立派な男たちだ。こんなところで死んでも、誰の記憶にも、記録にも残らないだろうが、俺だけは生涯忘れないぞ」

聞こえるはずもない。最後に彼は深々と頭を下げた。

数分後、リシャーナの隊は仲間を見捨てて離脱を開始した。

第一十話 ノアルス平原の戦い 中編（後書き）

次回の更新は、5月17日です。よろしくお願いします。

本陣には絶望的な空気が漂っていた。仲間を半分置き去りにして後退してきたリシャーナをはじめ、各隊長たちからは疲労の色がうかがえる。普段より白い肌であるエロールだが、日陰にいるにも関わらず明らかに顔色が悪い。

頬をかきながらリシャーナが拳手する。

「エロール様、ここは全軍を撤退させるべきでしょう。我々が引き受けいたします。どうぞ、御身をお守りください」

自分で言つたことだが、彼は虚しくなつた。すでに、本陣は敵に囲まれてしまつてゐる。退路こそは断たれていないが、負傷兵を背負つた帝国軍が、勢いに乗る共和国軍から無傷で逃げおおせられる可能性は低い。

治療をする過程で血まみれになつてしまつたフロウリーが舌打ちする。

「その……、悪かったな。周りが見えてなかつた……、すまん」頃垂れて、殊勝な態度で謝罪する彼女を誰も責めることはなかつた。もはや、誰に責任があるかということはどうでもいいことだ。そんなことを考える気力も残つていないので。

「……博士、もう結構です」

その時、伝令が姿を現した。彼もまた、同様に疲労が色濃い。

「申し上げます、共和国側は、降伏を勧告する狼煙をあげています」天に向い、一本の煙が伸びてゐる。敵に降伏を勧告するためにつかわれるものだ。その申し出を蹴れば、すなわち全軍で攻めるという意味も含まれてゐる。

「いかがなされます、エロール様。ここは、敵の慈悲にすがりましようか。いかに敵だつと、帝国の皇子を手打ちにするようなことは

「ならん! 高貴なる貴族が、農民や亡命者の軍門に下るなど、そ

は

んな屈辱に耐えられるはずがない！」

「グロリアーナ侯爵に賛成だ！ そのような辱めを受けるならば、いつそ討死したほうがいい！ 私は、降伏には断固反対する！」

真っ先に敗走したグロリアーナ侯爵が怒鳴ろうと説得力に欠けるが、援護を受けていたとはいえば戦っていたヴォーギン伯が抗議すれば立派な意見として成立する。

意見が対立すれば、最終決定権は全軍の司令官である、エロールに託される。

「いかがなされますか、皇子！」

「さあ、」決断を！」

「降伏するのです、エロール様！」

時間はあまり残されていない。狼煙が消えれば、それで終わり。敵軍は、要求を棄却したと判断し、総攻撃を仕掛けてくるだろう。エロールはゆっくりと目を閉じる。

「我が軍は

脳裏に浮かんだのは、故郷で自分の無事を祈る人々。

ロマリア・デイルファ・ラスチエーノ。

ティファンヌ・リベラ。

そして、ローゼン・バルトシュタイン。

死にたくないと自らの本能が叫んでいるのと同じく、彼らも叫んでいる。

必ず、生きて帰れ。

答えは決まった。

「私が率いる隊以外の撤退をはじめる」

諸侯たちは度肝を抜かれた。それは、すなわち皇子を見捨てて落ち延びるということだ。そんなことをすれば、最低でも改易、最悪なら一族一首にされるほどの重罪だ。一般的に大逆罪と呼ばれ、一族に対する罪は一等重くなる。まして、エロールは第三皇子の身分。見捨てれば、確実に打ち首だらう。

リシャーナが唾を飛ばしながら説得を試みる。

「考え直されよ、エロール様！ そうなれば、御身は囚われることになり、我々は一族そろって打ち首。一度と、この屈辱を晴らす機会を失いますぞ！」

「心配無用だ。私が、父上に一筆したためよう。それに今回の旨を記しておけば、皆の身に危害が及ぶことはない」

「し、しかし！」

それでも、リシャーナは引き留めようとすると。彼からすれば、一番の問題は、自らの命ではなく、エロールの身の安全だつた。確かに、帝国の皇子となれば雑な扱いをするわけにはいかないだろう。それでも、共和国内にも強行的な考えをもつ輩がいて、命を狙われないという確証はない。

必死になるリシャーナの肩を掴む者がいた。

「無駄だ。こいつが時々、強情になることは知っているだろ？、後見人」

「フロウリー……」

力が一瞬にして抜けた。倒れこまないよう注意しながら、下がる。

「お前が、どうしようと構わん。だが、残るというなら、私も残る！ 私は、お前の主治医だ！」

力強く進み出る。その目には迷いがない。

「……命の補償はありませんよ、博士」

「お前よりは早く死なん。私は百歳まで生きる」

すでに、狼煙は消えかかっていた。時間がない。エロールは、リシャーナに撤退の指示を与える。最後の瞬間まで、リシャーナは納得することはなかつたが、それでも苦虫を噛み潰した表情で耐えていた。

本陣に残つたのは、わずかに八百。騎馬はすべて撤退するために回したので、全員が歩兵。最後尾で指揮を執る、エロールすらも自ら剣を抜いた。

その姿を見て、フロウリーは一言。

「似合わないな」

「大きなお世話です。そんなことは自覚しています」
色白で、今にも死にそうな男が剣を握ったところで別段どうとも
ない。実際、天気が晴れならば彼はすぐにでも倒れただろう。

剣の柄を撫でながら、エロールは言う。

「剣を握る姿が様になるような、筋骨逞しい男が助けにくれば、私
たちの命も安泰でしょうね」

「だろうな」

狼煙が消えた。敵軍から掛け声がこだまする。自軍を遙かにしの
ぐ兵力を目の当たりにしながらも、エロールとフロウリーには恐怖
などほとんど無かつた。

「全軍、突撃せよ！」

慣れない動作で構えられた剣が、敵軍に向けられた。

第一十一話 ～アルス平原の戦い 後編～（後書き）

次回の更新は、5月21日です。よろしくお願いします。

第一十一話 ～再戦への布石～

リシャーナ・レフイストは満身創痍で自分の館にたどり着いた。皇族を置き去りにして戦場から帰還すると、早々に帝都へ召集され、グロリアーナ侯爵とヴェーギン伯爵と共に沙汰を受けた。

再戦への準備を早急に済ませること それが、リシャーナへの沙汰であった。

疲弊しきつた身体には堪えるが、実のところ、その程度で済んでよかつたというのが彼の本音だ。同じく戦場から離脱してきた、グロリアーナとヴェーギンには期限付きの謹慎が命じられたのだ。再戦まで一切の行動を制限されるということだ。

まず彼は、すでに夜中だというのにエロールの館を訪れた。

「この度は、エロール様を置き去りにするという失態をいたしました。再戦に向けて、可能な限り尽力いたしますので、ご容赦ください」頭を下げた相手は、エロールの妻となる予定であるロマリアではなく、使用人であるティファンヌであった。

レフイスト子爵家の当主である男に頭を下げられ、さすがの彼女も動搖する。

「い、いえ、私はただの使用人です。謝罪なら、ロマリア様に……」

「ロマリアは、まだ起きているのか？」

「すでに、お休みになられましたが、どうされます？」

起こすな、とリシャーナは念を押した。後日、しつかりと説明しようとした。

「ところで、ティファンヌ。あいつは、今どうしている？」

「あいつ、ですか？」

「ローゼンだ」

「……ここ数日は、音沙汰がございません。恐らく、エロール様が捕縛されたことについても、まだご存じないかと」

やはりそうか、と思つた彼は、ローゼンに対して怒りを覚えた。

仮に捕縛のことを知らなかつたとして、あれから引きこもつたままでいることが許せない。敗北したといえど、可能な限り全力で戦つたつもりである彼からすれば、侮辱も甚だしい。

怒りを表情に出さないよつて言ひつ。

「実は、軍務卿から命令を受けた。再戦に向けて早急に再軍備をせよ、とのことだ。今回の戦いで、主力をほとんど失つてしまつたから、遠方の貴族からも兵を借りなければならない。ティファンヌ、お前にも頼み事をしていいか?」

「私にできることなら、どうぞお申しつけ下さー」

「引きこもりの金髪を今度こそ、戦場に引きずり出してくれ」

唇を噛み、視線を逸らす。ティファンヌはしばらく考えてから返事をした。

「可能な限り尽力いたします。さっそく、明日、バルトシュタイン家の館へ向かいます」

「頼む。悔しいが、今回の敗戦で身に染みた。ローゼンがいないと分が悪すぎる。もともと、我々の軍は士気が低いからな」

責任をすべて兵士に押し付けるつもりはなかつたが、そうやって合理化なしていかなければどうにもならないほど、彼の頭は混乱していた。

これからすべきことを考えると頭が痛くなる。兵を集めることで、最悪の場合は訓練の必要がある。兵糧を確保しようにも、すでに近隣の村々から徴収してしまつたために、もう一度同じことをするわけにはいかない。

そして、最大の障害は、エロールの姉と妹である。アレシアスとイゼルナ 厄介きわまりない人種だ。

いつそのこと、自分も改易されて、コーハリス共和国に合流すれば楽になれるのではないか、と彼は邪なことを考えた。

*

エロール第三皇子が敵により捕縛されました 血相を変えて使用者が伝えてきたことも、ローゼンからすればどうでもいいことであつた。

あいつらしいやり方だ、彼は納得した。敗北したことは全力で戦つた結果だろうが、捕縛されたことについては故意だろう、と。皇族である人間を置き去りにして帰還するような貴族など、この国内にはいない。ならば、それは命令されたことに違いない。

これは、エロールからの伝言であると彼は確信した。

「要するに、助ける、つてことかよ。しかも、フロウリーまで一緒つていうところが、芸が細かいな」

不謹慎なことであるが、まったく心配ではなかつた。共和国側にゴードレスがいるなら、捕虜に対して非人道的な所業がなされることはないだろう。それだけで、彼からすれば大きな安心であつた。

だが、だからといって自ら戦地に赴くつもりは毛頭ない。確かに、ゴードレスの戦闘能力は脅威になりうるが、それを超える聖騎士なら国内に数人はいる。彼らを送り込めば、それで万事解決する。むしろ、そうすれば今回の敗北もなかつただろう。

「……俺じゃなきや、殺してもいいんだよ」

そう、自分以外の人間が、ゴードレスを殺めることについてはまだ我慢できる。だが、自分で手を下してしまえば、誰を恨んでいいかわからなくなる。自分を恨めばいいのだが、そうやって割り切れるほど彼は冷徹になれない。

誰かが背中を押してくれることを待つていてる 彼はそう自己分析していた。中途半端なんだよ、と何度も心の中で悪態をついたこともある。自分の弱さを責任転嫁していたのだ。情けないな、とおもわず自嘲する。

扉を叩く音がした。年嵩の使用人であつた。お客人です、と彼は告げた。

第一十一話 ～再戦への布石～（後書き）

次回の更新は、5月26日です。よろしくお願いします。

バルトシュタイン家の起源は、約百年前に遡る。当時の帝国は存亡の危機に瀕していて、外敵と戦うために剣すら握つたことのない農民を寄せ集めていた。その絶望的な戦争を終結させたと伝えられている英雄たちと肩を並べた敵将、それが、バルトシュタイン家の始祖である、フィネット・バルトシュタインである。戦争終結を予期して、さらに自軍の敗北を悟つた彼女は、あつさりと帝国に寝返つたのだ。

最終的には辺境伯の爵位を与えられ、広大な領土を有することになつたが、それでも周囲は冷淡であつた。所詮は妬みである、と割り切つて存続してきたのだが、ローゼンにはそれが耐えられなかつた。

公式の場でも冷たく扱われた、少年時代の彼は次第に内向的なり、ある程度成長すると反対に攻撃的な性格に変貌した。大人を敵視することで精神の均衡を保つていたのだと、今になつてみればわかるが、それでも容認できないほどひどい荒れかたであつた。

転機は、ゴードレス男爵とであつたことであつた。彼の家系は、帝国存亡の危機を救つた英雄の一族であり、同じく一代で成り上がつたバルトシュタイン家とは違い、常に尊敬されていた。そういう理由もあり、ローゼンは最初、いつもに増して敵意をむき出しにした。

そんな彼に、ゴードレス男爵は一声だけかけた。剣術に興味はないか、と。不思議なことに、ある、と素直に頷いてしまつた。

それからというもの、ローゼンの人生は一転したと言つても過言ではない。剣術を学ぶにつれて、行き場をなくしていた暴力はなりを潜め、性格も徐々に改善された。才能があつたのだろうか、それとも努力の賜物だろうか、聖騎士に叙任された。努力の積み重ねによる結果だと彼は信じている。

聖騎士として認められたことよりも、『ゴードレス男爵から褒められたことが何倍も価値のあることだった。よく努力したな、と握手を求められ、それに応じたときの感覚は今でも鮮明に覚えている。身体が記憶しているのだ。

それだけに、『ゴードレス男爵が改易されたことは衝撃であった。些細なことで激怒した、第一皇女アレシアスは当然憎いが、一番許せないのは、あるいは自分のことかもしれない。何故か、改易処分に対して異を唱えることができなかつたのだ。

自分に火の粉が降りかかることを恐れたから。

*

客人とは、ティファンヌ・リベラであった。ロマリアの姿はない。一人だつた。

「連絡を怠つての訪問をお許しください」

慇懃に一礼する姿からは気品が漂う。美貌だけでなく、使用人としての能力も折り紙つきなのだから、貴族の間で話題になることは必然だろう。

机を挟んで向かい合つたちで、一人は腰かけた。ティファンヌが遠慮せずに座つたのは、対等な立場で話をするためだつた。

視線を逸らしながら、ローゼンが口火を切る。

「……エロールのことだが、残念だつたな。やはり、俺が参加すべきだつたようだ。本当にすまない」

「謝罪は必要ありません。すでに、レフイスト子爵から十分に謝罪をしていただきました。それよりも――」

あらかじめ決められた台詞を読んでいたような口調が、誰にでもわかるほどに真剣味を帯びる。

「後悔なさつているなら、実際に行動で示してください。こんなところで閉じこもつていいよりも、再戦に向けた準備にご協力ください」

丁寧な言葉づかいだが、それは一介の使用人が貴族に向かつて言うことを許さるような内容ではない。はたから見れば、まるでティファンヌが命令をしているようだ。

これまで定まることがなかつたローゼンの視線が、一点に集中した。二人はお互にお互いをしつかりと見据える。

「……ローゼン様にとつて、エロール様の存在はどのようなものでしょつか？」

「親友だ」

意識せずともすぐに返事ができた。それほどに、彼の中では当たリ前のことになっていた。

ティファンヌの表情が少しだけ優しくなる。

「では、友人と大切な恩人。どちらの味方になりますか？」

「大切な恩人だ。これだけは譲れない」

これもすぐに返事ができた。当然すぎることだつた。

そうですか、とティファンヌは頷いた。彼女はそれ以上何も言わずに席を立つた。去り際に、微笑を残して。

再び独りになつたローゼンは、ゆっくりと暖炉に近寄つた。飾つてある真剣に手を伸ばす。久しぶりのそれはあまり手に馴染まず、回転させると危うく落としそうになる。

「友人なら助ける義理にはならないな」

誰に聞かせるでもない独り言。もしくは、自らに向けた言葉だつたかもしれない。自らを鼓舞する言葉だろう。

友人を助ける義理などない。所詮、友人は友人に過ぎない。大切な恩人は、絶対に変えが利かない存在だ。

何故、それほどまでに違うものを比べようとするか不可思議でならない。馬鹿馬鹿しい。

だが。

親友と大切な恩人なら、ローゼンの天秤は前者に傾く。

「そうだ、エロールは親友だ。親友なら、しかたない。特別に助けてやるよ。感謝しろよ、幼女愛好者の変態野郎。ロマリアが成人す

るまで手を出したが、一度と不可能にしてやるやう「
意味の無いことを繰り返すのは、照れ隠しであった。

第一二三話 ～友人と恩人～（後書き）

次回更新は、5月29日です。よろしくお願ひします。

孤独な雰囲気を醸し出している、エロールであるが。それは勘違いだ、リシャーナはつづく。男の兄弟とは折り合いが悪いが、姉と妹からは非常に好かれている。捕縛されたことで取り乱すほどに好かれている。

リシャーナは、第一皇女イゼルナ・フロブレリア・アルチエーロ・シェアノートの館で、彼女と対面していた。ちょうど今、逃げ帰つたことについてのお叱りが終わつたところだ。

「うるさいよ、と心中で思いながら、リシャーナは本題に入る。「当然ながら、私には、エロール様を奪還する義務がございます。一刻も早く、お助け申し上げて、共和国を崩させたいと考えております」

視線を逸らして、されど、と言つ。

「共和国の軍は、思いのほか強力であります。先の一戦での敗北も、恥ずかしながら、油断したことが敗因でござります。ならば、こちらも強い軍隊が必要になります。ですが、すでに我が手元には殆ど残つておりません」

「つまり、兵を用意して欲しい、ということですね？」

「左様であります」

実際には、それだけではなく兵糧も欲しいところだが、それは我慢した。一人の人物に集中して借りをつくるのが、リシャーナの流儀だからだ。ましてや、相手は皇族。偉い相手とは、浅からず深からず付き合つものだ。

そんな彼が、いかなる経緯でエロールの後見人を務めることになつたかというと、単純な話が、金であった。当時のレフイスト家は、領内での大飢饉により、その年の年貢がまったくないという状況であった。最初こそ金目的であったが、最終的には情が移つてしまつた。

後見人を務めていなければ助けることはなかつただらう、とリシヤーナは冷静に、無情なことを考える。

しばらく考えていたイゼルナが答える。

「いいでしょ、兵を貸しましょ。ただし、条件があります」「条件？ どのような条件でしょか？」

大体は想像できたが、確認のために尋ねておく。

「兄上様を奪還するための戦いに、私を加えなさい。その戦いは、聖戦と言つても過言ではありません。私が、皇族の代表として指揮を執つて差し上げます」

結構です とは言えない。実は、そう要求されるだらうと考へ、事前に準備は済ませていた。

「光栄に存じます。イゼルナ様の指揮下に入れば、必ず勝利し、囚われのエロール様をお救いできるでしょ」

邪魔するなよ、というのが本音であった。

ともあれ、これで兵力を確保するという課題は攻略した。すると、残る問題は兵糧と武具、そして指揮官だ。

あの敗戦で学んだことは多いが、やはり指揮官の質が大切だとうことは痛いほどわかつた。グロリアーナ侯爵とヴェーギン伯爵は、無能でないが、とりわけ有能でもない。あの一人と再び戦場にて戦うことなど、願い下げだ。

ならば、曲者だらうと、有能な貴族を味方につけた方が利口だ。

「私は、これから最北に向います」

去り際に、リシャーナが呟いた言葉に、イゼルナは敏感に反応した。

「ノースフィールド子爵に会つつもりですか！ やめなさい、後悔しますよ！」

彼女が焦るのも無理はない。最北の帝国領である島を領有する貴族、ノースフィールド子爵家には黒い噂が絶えない。異界からの移住者の子孫であるとか、根も葉もない噂だが、国内では忌避されている。

だが、慌てる理由はそれだけではない。

「この時期に、あの島へ渡航することは不可能でしょう！ 何を馬鹿なことを！」

そう、ノースフィールド家が領有してる島は、夏季のわずかな期間に渡航できるだけなのだ。原因となっているのは、棚氷だ。それが船の行く手を拒むのだ。故に、ノースフィールド家は、貴族なら一年に一度上洛する義務があるにも関わらず、それが三年に一度とされている。

「事態の深刻を開拓するには、不可能を可能にするしかありません。私は、護衛を引き連れて、棚氷を歩きます。」

さりとした口調だが、それは簡単なことではない。棚氷だろうと、そこは極寒であり、半端な装備では生きて帰ることは困難だろう。野生生物の存在もあり、敵は寒さに限ったことではない。

ここで、リシャーナに死なれては困る。引き留めようとするイゼルナだが、早足で退出する彼をとめることは叶わなかつた。

*

イゼルナの館を後にすると、休む間もなくローゼンの館に馬車を走らせた。

一度は殴つてもいいだろうと考えていたが、実際に会つたことでそんな気持ちは失せた。ローゼンが、すでに臨戦態勢に入つていてからだ。田には霸気が宿つている。

最北の島に向かうことを告げると、彼は同行を申し出た。錆びついている感覚を取り戻し、自分に活を入れたいとのことだった。もちろん、承諾した。

「しかし、よく立ち直つたな。これが、ティファンヌ効果か？」

からかわれたローゼンは、形のいい顎を撫でながら答える。「どうでしょうね。フロウリーの年増に叱咤されるよりはやる気になりますけど」

「あいつも捕まっているぞ。助けたいんだろう？」

その問いには返事はなかつた。

代わりに、ローゼンは剣を抜いた。薔薇の彫刻がされた一点ものだ。バルトシュタイン家に相応しいその剣には、決意が宿っているように見えた。

第一十四話 ～準備段階～（後書き）

次回更新は、6月1日です。よろしくお願いします。

第一十五話 ～極寒の地へ～

帝国最北の地とされる島は、夏季のほんのわずかな期間を除いては渡航不可能である。だが、破天荒ながらも、島へつながる道が残されている。島の周囲を浮かぶ、巨大な氷棚の上を歩くことだ。中規模の木造船で棚氷までたどり着いた、リシャーナ率いる部隊は、構成員三十人。いずれも、屈強なだけでなく豪雪地帯の出身者である。イゼルナに兵を借りてからまだ三日も経っていないことを考えれば、充実した人員だ。

さらに、この部隊には心強い助つ人がいる。バルトシュタイン辺境伯家の当主にして、聖騎士の称号を持つ、ローゼン・バルトシュタインである。

身長こそはローゼンに少し劣るもの、岩のような逞しい筋肉をほこる男たちが、尊敬の眼差しで見ていく。帝国でも数少ない聖騎士が、それほどまでに格の違う実力者だという動かぬ証拠である。肩をすくめながら、ローゼンは言う。

「俺のことじつくり見てますけど、気でもあるんでしょうかね？」尊敬されることは嬉しいが、男に凝視されることは、彼の趣味ではなかつた。

「そんな軽口が叩けるなんて元気じゃないか……」

上等な毛皮であしらわれた防寒具をまといながらも、リシャーナは身を縮めていた。一方のローゼンは、普段とおほく変わらない服装であるにも関わらず顔色一つ変えない。

「聖騎士っていうのは、化け物ぞろいだな……」

「そうですね。単独で、この極寒から生還できる人もいますからね」その言葉に、男たちが反応した。口々に感嘆の声を漏らす。

「お前、覚悟してろよ。今はまだ昼間だから余裕でいられても、夜になつたら、さらに冷えるらしいぞ……」

この時点では、最も死に近い人間は自分であるにも関わらず、脅し

をかける。その寒さを体感することになるのは、彼も同様だ。

ローゼンは、進行方向を見定めた。一面の銀世界である。天候は良好で、日の光が射している。これから移動する条件としては、最高と言つてもいいだろう。仮に、吹雪であれば、ローゼンですらも余裕はなかつただろう。

そして、敵は寒さだけではない。この気候に適応できる生物が生息しているのだ。例えば、熊だが。その大きさは、大陸で見られる個体の倍を超える。加えて、凶暴性も増しているため、簡単には手が付けられない。音を鳴らすことで、こちらの存在をあらかじめ知らせれば遭遇する可能性は低いが、不運にも遭遇した場合には戦わざるを得ない。

肩を叩かれ、ローゼンは振り返った。

「さ、そろそろ向かうとしよう。今日中に、島までたどり着けないとなると厳しい……」

すでに、全員が装備を整えている。ローゼンは剣を確認して、殿しんがりを務めるとになった。

一步踏みしめる度に、足が沈む。歩けなくなるほどではないが、少しずつ水分を含んでいく軍靴が重くなつていいく。ここが氷の上だということを忘れていまいそうになるほど、周囲には何もない。動物避けの鈴が鳴る音だけが聞こえる。

ノースフィールド家の館がある島だが、島民は千人未満であり、そのため子爵といつても徴収できる税は限られている。さらに、年中が冬季であると言つても過言ではないので、漁業などの産業は存在しないに等しい。貴族とは名ばかりの貧乏人。平民にすら陰口を叩かれる斜陽の一族である。

そんな家が、国内で、特に貴族の間で忌避されているか。それは、出所不明な経歴が原因である。文献において、その存在がはじめて確認されたのは、約百年前。帝国が存亡の危機に瀕していした時代だ。ノースフィールド家は、バルトシュタイン家と同様に最終決戦直前に帝国へ寝返つたことで創設された。加えて、始祖である、ユーフ

オニー・ノースフィールドは異界の人間だという噂がある。伝説的な時代にはこの類の噂がありふれているが、ノースフィールド家については信憑性を超えて遍く伝わっている。

信じているわけではないが、ローゼンもあまり良い印象を抱いていない。似たような経歴で誕生した家だが、まるで別の生き物のようだと常々思っている。だが、一度は直接話してみたいという願望もある。

今回の動向を申し出の理由は、エロールを助けるためだけではなかつた。鈍った剣の感覚を研ぎ澄ます為と、覚悟をより強固にする為でもある。もしも、ノースフィールド家の当主が自分に近い人生を送ってきたならば、あるいは苦しみを共有できる仲間ができるかもしれない。皇族でありながら不遇な人生であったエロールと同じように。

エロールの存在は、ゴードレスと並んで、ローゼンにとっては特別だ。簡単に、ゴードレスへの恩義を優先させて、先の戦いに不參與わけではない。誰にも相談することなく、彼なりに悩んだ末に選んだ選択であった。

あるいは間違っているであろう決断だつたが、もしもそれについて過剰に咎められことがあつたならば、彼はその相手を許さなかつただろう。傲慢かもしれないが、彼は自分の選択を自分以外の誰かに咎められる謂ではないと考えている。そのせいで捕虜になつてしまつた、エロールとフロウリーならば別だが、他は納得できない。人を咎めるという行為は難しいことだ。咎める人間は、どんなに丁寧な口調だつと、必ず相手より高い位置にいることになる。相手のすべてを知つてもいい限り、反省させることは無理だろう。それは悪戯に傷つけることになる。

ある意味では、ローゼンは被害者である。肉体的にではない、精神的に苦しんだのだ。親友と恩人を天秤にかけるという苦行を与えられたのだ。

だが、ローゼンには、エロールたちに弁明するつもりなど毛頭な

かつた。助けた後に、どんなに罵られようが、
易されようが甘んじて受けれる覚悟だった。
絶交されようが、改

第一十五話 ～極寒の地～（後書き）

次回更新は、6月4日です。よろしくお願いします。感想があれば、ぜひお願いします。

獰猛なはずの熊が、目を剥き、血を流して、冷たい雪の上で絶命している。致命傷となつた傷は、成人男性の両腕を合わせた以上に太い首に深く刻まれている。

それだけの仕事を成し遂げたにも関わらず、ローゼンは涼しい顔で白い息を吐いている。

「一撃か。さすがだな……」

今にも倒れそうになりながら、リシャーナは贅辞する。だが、ローゼンはかぶりを振つてため息をついた。

「いえ、これではいけません。太刀筋が、微妙に違います。少しですが出遅れました」

それは謙遜ではなかつた。純粹に、自らの剣技に納得していないのだ。常人には華麗な動作に見えても、達人からすれば失敗なのだ。日々の鍛練を怠けていたことを、ローゼンは心の底から悔やんでいた。

もう一度、剣を抜く。細身の両刃には、細かい傷がある。先ほどの一撃で、恐らく、骨にあたつたのだろう。剣は万能ではない。素人が振り回せば、数人斬つただけで使い物にならなくなる。聖騎士ともなれば相当な人数を斬ることができるが、今のローゼンにはそれはできないだろう。

リシャーナが声をかけてきた。熊の解体が済んだようだ。少し遅れて歩き出す。

「レフイスト子爵は、ノースフィールド子爵との面識はありますか？」

ひとまず剣のことは忘れようと、気分転換に自ら話題を振つた。

「エリノーラ・ノースフィールドか……。最後に見たのは、かなり昔だな。今年で、二十八歳くらいか、あの女……」

「へえ、二十八歳ですか」

完全に好みの年齢であった。剣のことを頭の外に放り出し、さらに尋ねる。

「ちなみに、容姿のほうは？」

「美人。ただし、角度による」

最適な角度は横顔だ、と彼は言った。

質素な応接室には、質素な暖炉が備え付けられている。家具も同様で、高価な装飾など皆無である。子爵だろうと、人口千人未満の島の領主であれば暮らし向きは決して楽ではない。

扉が開き、黒髪を後頭部で一本の三つ編みにした女性が入室する。欠伸をしながら、自ら暖炉に火をつける。この島は、夏季を覗いて、火を絶やすことは命取りになるほど気温が低い。島民の死亡原因の第一位は、病氣でも戦死でもなく、凍死となっているほどだ。

火の勢いが安定すると、黒髪の女性 ノースフィールド子爵家当主である、エリノーラ・ノースフィールドは質素な長椅子に椅子に腰かけた。

「ああ、腹減ったなあ……」

貴族らしからぬ下品な発言をして、エリノーラはため息をつく。すでに五日以上もまともな食事をしていなかつたからだ。

徴収できる年貢が限られていて、さらに特記する産業も存在しないこの島では、定期的に飢餓に襲われる。それは領主も例外ではなく、生まれて二十八年間悩まされている。

「寝ようかなあ……」

少しづつ室内が温かくなつてきたことで、それに比例してエリノーラの臉は重くなる。空腹だろうと、寝てしまえば、その間は楽になれる。寝ようと、彼女は決めた。

だが、眠りに落ちる寸前でエリノーラは立ち上った。

「……戸締りはしておくか」

人口が少ないだけあって、島内の治安は非常に良いが、それでも用心するに越したことはない。意外にも、エリノーラは用心深い性格だった。

老朽化して色が剥げてしまった扉を開き、そこに誰もいないことを確認する。

「いや、そもそも、この館に私しかいないし……」

馬鹿だなあ、と苦笑いしながら扉を閉じようとした。その時、前方に人影が見えた。

最初こそは、島内にいる役人かと思ったエリノーラだが、違うと悟った。服装が、明らかに違った。この島では、彼女も含めて、あれだけ高級な服を着るものはいないからだ。

「失礼、どなただろうか？」

先ほどまでのだらけた姿勢を改め、貴族としての顔で尋ねる。人影は、金髪の青年と、茶髪の壮年男だった。

金髪の青年が答える。

「これは失礼、正門が空いていたので勝手に入ってしまった」

「いや、構わないよ」

あれは壊れているんだよ、とは言えなかつた。相手の正体が分からぬ状況で、舐められるような発言は控えなくてはならない。

独特の動きをしながら、金髪の青年は名乗る。

「申し遅れたが、私はローゼン・バルトシュタイン。バルトシュタイン辺境伯家の当主であります」

「レフイスト子爵家当主、リシャーナ・レフイスト……」

次いで、茶髪の男もふらふらになりながら名乗る。エリノーラは怪訝な顔で、死にそうなリシャーナを覗き込む。

「生きてますか？」

「一応……」

無理をして笑つた表情は、まるで意識不明から回復した直前のようすに青白い。釣られて、エリノーラも苦笑いする。

「私は、ノースフュールド子爵家当主のエリノーラ・ノースフュ

ルドです。ようこそ、我が館に」

「のままでは凍死するな、と考え、早々に中に招いた。

先ほど暖炉に火を入れた部屋で、三人は向かい合つて座った。椅子はちょうど三人分、部屋に置いてあつた。

「すると、お二人は、棚氷を歩いてここまで？」

当初からどのような手段を用いてたどり着いたのか気になつていて、そこまで破天荒だと考へていなかつたエリノーラは驚くとたが、いうより呆れた。

「ははは、驚かれるのも無理はありません。ここまで来るために雇つた男たちは、適当な宿に停まらせましたが、すでに限界のようでした。最後まで元気だったのは、この男だけですよ」

血色のよくなつたリシャーナの滑舌は完全に復活していた。隣に座るローゼンを軽く叩きながら、身振り手振りを交えて語る姿は、まるで役者だ。

「なるほど、さすがは聖騎士ということですか」

挨拶の際にローゼンが見せた独特な動作は、聖騎士のみが許される伝統的な儀礼で、エリノーラも実際に見たことは數回しかなかつた。同時に、聖騎士ならばこの程度の寒さなど平氣か、と納得した。「それで、どのような用向きでしようか。このような辺鄙な島までお越しになつたということは、相応の事情があるとお見受けしましたが」

雑談はこの程度で、とエリノーラは本題に入る準備をする。それを見て、ローゼンとリシャーナも姿勢を正して、神妙な表情になる。「よくぞお分かりで」

「この島に物見遊山といつはすもありませんからね」

「それもそうですね」

リシャーナは懐から、一枚の羊皮紙を取り出した。受け取つたエ

リノーラは熟読した後に、自ら切り出した。

「イゼルナ様というと、第一皇女殿下ですね。コーハリス共和国との戦に助力せよ、ということですが、戦があつたこと自体初耳でした」

「氷に閉ざされた世界では仕方がありませんよ。ですが、エロール様が捕縛されたとなると、無関係では通せませんな」

「第三皇子殿下が、敵の捕虜に？ それは間違いないのですか！」

「私も参加していただからな。エロール様の判断が無ければ、恐らく全滅は免れなかつただろうな」

悔しそうに唇を噛むリシャーナ。その姿を見て、忠義だな、とエリノーラは冷ややかな評価を下した。

忠義というものに、エリノーラは むしろノースフィールド家は縁が無い。地理的な理由だけでなく、心も帝国の中心から距離を置いているからだ。黒い噂がるだけに、誰も進んでノースフィールドと関わろうとしなかつただけに、その溝はより一層深くなつてしまつたのだ。

役人が派遣されてくることもあるが、誰もが任期制であるために、深いつながりを持つこともできなかつた。島民との関係もそれほど深くない。

だから、エリノーラは友情だと、忠義だと、その手の感情には関心が浅かつた。

「助力するのは吝かではありませんが、何故私が選ばれたのですか？ この地から出陣するとなると、相当な苦労が予想されますよ。装備と兵糧を揃えるにも時間が必要です」

「その点は心配なさるな。装備と兵糧に関しては、イゼルナ様がありがたくも自ら揃えてくださるそうだ」

「ですが、私の配下は百人程度ですよ。これで役に立ちますか？」

「十分だ。足りない兵力は、イゼルナ様に掛け合つてみるさ」

遠回しに断ろうとするエリノーラだったが、肝心のリシャーナは勝手に話を進めてしまい、隙が無い。

ならば、と黙り込んでいたローゼンに対象を換える。

「バルトショタイン辺境伯はいかがでしょうか。私がいたところで足手まといだとは思いませんか？」

腕組みをしていたローゼンはゆっくりと口を開いた。

「確かに、横顔は最適な角度ですね。正面ならそうでもないのに、横からだと美人だ」

この重要な話し合いで、ローゼンはのん気にエリノーラの最適角度を研究していた。隣のリシャーナは、何も言わずに、椅子を蹴り倒した。

第一十六話 ～横顔美人の子爵家当主～（後書き）

次回の更新は、来週です。よろしくお願いします。

霧島卿

参戦についての返事はひとまず保留することにして、リシャーナは近くの町に行ってしまった。その際に彼は一言だけ言い残した。「形式上は参戦を任意にしているが、実際には皇女殿下からのお願いだからな。その点には留意しておかれよ」

脅しもいいところだな、とエリノーラは苦笑した。

「皇女殿下も、素直に命令なさればよろしいのにね。そう思いませんか、バルトシュタイン辺境伯？」

先ほどと同じ応接室で、ローゼンとエリノーラは暖炉の真正面に座つて談笑していた。ローゼンは頭を撫でながら返事をする。

「面倒な人間が多いのでしきう、皇族には。強制的に参戦させれば楽なものを、わざわざお願いするのだから理解できませんよ」

「第三皇子殿下も同じでしたか。それで、バルトシュタイン辺境伯は参戦を拒否されたのですか。納得です」

「はは……、納得されても困りますよ」

失言だったな、とローゼンは自分の発言を悔やんだ。参戦を拒否したという先例があることを知られれば、拒む口実になってしまつ可能性があるからだ。

「ですがね」

何か興味を惹き、参戦を促そつとするローゼンだが、話題を探す段階から進まない。そのつど適当に誤魔化すのだが、すでに限界に近かつた。

「ところで、バルトシュタイン辺境伯

「ええ、何でしようか？」

珍しくエリノーラから話題を振られ、ローゼンはすぐに反応する。

「この島をご覧になられて、何か感想などありませんか？ 島の今後において、島外の方からいただく意見は非常に重要ですので、ぜひお願ひいたします」

「島についての感想ですか……」

それどころじゃないだろう、と言い返したい気持ちを抑え、ここにたどり着くまでの道のりを思い出す。氷棚のことは省き、上陸後のことを見出しても、島内には大陸とは違った活気がまったくなかつた。気温が低いからだろう、民家はどこも窓を閉め切つていて人の気配がせず。売り場らしき場所では、まるで嵐が過ぎ去つた後のように荒れ果てた光景が広がつていた。

考えてみると、同行してきた男たちを泊めた宿以外では、人も一人も見ていなかつたのだ。

「……その、非常に言いにくいですが、寂れているとしか私には思えません」

お世辞で誤魔化すようなことはしなかつた。この狭い島で二十八年も生きているエリノーラにとつて、島内などすでに知り尽くした場所であるに違いないという確信があつたからだ。それに、領主がわざわざ意見を求めているというのに、それに対して嘘で答えるのはローゼンにとって耐えられないことだつた。

正直な意見を聞き、それが想像通りだつたエリノーラは両手を広げて天を仰いだ。

「そうでしょう。普通ならば、そう思われるのが正常でしょう」

「申し訳ない、ノースフィールド子爵……」

律儀に頭を下げるローゼン。構いませんよ。とエリノーラは声をかける。

「正直な意見をありがとうござります。大陸の方とお会いする機会が滅多にないので、必ず尋ねることにしているのですよ」

「そうですか……。あなたは良い領主ですね、子爵」

「そんな立派な存在ではありませんよ」

首を振るエリノーラ。それは謙遜ではなく、自分が良い領主とは遠い存在であるという負い目からの行動だつた。

「私が父の後を継いだ時期には 九年ほど前ですが、すでに島内の人口は千人を下回り、寂れる勢いは止まりません。主要な産業も

無く 強いて言つなら熊の毛皮程度ですが、獵師や毛皮職人がほとんどいないので、それもままなりません

「農作物も壊滅的だとか……」

「それは元々ですよ。農業には最悪な環境ですから、諦めています。林業も、下手に木を切りすぎると、冬場の薪が無くなりますからね」
冷静に島の現状を伝えられ、本来なら参戦を促すために足を運んだローゼンだが、心のどこかで目的を二の次に考える自分がいることに気が付いた。

そもそも、バルトシュタイン家とノースフィールド家は似たような出自であり、帝国に寝返ったという過去に関しても同じなのだ。だが、両家の扱いは後者が圧倒的に冷遇されている。

辺境伯として大陸に領地を持ち、さらには代々当主が『陪臣長』として年貢以外にも多額の報酬を得ているバルトシュタイン家。対して、ノースフィールド家は帝国最北の小さな島を領土としているだけで、特に高い官位も与えられず、他家とのつながりも薄いために困窮を極めている。

女性であるエリノーラが当主となつたのも、彼女の兄が適切な治療を受けることができずに夭折したためだった。この島には医者が二人しかおらず、それも経験の浅い若者で、さらに高級な薬も売られないことが原因だった。

「一応は、『ていこくしゅすいのかみ帝国主水正』として官位を頂いているので、生活できないというほどではありませんよ。使用者を雇う甲斐性はありませんけど」

「使用者すら雇えない つまり平民と大差ない生活ということだ。官位といつても、『帝国主水正』は従六位上。これだけで平均的な貴族の生活を維持するなど無理だらう。

よくよく見れば、エリノーラは顔立ちこそ並より上だが、衣服に使われている布は質が悪く、後ろで一本の三つ編みにしている黒髪もさほど綺麗ではない。身なりに気を使う余裕すらないのだろう。

「余計なことを言わせてしましたね、申し訳ない……」

「いえ、私が勝手に話しただけですから。愚痴を聞いてほしかったのでしょう、私は」

両者の間に気まずい空気が流れ、特にローゼンは何を言つていいか分からず、ただ黙るしかなかった。

しかし、この沈黙がローゼンに閃きをもたらした。

「 それなら、参戦することはノースフィールド家にとって得になるのでは？」

考えるまでもなかつたのだ。困窮しているにも関わらず、大陸とつながりを持てる機会を逃す道理など存在しない。これを利用すれば、容易に参戦することが可能ではないかと、ローゼンは気が付いた。

「 仮に、ローハリス共和国との一戦で勝利してエロールを奪還すれば、参戦していたノースフィールド家にも皇室から褒美があるかもしれませんよ。エロールからも何かしらあるかもしませんし」

「え、ええ、そうですね……」

これまで消極的な姿勢を見せていたエリノーラが、ここで初めて歯切れの悪い返事ながらも、肯定的な言葉を口にした。

「ですが、我が手勢は百人足らずで、皇女殿下から兵を借りてしまえば意味がありません。戦功は、自らの手勢で挙げることに意義があるのです。それは、聖騎士であるバルトシュタイン辺境伯が一番よくお分かりでしょう？」

筋の通つた切り返しだった、他家から兵を借りて戦功を挙げた場合、その利益は貸主に還元されることが軍法で明文化されているのだ。

だが、ここで引くわけにはいかないローゼンは押し続ける。

「それについては、私が取り計らいましょう。イゼルナ様は、単純にエロールを助けることだけが目的です。戦功ごとき、すべて子爵に下賜されるでしょう」

「そう、でしょうか？」

それでも渋るエリノーラに、最後の一押しとしてローゼンは付け

加える。

「私の戦功についても差し上げましょう」

「これが今のローゼンには精一杯の説得だった。リシャーナがいれば、さらに説得に厚みが増すのだろうが、彼に頼らずに説得する」とがローゼンにからすれば自分にとつての課題だった。それくらいは当然だと決めていたからだ。

しばらく口を閉ざし、一人で考え込んでいたエリノーラが返事をした。

「 私には、手勢一千を用意していただくよつて、皇女殿下にお伝えできますか？」

第一十七話 ～困難ある子爵家～（後書き）

次回更新は、来週を予定しています。
次もよろしくお願いします。

霧島卿

第一十八話 ～毛皮～

波止場には一隻の船も止められておらず、ただ降り積もる雪に圧倒されているように見えた。人影は皆無で、そもそも生き物の姿すらない。

ノースフィールドの館から出てしばらく、寒さに弱いリシャーナは早足で島内を散策していた。滅多に訪れる機会の無い場所だ。帰路に着くまではじっくりと巡ろう、と彼は考えていた。

「せめて除雪くらいはすればいいものを」

つまずかないように慎重に歩を進める。雪の下に氷が張っている箇所が特に危険だ。大陸にも雪は積るが、ここまでの大雪はあり得ない。レフィスト子爵家の領地でも領民を使役して除雪をするが、仮にここまでの大雪だとすれば死人が出ても不思議ではない。

寂れた島内を目の当たりにして、この先を憂いたリシャーナだが、自分にはどうすることもできないと直後に気付いた。自分の目的はあくまでノースフィールド家を参戦させることで、それ以上のことは誰からも求められていらない。そう言い聞かせて、館に続く道を進もうとした。

一步踏み出したところで背後から声をかけられた。

「すみません、ちょっとといいですか」

振り返ると、そこには厚着をした中年の男がいた。申し訳なさそうに軽く頭を下げて、無精髭を撫でながら歩み寄ってくる。

「旅人さんですか？」

「そうだな、旅人だ」

実際には違うが、ここで素性を明かしては面倒だろうと考えて話を合わせた。すっかり信じたのだろうか、中年の男は満足そうに頷いた。

「やっぱり、そうでしたか。すると棚氷の上を歩いてここまで？」

「ああ、そうだ」

「寒かつたでしょ。凶暴な獣もいたと思いますが、怪我はありませんでしたか？」

「問題ない。強い男が同行していたからな」

「へえ、あの獣たちに挑むなんて度胸のある人だ。まるで帝国の騎士様ですね」

当たらずとも遠からず。その男は聖騎士のだから。

「それで、これからどちらに行かれるのですか？」

「特に決めていないな。元気のあるうちは島内を散策するつもりだが」

「それは危険ですよ。この島の天気は気まぐれですから、今は晴れでいても突然雲行きが悪くなることもあります。今のうちに宿を確保することをお勧めしますよ」

「そうか、ならばそうするとじつ」

これで失礼、トリシャーナは踵を返した。だが、再び一歩踏み出したところで今度は肩を掴まれた。

「いや、よろしければ少し手伝つてもらいたいことがあるのですが、大丈夫ですか？」

中年の男は遠くに立つ建物を指さした。この距離からでもよく分かるほど古い木造の建物だ。

「実は、熊を解体していましてね。簡単な作業ですから、手伝つてもらえませんか。人手が足りなくて困り果てているのです」

改めて頭を下げられる。貴族ではあるが、まだ身分を明らかにしていないリシャーナは上手く断わる術がなかつた。中年の男も善人に違ひないだろう、と無理矢理自分を納得させて後に続いた。

遠くから見ても古い建物だつたが、近くで見るとむしろ汚い建物だつた。しかし、これだけの豪雪地帯でもつぶされることなく形を維持できているのだから、それなりの木材を使つているのだろう。

「いや、申し訳ない。少しだけ獣臭いですが、我慢してください」

「ああ うつ！」

大丈夫だ、と返事をしようとしたが、予想以上の獣臭さに一瞬呼

吸が止まってしまった。すぐに口だけで呼吸をしたが、鼻を塞いでいるにも関わらず臭さは変わらない。

「『』これはすさまじいな……」

「新鮮な熊ですから 死んでいますけど」

そう言いながら躊躇なく解体を始める。手際よく毛皮を剥ぎ、食糧となる箇所の肉だけを切り分ける。リシャーナは指示された通りに手伝つたが、実際の解体はすべて中年の男によつて行われた。

あまりに手慣れた動作に、当時は屠畜屋か何かをしているのだろうと思つたリシャーナだつたが、それを確かめてみると違つた。自分は毛皮職人を自指している、と中年の男は答えたのだ。

「今から職人を自指すには遅いですが、それでも努力はしていますよ。熊は罠を使って動きを封じればそれほど怖くはありませんから、ときどき狩りにいつっているのです。食糧にもなりますから、生活には困りません」

確かに、室内には肉を炙つた形跡がある。『』で生活しているのは本当のようだ。

「ああ、ところで」

肉を部位ごとに分ける作業の途中で、不意に中年の男は振り返つた。まだ名前を名乗つていなかつた、と申し訳なさそうに頭を下げた。

「自分は、この島の生まれでテッド・ニックマンです。どうぞよろしく」

相手が貴族であると知らず、堂々と握手を求めてくるテッド。あまり気は進まなかつたが、『』で偉そうにしても無駄だと考えたりシヤーナはそれに応じた。

「私は、リシャーナ。リシャーナ・アレフィストだ」

本来なら貴族が偽名を使うなど言語道断だが、すでに身分を隠している時点でリシャーナに罪悪感はなかつた。

「さて、私はこれで失礼させてもらひ」

律儀に後始末まで手伝い、完全に済ませたところリシャーナは

別れの挨拶をした。壁の隙間から除くと、晴れていたはずの空が少しづつ鈍色になっていた。これは降るだらう、と直感した。

「ああ、それならこれをお持ちくださいよ」

中年の男は先んじてリシャーナにお土産を手渡した。捌いたばかりの肉だった。

「股肉ですが、直接炙って塩をかけてください。私がおすすめしますよ」

何かの植物の葉にくるまれた状態だった。それでも血の匂いが強く、獸臭さも健在だ。だが、リシャーナは嫌な顔すらせずに受け取つた。

「いい体験だった、ありがと」

貴族としての体面があるために頭を下げる」とはしなかつたが、しつかりと相手の目を見てお礼を言った。

館に続く道の途中で立ち止まり、衣服の臭いを嗅いだ。

「臭いな」

とうぜんながら獸臭さがこびりついていた。しかし、生まれて初めて獸の解体に携わることができたのは良い経験だったとリシャーナは微笑んだ。

帰路では自ら熊を解体してみるのも面白いな、と。

第一十九話 ～弱音～（前書き）

三章はこれで最後です。

ノースフィールド子爵家が領有する島での滞在は最終日を迎えた。リシャーナは街の宿に泊めていた男たちを呼ぶため、一足先に館を出た。ローゼンはとすると、久方ぶりに大陸に向かうことで緊張する素振りを見せるエリノーラの肩の力を抜こうと奮戦していた。

「この時季の大陸はすでに暖かいです。その様な恰好は場違いでしょう」

「そ、そうでしょうか……」

一張羅といふことなのだろうか、質の良い毛皮を脱ぎ捨てる。すると途端に貧相に見える。顔立ちと体型こそは整っているのだが、それは庶民ならばという話で、普通にしていて貴族だと一目で分かるほどひの気品とは異なる。

「随分と、その、困窮されているようですね」

あまりにも氣の毒に思つたローゼンは、普段ならそこまで世話を焼くようなことはしないのだが、今回ばかりは憐憫を垂れた。

「大陸での一戦まで時間はあります。それまでに、使用人に命令して何かを用意させましょう。女性で、子爵と歳の近い使用人を知っています。彼女に用意させましょう」

ティファンヌ・リベラの顔を思い出す。彼女ならば一つ返事で引き受けてくれるだろうと。

それと同時に、ロマリアの顔が脳裏に浮かぶ。まだ八歳の少女だ。エロールが捕縛されてからは一度も、その顔を見ていない。ローゼン自身が故意に避けていたからだ。

考えてみれば、自分がここにいることも順序が逆転しているかもしれない、とローゼンは不意に己の矛盾に気が付いた。エロールを救出すれば、確かに罪滅ぼしとしては十分だろう。それならば、ロマリアからも何かを言われることはない。だが、それでは大切な何かを蔑ろにしているように思える。

先に、それも真っ先に頭を下げるべきなのだらう。それが正しい順序であり、聖騎士云々ではなく人として果たすべき礼儀ではないのだろうか、と。

急に黙り込んでしまったローゼン。それを訝しげに見つめるエリーラ。

「バルトシュタイン辺境伯、いかがなされました。何か悩み事でしょうか？」

「いえ、子爵には関係のないこと。私自身で解決すべき問題です」失礼にならない対応で、エリーラからの気遣いを断る。だが、意外にも彼女は食い下がった。

「そう仰らず。これから生死を共にする仲間ではありますか。悩みがつては、戦場での死期を早めるだけだと、亡き父上が申しておりました」

「父上様ですか。戦場に精通された方だったのでしょうか。それほどの言葉を遺されるとは」

「いえ、父上は生涯でほとんど人を殺めたことがないそうです」「それではあり得ないでしょう」

思わず苦笑する。直接に手を下さなくとも、貴族は指揮官として多くの人を間接的に殺してしまつものだ。

「貴族こそ、偉そうにしているものの最低の人殺しですよ。これら我々もその仲間になるのです」

「いいえ、父上は違います。常に荷駄役を押し付けられていたそうです」

「荷駄役だと？」

合点がいった。自軍の後方で物資の補給を担当する荷駄役ならば、必要以上に人を殺めることはないだろう。むしろ、殺めるなければいけない機会が訪れるほどの戦争自体少ないのだから。

「大陸の貴族ではないので軽んじられていましたのでしょう。ですが、父上はさほど気にされていました様子はありませんでした。今となつては分かりませんが、必要以上の殺生を避けられたことを喜んでおら

れたのではないか、と。少なくとも、娘である私はそう考へていま
す」

「 そりだらうな、とローゼンも思つた。

最北の地で貧困に苦しみ、貴族としての体面を守れていとはと
ても言えないノースフィールド子爵家。しかしながら、人間として
の大切なことはしっかりと守れている。

暖炉の火を始末するために踵を返すエリノーラ。その背中に、ロー
ゼンは少しだけ頭を下げた。

リシャーナ率いる遠征部隊が最北の島を出発したその夜。主無き
館の応接室で、女の使用人が暖炉を凝視していた。

冬季こそは大いに役立つ暖炉だが、春ともなれば役目を終えて火
を絶やす。自分もそれと似ているのではないか、とティファンヌは
悲しく思った。誰かに何かを言われたわけではない。彼女には主で
あるエロールだけでなく、その他の貴族たちも賞賛をする。働きふ
りが立派だと、有能だと、容姿が美しいだと、礼儀正しいだ
とか、これまでに彼女が受けた褒め言葉は尽きない。

普段は冷静で感情に乏しいエロールも、使用人であるティファン
ヌが褒められると自分のこと以上に喜ぶ。まるで親が子息の活躍を
見て頬を緩めるかのように。

されど不安はある。

「 私も来年で三十を迎えます。今まで優秀な使用人でいられるか

……

いつまでも若いままではいられない。誰しもが老いるように、テ
ィファンヌもまた老いる。次第に体力は衰え、これまでのように機
敏に仕事を済ませることは叶わなくなる。容姿も衰える。そうなれ
ば、自分は用済みになるのではないだろうか、と。

弱音など自分らしくないと思い、これまで抑えて生きてきた。だ

が、人間である以上は弱さと共に存しなければいけない。それによつて蓄積される鬱憤を晴らすために弱音を吐くのだから、無理矢理に押さえつけては解消することができなくなるのは必然だ。

この館で弱音を漏らすのは初めてだった。その相手がまさか暖炉とは、とティファンヌは自分の周囲を羨んだ。家族がいれば暖炉になど弱音をなく必要はないから。

だが、ここには自分と似たような境遇の人間がいる。それも、ティファンヌよりも遙かに幼い。まだ、八歳だ。本来なら甘えたい盛だろう。そう考へると、どうしても彼女は弱い姿を見せられない。別に母親としての役割を果たす必要はない。ただ、使用人として生きればいいのだ。それはこれまでに生きてきたやり方と変わらない。だが、それでもいいのだろうかと自問する。

「これから私はどう生きるべきなのでしょうか……」

誰にも相談できない。悲しさにティファンヌは涙を堪えた。

第一十九話 ～弱音～（後書き）

第三十話 ～大陸への帰還～

大陸に戻ったリシャーナの一行は、その足ですぐにイゼルナの館に向った。ノースフィールド子爵家の参戦を直接伝えるためだ。

使用者の案内で通された応接室では、以前よりも薄紫の髪が伸びたイゼルナが一行を待ち構えていた。挨拶も早々に、彼女はエリノーラへ近づいて一言。

「最北の島からよくぞ来てくれた、ノースフィールド子爵家当主エリノーラ・ノースフィールド。大陸での体調はいかがですか？」

意外にもその口調は優しい。俺の時とは違うな、とリシャーナは見えないよう肩を竦めた。

第二皇女からの労いの言葉に、滅多に大陸へ足を踏み入れないエリノーラは少し動搖したが、それでもすぐに子爵家の当主としての礼儀を示す。

「お言葉、身に余る光榮です。これまで帝国へ貢献することができなかつた我がノースフィールド子爵家。来る戦場で、第三皇子殿下をお救い申し上げるとともに、これまでの汚名を雪ぐ覚悟であります」

「期待していますよ、ノースフィールド子爵」

「御意」

深々とエリノーラが頭を下げる。イゼルナは満足そうに頷き、次にローゼンへ視線を送る。一転して口調が刺々しくなる。

「バルトシユタイン辺境伯、あなたは先のコーサリス共和国との戦で、兄上様の再三に渡る従軍要請を拒否して、敗戦の直接的な原因を作り出しました。それについては理解していますね」

自ら進み出て、大人と子ども程の身長差があるローゼンを睨みつける。目を逸らしたくなる本能を押さえ、視線を逸らさずに返事をする。

「心得ております、反省しております」

お前に言われるまでもない、と言いたいところだったがそれは控えた。ここで下手に反感を買えば、それこそ従軍から外される可能性もある。自らの手で、エロールの奪還を果たさなければならぬローゼンにとってそれは避けねばならないことだった。

「共和制などという絵空事を掲げる逆賊をこと！」とく我が剣で屠り、この世界に帝国ありということを近隣の諸国に骨の髏まで知らしめましよう」

「それでこそ、我が帝国が誇る最高戦力である聖騎士の一人。逆賊の首領の首級を挙げた曉には、兄上様の信頼を裏切った罪を特別に不問としましよう」

「はっ、全力を尽くします」

イゼルナが一人と話したのはそこまでだった。再戦に向けた今後の準備については、ここでリシャーナが代表してイゼルナと話すことになり、二人は応接室から退出を命じられた。

声が届かない中庭まで足を運んで、やつとローゼンは口を開く。
「兄上様の信頼を裏切った罪を特別に不問としましよう 小賢しいことを言つ皇女様だ。許すかどうかの判断はエロールがすることだろう」

気持ちの悪い兄妹愛だな、と吐き捨てた。

「そう思うでしよう、子爵」

同意を求められたエリノーラは首を傾げて、右手の人差し指でこめかみを突いた。

「バルトシュタイン辺境伯は、相手が皇族でも陰口を控えない方なのですね」

「意外でしようか」

「とても意外です。私たちの家系は出自が似ているので、常に弱みを握られないように細心の注意を払っているのだと思つていました。まして陰口を堂々とこんな場所で口にするとは、信じられません」

用心深いですね、とローゼンは笑つた。決して馬鹿にした笑いではなかつたが、そう受け取れなかつたエリノーラは親指でこめかみ

を強く押した。

「そのような余裕は感心できませんね。出自が褒められたものでない一族は、そうでない一族よりも警戒心を数段強く持たなければならぬと私は教育されました。バルトシュタイン辺境伯家では、そのような教育はされていないのですか」

「そんな馬鹿馬鹿しい教育をされた記憶はありません。されたところで、私のことです。頭の片隅にも残りませんよ」

ローゼンはまた笑う。今度こそはあざ笑うように。

「なるほど、聖騎士としての慢心ですか。最高戦力ともなると、さぞ優遇されているのでしょうか」

エリノーラも負けていない。皮肉な言葉をローゼンに浴びせて、一本の三つ編みにまとめた後ろ髪を撫でる。一人は口元だけを緩めて、軽く頷きながらお互いを凝視する。

そのままどちらも口を開かずに時間が流れる。応接室から人が出でくる気配はしない。

「ローゼン様ですか？」

退屈に耐えかねてローゼンが欠伸をした時だった、声がしたのは。ゆっくりと視線を動かすと、ティファンヌが来客用の待機室の前に立っていた。

早足で駆け寄り、ローゼンは尋ねる。

「ティファンヌ、ここで何をしている？」

「イゼルナ第二皇女殿下にお目通りをしたく参ったのです。今日は都合が悪いと使用人の方に言われたのですが、どうしてもロマリア様がそれに納得されないので、無理に待たせていただいているのです」

「何、ここにロマリアもいるのか！」

驚いたローゼンだが、冷静に考えてみると不思議なことではない。品行方正だと帝国の貴族の間でも知られているティファンヌだが、それでも身分は使用人に過ぎず、個人として皇女たるイゼルナに会うことなどできないからだ。ならば、他に皇女と遜色ない身分の人

間がいると考えるのが妥当だろ？

「ロマリア様は向こうのお部屋にいらっしゃいます。ローゼン様が皇女殿下のお屋敷にいらっしゃるということは、再戦の準備についてでしようか？」

「ああ、そうだ。向こうにいるノースフィールド子爵が従軍することになつて、それを殿下に直接ご報告するため参上した。今は殿下とレフィルと子爵が応接室で簡単な軍議をされているところだ」「左様ですか。では、その軍議はしばらく続くということでしょうか？」

「どうだろうな、それは俺にも分からん。だが、もうじき昼食の頃合いだ。まだ続くにしても、一度そこで休憩を挟まれるのではない

か」「

ローゼンは空を見上げる。太陽は雲に隠れてしまつてはいるが、それでも時期に正午だということは分かつた。彼自身も空腹を感じていたからだ。

エリノーラへ向き直り、彼女に呼びかける。

「彼女は、ティファンヌ・リベラ。エロールの使用人で、非常に優秀な女性だ。子爵の衣類は、すべて彼女に任せたつもりだったが、これで手間が省けた。頼むぞ、ティファンヌ」

かしこまりました、とティファンヌは頭を下げる。自らエリノーラに歩み寄り、また一礼する。

「御用があれば何なりとお申し付けください。不肖の身ですが、お役に立てれば幸いです」

「ありがとうございます。私は、エリノーラ・ノースフィールド。一応はノースフィールド子爵家の当主だから」

「ノースフィールド子爵ですね。では僭越ながら、エリノーラ様と呼称させていただきます。よろしいでしょうか？」

「好きにしていいわよ」

ありがとうござります、とティファンヌは言ひ、それからローゼンに提案をする。

「昼食まではしばらく時間があります。それまで私どもと共に、皇女殿下とレフイスト子爵をお待ちしませんか？」

それはつまり、来客用の待機室に入らないかという提案だ。結果的にはロマリアと顔を合わせることになる。ローゼンは当然ながら渋った。

「いや、私は大丈夫だ。ここで殿下をお待ちすれば、すぐにお会いすることができるからな」

ローゼンにしては筋の通った理由だった。これにはティファンヌも、そうですか、と退く姿勢を見せた。乗り切ったな、とローゼンは胸を撫で下ろしたが、予想外の言葉をエリノーラが発した。

「中庭で立ち廻っていては、それこそ殿下に失礼でしょう。館内に居れば、お会いするにも不便はないでしょつから、いよいよ一緒にしましょう」

余計なことを、とローゼンは剣の柄に腕が伸びそうになつた。先ほど言い争つたばかりなので、その仕返しだろうかと思ったが、まさかロマリアのことを知らないエリノーラがそんなに意地の悪いことをするはずもない。不運だな、とローゼンは諦めた。

ティファンヌの肩を叩いて、待合室の扉を指さす。

「ロマリアの機嫌はどうだ？」

「少なくとも良くはあつません。怒つてこむところ、拗ねているという雰囲気です」

それはそれで性質が悪い。所詮ロマリアはまだ子供だが、むしろ子供ほど拗ねると厄介な生物はこの世にいない。以前にエロールが、幼女が拗ねる様子はまるで天使のようだ、と力説していたが、やはり理解に苦しむ。

俺は絶対に年上だ、とローゼンはさりげなくティファンヌの肩を叩く振りをして、その鎖骨の形を楽しんだ。

第三十一話 ～女一人で～

男性の使用者が運んできた紅茶を一口飲み、それからエリノーラはミルクを少し注いだ。甘さが増した紅茶を再度口に運び、淵から唇を話さずに室内を凝視する。

一人掛けのソファーが四組、一点を向き合つように置かれていて、その中央に一目で分かる豪華な机がある。さすがは皇族、名ばかり貴族の自分とは違う、とエリノーラは舌を巻いた。

エリノーラが座るソファーの正面には、ここまで道中を共にしたローゼン。左右のソファーにはそれぞれ、ティファンヌという使用者とロマリアという少女が座っている。

この三人の関係についてはよく知らないエリノーラだが、誰も口を開かずに目を逸らしていることから何かがあつたことだけは手に取るよう分かつた。

このまま無駄に時間が流れるかと思われたが、ついに一人が口を開いた。

「次の一戦では参戦なさるそうですね、バルトシュタイン辺境伯」ロマリアだつた。年相応の幼い声だが、それでもローゼンは気まずそうな顔をする。

「ああ、そのつもりだ」

「本当でしようかね」

「……嫌な言い方をするな。可愛くないぞ」

「あなたに可愛いと思われても、まったく嬉しくありません」

この言葉に、エリノーラは紅茶を噴き出した。液体が器官に侵入して咽かえる。ティファンヌが無駄のない動きで汚れをハンカチで拭き、背中を優しく摩る。

「ごめんなさい、ティファンヌ。もう、いいから」

エリノーラはハンカチを受け取つて自ら残つた汚れを拭く。身近に使用人が存在しない生活をしていたので、慣れないことに戸惑つ

たのだ。

「一人がいがみ合つ理由について、エリノーラはさりげなく尋ねる。

「ロマリア司教、少々よろしいでしょうか？」

「えつと、その前にあなたは？」

「気まずい空氣に飲まれて自己紹介がまだ済んでいなかつた。抜かつたな、とエリノーラは思いながら簡単に名乗る。

「申し遅れました、司教。私は、ノースフィールド子爵家当主エリノーラ・ノースフィールドであります。この度は第三皇子殿下の御身を奪還するために心血を注ぐ覚悟であります」

「そうですか、あなたも伯爵様のために レフィスト子爵には改めてお礼を申し上げないといけませんね」

ローゼンに視線を向けた状態ではつきりと言つたロマリア。言葉こそは発しなかつたが、確実にローゼンの口は動いた。可愛いくなないなあ、と。

「私は、ロマリア・デイルファ・ラスチエーノです。父は現教皇、今は第三皇子エロール・レイス殿下の妻です。正式な式はまだ済ませていませんが……」

「心中お察しいたします。殿下をお救いいたすまで、今しばらくの辛抱を」

形式的な言葉を口にしたエリノーラだが、本当にこれでいいのかと悩む。例え教皇の娘であつても子どもは子ども。本来ならこんな大人同士に用いられる無意味な言葉よりも、大丈夫だよ、と根拠が無くても優しい言葉をかけて、それから頭でも撫でてやるべきではないか、と。

「このロマリアという少女の周囲にいる大人 ティファンヌに声をかける。

「ティファンヌ、少しいいかしら？ 私からあなたに相談があるのだけれど」

「私などでよろしいのですか？」

「ええ、あなたは女性で、それに歳も私と近そうだから

私でよろしければ、とティファンヌは無駄の無い動きで立ち上がった。エリノーラも腰を上げて、外に行きましょう、と言つた。部屋を出る際にローゼンが引きつった笑いを浮かべていた。その口は、嫌がらせかよ、と言つていた。

先ほどまでいた中庭に戻り、エリノーラは切り出した。

「バルトシュタイン辺境伯のことだけれど、ずいぶんと嫌われているのね。彼は前回の戦に参戦しなかつたそうだけれど、そのことと関係があるの？」

「はい、先の戦がすべての発端でした。ロマリア様が、バルトシュタイン様に対し憎悪を向けられるのも当然のことかと」「憎悪つて……。私にはもつと可愛らしいものに見えたけれど？」

「ロマリア様は賢い方です。八歳の子供で、自身の怒りを制御できるなどそう簡単ではありません。実際には飛びかかりたいほど、バルトシュタイン様にはご立腹です」

この使用人は有能だ、とエリノーラは暫定的にではあるが、ティファンヌのことを高く評価した。彼女は子どもだと侮らずに、一人の人間としてロマリアのことを見ている。自分とさほど年齢が変わらない女だが、これまでに様々な人間と接してきたのだろうと思った。

遠慮なく凝視していると、今度はティファンヌから口を開いた。

「失礼ですが、ノースフィールド子爵の年齢をお尋ねしてもよろしいでしようか？」

「私の年齢？ 今年で二十八歳だけれど

「婚姻はすでに？」

「いえ、まだだけれど……」

何を聞きたいのか、それとも特に意味のない雑談なのか、要領を得ないエリノーラは少し不満そうに返事をした。ティファンヌは、

そうですか、と言つただけでしばらく沈黙した。

中庭の近くを通つた使用人が二人の姿を認めて、わざわざ立ち止まつて礼をした。やはり使用人という生き物に慣れていないエリノーラは一瞬、表情を強張らせた。

その些細な変化すらもティファンヌは見逃さない。

「あの使用人が何か？」

「いえ、何でもないわ……」

鋭い女だ、とエリノーラは身震いしそうになつた。暫定的な評価が、確定的な評価へと推移した。

「ところで、この季節の大陸はいつもこんな気温なの？」

「気温ですか。ええ、この時期には私もこの服装でご奉仕させていただいております」

「そう、やっぱり大陸は暑いわね」

普段は気温が氷点下を下回る環境で生活しているせいが、この大陸での変化にまだエリノーラは適応できずにいた。

「のままではいけない、と自信を律して、それから表情を意識して変える。

「私はこの大陸では子どもみたいなものだから、しばらく私のことも気にかけてくれないかしら。もちろん、最優先するのはロマリア司教で構わないけど」

「私でよろしければ喜んで」

ティファンヌがいつもと変わらぬ動作で一礼した時、ちょうど待ち人が姿を現した。

「そこで何をしているのですか？」

くたびれた様子のリシャーナを連れて、イゼルナが中庭に足を踏み入れた。

第三十一話 ～バルトシュタイン辺境伯の心中～

イゼルナとリシャーナが増えたことで、応接室は少々手狭になった。当然のように上座に腰かけたイゼルナは、一人ずつ顔を確認する途中で、ロマリアに対して睨みを利かせた。

「……何か？」

「別になんでもないわ。あなたの思い通りじよ」

互いに一步も譲らない二人。これ以上続けば時間の無駄になると踏んだリシャーナは、失礼ですが、と前置きしたうえで挙手した。

「コーアリス共和国との再戦についての準備で、これまでに決定されたことだけこの場で話してもよろしいでしょうか？」

「……ええ、好きになさい」

ロマリアから視線を逸らして、少し低い声音でイゼルナは言った。リシャーナは全員に届く声で再戦についての現時点における決定事項を伝える。

「まず、共和国との再戦においてはイゼルナ様が総司令官を務められる。前衛部隊隊長としてバルトシュタイン辺境伯が、中衛部隊隊長としてノースフィールド子爵が、そして私が後衛部隊隊長と参謀を兼ねることになった。先の戦いで醜態を晒した、グロリアーナ侯爵、ヴェーグン伯爵は後方で荷駄の役を任せることとした」

これを聞いて、一先ずエリノーラは安堵した。戦争の経験が乏しい彼女からすれば、ここで前線を任せられるわけにはいかなかつたからだ。中衛ならば今の自分でも恥ずかしくない働きができると彼女は思った。

続けてリシャーナは言つ。

「ここで各部隊の戦力についてだが、まず前衛部隊には一千五百、中衛部隊に一千、後衛部隊にも一千、そして殿下が直接指揮される部隊が千五百。荷駄役の兵士を除いて、八千人。先の戦いで共和国側も勝利したといえど、相当の兵力を失つた。分は我らにある

その言葉を、イゼルナが引き継ぐ。わざわざ腰を上げて、彼女は宣言する。

「共和国は一見すると一枚岩ですが、その実態はアルドリア・ゴードレスの人望に愚民どもが群がっているだけに過ぎません。あの裏切り者さえ打ち取れば、後は鳥合の衆。捨て置いても勝手に崩壊するでしょう。そうなれば、このテレモニア大陸において我が帝国に盾突く勢力は姿を消します。これこそが有史以来初となる世界制覇の足掛かりとなるのです。負けることは許されません」

傲慢な物言いだと思ったエリノーラだが、皇族としては頼もしいな、と温かい目でイゼルナを見ていた。帝国がテレモニア大陸を統一することは、決して自分にとつて損はないことだ。

エリノーラは悟られないように気を付けながら、さりげなくローゼンへ視線を向けた。何が楽しいのだろうか、彼は口元を緩めていた。そんなに戦争が好きなのか、と思ったが、それは何かを楽しむ人間の笑いではないと観察していく分かった。

「この男は楽しくて笑っているのではなく、悲しくて笑っているのだ。

「帝国の霸道を阻む」

「皇女殿下、よろしいでしようか？」

その瞬間、全員の視線がエリノーラに釘付けになつた。第一皇女であるイゼルナが発言しているにも関わらず、何の躊躇もなく割り込んだことが信じられなかつたからだ。当のエリノーラは平気な顔でイゼルナの許しをまつてゐる。

当然ながらイゼルナは穏やかでいられなかつた。

「私の発言に口を挟むとはどのような了見ですか！」

「とても重要なことです。バルトシュタイン辺境伯に対して私個人がお尋ねしたいことがあるので、しばらく退室を許可していただけませんか？」

「そんな勝手が許されるとでも思つてゐるのですか！」

身の程を弁えなさい、と今にも手を出さん勢いで詰め寄るイゼル

ナ。それですらも平然としているエリノーラ。ここで仲間割れしては本末転倒だ、とリシャーナはこの場を治めるためにエリノーラに謝罪させようと動いた。

だが、それよりも早くティファンヌが動いた。

「イゼルナ様、ここにはノースフィールド子爵などに構わず、お続けください。殿下からのお言葉を蔑ろにする相手など叱るだけ時間と労力の無駄であります」

邪魔をするならば」退室ください、とティファンヌは促す。実際に彼女は、イゼルナの死角となる角度からエリノーラに田で合図をした。この好意を、エリノーラはありがたく受けた。

「さあ、バルトシュタイン辺境伯。こちらにお願いします」

「お、おい、ちょっと待て！」

体型で勝るローゼンだが、ティファンヌからの後押しもあつたので腕を引かれるままに応接室から出てしまった。一人が姿を消したことを見認して、改めてティファンヌはイゼルナに向き直った。

「イゼルナ様、これで無礼者はいなくなりました。存分にお言葉を……」

華麗に一礼してロマリアの後ろに下がったティファンヌの動作には全く無駄が無く、怒鳴ろうとしたイゼルナも機会を逃してしまって、続けるしかなくなつた。

さすがは、ティファンヌ・リベラだ、とリシャーナは舌を巻いた。

「おい、いい加減に放せ！ どこまで俺を連れて行くつもりだっ！」
中庭を抜けてもひたすら歩くエリノーラの手を、ローゼンはできるだけ優しく振り払つた。身体の平衡を崩したエリノーラは前方に倒れ込みそうになつたものの持ち直して、振り返つた。不満そうな表情だつた。

「少し驚きました」

「驚いたのは俺だ。イゼルナに対してあんなことを言つて、お前は改易でも希望しているのか。手柄を立てるために大陸まで来たんだろ？」

「あなたはどうして参戦されるのですか？」

「この一言はローゼンに重く圧し掛かつた。自身としては親友たるエロールを救出するためにだけ剣を振るうつもりだが、数千人が命を懸ける戦場においてそれは我儘に過ぎないのではないか、と思いつかんでいた。そして剣の師であり、最もローゼンが信頼を置く人間であるアルドリア・ゴードレスと剣を交えるということは、どちらかが死ぬということだ。

「辺境伯の心中で、何かが引っ掛かっているようにお見受けしました。私には別段関係ないことですが、それでもその感情が再戦において何らかの妨げになるとすれば話は別です。やるからには勝ちたいのです、私は」

負けず嫌いというわけでもないが、帝国貴族の端くれとしてエリノーラもこれから戦いには心血を注ぐ覚悟でいた。そんな彼女からすれば、腹に一物抱えているローゼンの存在は率直に言つて邪魔でしかなかつた。

自身の心中を、まだ出会つてから一月と経過していない相手に見抜かれたローゼンは何も言ひ返せずに沈黙するしかなかつた。

一行は日暮前にエロールの館に引き上げた。夕食を済ませたところで、それまで疲労困憊していたリシャーナが口を開いた。

「ティファンヌ、相談したいことがある。少しいいか？」

食器を下げるよとしたティファンヌは手を止めて、何でしょう、と尋ねた。

「ああ、ついでに全員にも言いたい。まだここに居てくれ」

その言葉に全員が食事の手を止めた。

「レフイスト子爵、それは再戦に關することでしょうか？」

エリノーラが尋ねる。そうだ、リシャーナは首肯した。

「すでに伝えたことで全員が知っているだろうが、再戦における総司令官はイゼルナ様が務められることになった。だが、正直なところ、俺からすれば嫌がらせ以外の何ものでもない」

苦笑しながら断言したリシャーナ。それに賛同こそしないものの、誰もが失笑した。お前らもそう思つだろ、と聞かれ、真つ先にロマリアが口を開いた。

「私も同感です。あの人は感情的で、傲慢で、何より頭が悪そうです。一軍の将としての才覚をそなえているとは到底思えません。あんな人に顎で使われるなんて、皆さんが可哀想です」

言い過ぎだとは、誰も注意しない。イゼルナと面識を得たばかりのエリノーラすらも、こいつは苦手だな、と本能で感じた。外見こそ綺麗で、教養があるように見えるが、どこからか隠しようのない無能さが露呈しているのだ。出自の関係からそういう人を見る目において長けているエリノーラからすれば、その程度のことを見抜くのは造作もないことだった。

「まあ、ロマリアでなくとも不満は存分にあるだろ。実際のところ、イゼルナ様には戦争に参加された経験が皆無に等しい。警護として聖騎士を傍において、本陣から成り行きを眺めていたそつだ」

「遊びのよくなものだということですか。ちなみに、警護を担当した聖騎士というのは？」

「ラウロス・ヘンティクセン伯爵だ」

「帝国最強の騎士ですか。それは頼もしいことですね。それだけのこととで戦玄人になつたつもりでいるのでしょうかね」

「そうだろうな、イゼルナ様ならそれが妥当だ」

ため息をついて食後酒を置くリシャーナ。再度ティファンヌに向き直る。

「そこでティファンヌに頼みたい。イゼルナ様のお側にお仕えして、馬鹿なことをしないように見張つてくれないか？」

「私が、皇女殿下のお目付け役をですか？」

思わぬ大役に、珍しく動搖の様子を示すティファンヌ。そして、今まで黙っていたローゼンが何故か反応をした。

「イゼルナのお目付け役となると、それは戦場に出向くということでしょう、レフリスト子爵。ティファンヌは使用人であつて、貴族でも兵士でもない。万が一のことがあつて、どう責任を果たすつもりですか！」

こんなことは黙認できない、とばかりにローゼンは食つて掛かる。彼からすれば密かに好意を寄せている女性が、命を懸けた戦場に向くなど絶対に許すわけにはいかなかつた。

だが、ティファンヌは。

「承知いたしました。不肖の身ですが、全力で励ませていただきます」

動搖を示したのは一瞬で、すぐにいつも通りの冷静な表情で彼女は承諾した。

「おい、そんな危険なことを引き受ける必要はないっ！ 自らを守る術を持たない人間が戦場に出るなど、言語道断だっ！」

全力で引き留めようとするローゼン。しかし、一度決意したティファンヌがそれを曲げることはなかつた。何も聞こえていないうに食器を片づけるために彼女は部屋を出た。

すぐに後を追おうとして立ち上がるローゼン。

「待てと言つてゐるだらう！」

「待つのはお前だ、ローゼン！」

これまでにない怒声を、リシャーナが発した。後ろ髪を容赦なく掴み、犬でも扱うかのように自分の側に引き込んだ。

「これもすべて勝利のため、帝国のため、エロール様のためだ！お前の感情など、ここに優先することはできない。分かつたら黙つていろ！」

「な、何だと、俺の感情だと……」

「そうだ、お前の感情だ。これ以上、感情的になつて戦況を乱すのは許さん！」

ローゼンを解放して、残つた食後酒を飲み干す。そして自らも姿を消した。その日、それでリシャーナは館を辞してしまった。

残された三人は黙つて食事を続けた。黙つて食事を続けるロマリアに、すでに済ませたエリノーラが声をかける。

「聞いてもいいから、ロマリア司教。第三皇子殿下　　エロール様について」

「え、ええ、はい……」

「殿下は、どのような方なのでしょうか？」

少々抽象的な質問ながらも、しばらく考えてからロマリアは返事をした。

「お会いした時は、変な人だと思いました。何を考えているかも分かりませんでした。お顔は整つてゐるのに、どこか自分に自信がなさそうで、見ていて時々痛々しくなりました。でも、同じ館で生活していくうちに私に色々な一面を見せてくれました。誰にでも同じような態度で接ししているようでしたが、違うんです、微妙に違いました。ティファンヌさんのことは使用人として扱つていてようど、とても大切な　　そう家族のようには扱つていました。私のことの方なりにとても大切にしていただきました」

「優しい方だったのですね」

寂しさを紛らわすためだつたのか、ロマリアはすべてを吐き出した。エリノーラはその背中を撫でて、もうお休みください、と呟いた。

「……失礼します」

ロマリアはその言葉に従つた。哀愁漂う背中だった。

「優しい方だつた どうしてあなたは何も咎めなかつたのですか？」

食後酒を口に運び、冷めた瞳でローゼンを眺めた。睨むでもなく、見下すでもなく、眺めた。この男がどうするか、それだけが今のエリノーラの感心だった。

「……何が言いたい？」

「どのように考えるか、それはあなた次第よ。どう行動するかもあなた次第。第三皇子殿下を、優しかつた方にしてしまつか、優しい方のままにするか、あなた次第よ」

じゃあ、と軽々しい挨拶をしてエリノーラは部屋から消えた。

リシャーナ・レフイストは欠伸を噛み殺した。かつて敗北した地に再び布陣を開始して、すでに半日が経過しようとしていた。すでに日は暮れている。

「レフイスト子爵、中衛部隊の布陣が完了しました」

背後から声をかけられ、気だるそうに振り返るリシャーナ。声の主であるエリノーラ・ノースフィールドはその表情を見て首を傾げた。

これまでリシャーナという男についてのエリノーラが懷いた印象は、真面目で凡庸、これに尽きた。だからこそ、このような局面で彼が気だるそうにしていることが腑に落ちなかつた。傍からすれば、いかにも面倒臭そうにしているようにしか見えない。

茶色の髪を乱雑にいじりながら、ああ、とだけリシャーナは返事をした。

「敵軍の布陣はまだ済んでいないようですが、その点についてはどうお考えですか？」

一人が立つ小高い丘らは、水深が膝ほどまでの浅い川が見下ろせる。先の戦ではあの川を挟む形で両軍が激突したのだが、今は対岸に犬一匹といない。ただ広大なアルス平原が広がつてゐるだけだ。いまだ姿を見せない敵軍。戦では先に布陣を済ませた軍が有利である、と古来伝えられている。それに照らし合わせれば、今の状況は非常に好ましい。しかし待つ身というのも精神的には苦痛である。その苦痛を少しでも紓らわそうとしたエリノーラの問い合わせだが、これに対してもリシャーナはまともな返事をしない。

「そのうち来るだろ」

「私は何故敵軍の行動が遅れているかについてお尋ねしたのですが」故意に苛立つた口調でもう一度意見を求める。そんなエリノーラの姿勢に対しても、変わらずリシャーナは冷淡だった。

先に布陣を済ませることができて幸運だつたじやないか、と一般論を言い残して天幕に入ってしまった。その後を追いかけようとしたエリノーラだったが、無性に馬鹿馬鹿しくなつて踵を返した。

本陣に戻つたエリノーラは、総司令官であるイゼルナと顔を合わせないように注意しながら人を探した。相手は当然、ティファンヌ・リベラだ。

肩まで届く黒髪の女性に、背後から声をかける。

「ティファンヌ、ちょっとといいかしら？」

声に反応したティファンヌが振り返る。華麗に一礼して、どのようなご用でしようか、と恭しい口調で返事をした。使用人としては当然の振る舞いだが、先ほどリシャーナから無下に扱われただけあって少々エリノーラには畏まつたように感じられた。

「その、あなたはどう思う？　まだ敵軍が布陣どころか、目の前にすら現れていない状況について」

「現在のアルス平原の状態について、ですか」

尋ねてしまつてから、相手を間違えた、とエリノーラは後悔した。このティファンヌという女性は使用人としては有能だが、貴族のように戦場に出ることはこれが初めてだった。そんな相手に敵軍の行動について意見を求めても有益な答えが返つてくるとは思えなかつたからだ。

真剣に考え込んでしまつたティファンヌに対して、別にいいから、とは言ひにくい。エリノーラは返事を待つしかなかつた。

真正面を向いていようと目が合つてしまつ。気まずさを紛らわすために、大陣営で戦闘に備える兵士たちに用も無いのに視線を向けた。男ばかりでむさ苦しいながらも彼らなりに談笑しながら楽しんでいるようだ。内容自体は隔絶された島の領主であるエリノーラには何を話しているのかさっぱりだった。貴族でも自分は平民の話題にすら付いていけないのか、と少々情けなさを感じた。

「ノースフィールド子爵。私なりの愚見ですが、よろしいでしょうか？」

「え、ええ、いいわよ。さあ、教えて頂戴」

自ら尋ねておきながら心が別のところへ行つていたエリノーラは慌てて視線を戻した。その慌てた様子に何も言わなかつたのはティファンヌなりの気遣いだつた。

「布陣を先に済ませた軍隊が有利である とかつて貴族の方から伺つたことがあります。そう考へれば、現在の状況は我が軍にとつて好ましいと言えます。しかし偵察隊すらも姿を現さないということは奇妙です。共和国側が何らかの思惑を持つていてると考へば、用心するに越したことはありません」

「射た発言に、まったく期待をしていなかつたエリノーラは面食らつた。洞察力もそれなりに優れている使用人は珍しい。何故リシャーナがこのティファンヌという一介の使用人を戦場にまで同行させたのか その理由がよく分かつた。

「偵察隊を送るべきかと思つてゐるのだけれど、それについてはどうかしら?」

「こ」のアルス平原まで共和国の軍は辿り着いていません。偵察隊を送るとなれば、相当の距離を移動させることになります

ティファンヌは暗に、このまま迎え撃つた方が得策だ、と言つた。奇妙で落ち着かないが、根拠もない不安に対しても恐れることはない。杞憂に振り回されることで敗北するのは何よりも恥ずかしいことだ。本当に優秀な使用人だ、とエリノーラは感嘆の声を漏らしそうになつた。平民に甘んじてゐる人材ではない。容姿も上品で、教養もある。少なくとも自分よりも貴族たる資格がある。

「ありがとう、ティファンヌ。参考にさせて貰うわ」

お役に立てて光榮です、と一礼してティファンヌは下がつた。そのまま天幕の一つに姿が消えたかと思うと、その中から男たちの歓声が聞こえた。あれだけの美女ならばそれは喜ぶだろう、とエリノーラは馬鹿な男どもを鼻で笑つた。

本陣を抜けたエリノーラは、その足で前衛部隊の陣へ向かつた。

前衛部隊の主要な役割は、何と言つても一番に敵軍と剣を交えるこ

とにある。その性質によるものなのか、自身が率いる中衛部隊、先ほどまでいた後衛部隊の兵士たちは一線を画した雰囲気がある。談笑する兵は稀で、している兵士すらも傍らには剣を置いている。その厳かな様子の中で、一人だけ霸氣のない男がいた。

「バルトシュタイン辺境伯、気分でも悪いのですか？」

広い天幕の中で机に上半身を預ける形で全身の力を抜いているローゼンには、誰もが話しかけにくい空氣があり、部下たちも気まずそうにしていた。それだけにエリノーラの登場は幸いだつたようで、それぞれが嬉しそうに会釈をした。

エリノーラからの問い掛けに、怠惰な格好のままローゼンは返事をする。

「悪くない」

「私から見ると、非情に悪く見えます。それでは兵士たちの士気が下がってしまう恐れがあるので、可能な限り自重してください」

口頭での注意に対し、ふつ、とローゼンは馬鹿にするような反応を見せた。上半身を机から起こして、何か思いついたかのように口元を緩めた。

「アルドリア・ゴードレスについて話そうか？」

ゴードレスとローゼンの関係については、事前にリシャーナから知らされていた。それでも当事者からは殆ど何も聞いていなかつた。触れようとすると、いつも適当にお茶を濁されたからだ。

この機会に知つておくべきだろう、とエリノーラは黙つて頷いた。「つは、ならどこから話すべきかな。そうだ、俺がまだ可愛い子供だったころから話そう」

表情こそは冴えないローゼン。それでも口調はどこか懐かしそうだった。

騎士としての名誉。

それこそが、アルドリア・ゴードレスといつ男が最もこだわり、命よりも頑なに守つたものである。

その弟子として剣術を叩きこまれたローゼンは聖騎士となつた。だが、ゴードレス自身は最後まで叙任されることは叶わなかつた。「今になって考えてみれば、俺たちの関係はその時点で終わつていたのかも知れないな」

幼少期から自身のことを語り、剣術の師としてゴードレスと出会つたことをローゼンは時間を惜しまずによつくりと話した。

すでに深夜となつたが、語り手のローゼンも聞き手のエリノーラも欠伸一つすることはなかつた。ここが戦場だという緊張感からではない。単なる回想だらうと、それ非常に真摯なものだつたからだ。ローゼンは舌打ちをして話を締めた。照れくさそうに頬を撫でて、それから立ち上がつた。どこかに行こうとするわけでもなく、周辺を早足でうろつき、何かを思い出したように時々立ち止つた。

その拳動不審な動作をエリノーラは何も言わずに見つめた。ローゼンから田を逸らさずに、しつかりと田に焼き付けた。どこまでも優しい眼差しだつた。

騎士という身分は、強さの証と言つても過言ではない。それ故に、出自に関係なく叙任される。帝国でも、貴族出身者と平民出身者がお互いに親しい関係となつてゐるのは騎士ぐらいのものだ。

その騎士の中でも選りすぐりの強者のみに叙任される位 それが聖騎士だ。帝国内でもその数はわずかに七人。一騎当千だという評判は決して誇張ではない。

妙な行動を繰り返していたローゼンが不意にエリノーラへ向かつて握つた拳を突きつけた。

「今言つたように、ゴードレス男爵は何より騎士としての誉れを大

切にされる方だ。それほどの方を改易するような帝国は腐っている。感情に重きを置いた決定ばかりを下しているような人間が、この国の支配層だ。お前はそんな人間じゃないだろ？」「

「さあ、どうでしょ。人間である以上、感情によって突き動かされることは宿命ではないでしょ？ 以前のあなたのように」

自らの師匠を斬りたくない。そんな感情に支配されたローゼンは先の戦いで参戦を拒んだ。

あの時の自分は、自らが嫌悪していた帝国の支配層の人間と同じだった。感情に支配されることによって生じる障害など考えもしなかつた。

親友が捕虜になつてしまつてから自分が愚かだつたと気づかされたが、すでに後の祭りでしかなかつた。

この再戦は後悔を払拭できる最後の機会になるだろう。

「もう、ゴーダレスを斬る覚悟はできましたか？」

「……踏ん切りがつかない」

自分がすべきことは、すでにローゼンとしては分かつている。それでもそう簡単に覚悟を決められるほど人間は機械的にできていなさい。

それを理解した上で、これが最後の言葉だ、とエリノーラは心に決めて口を開いた。

「人間はそう簡単に覚悟を決めることはできません。それが自分にとつて大切な人に関わることなら尚更です。そういう意味では、感情に支配されがちな人間は不便だと思います」

椅子から腰を上げて、天幕の出口へ身体を向ける。

「ですが、感情との葛藤こそが人間が人間であることの証明です。私はあなたの方が嫌いですが、葛藤すらない人間はもつと嫌いです」

エリノーラの姿は天幕の外に消えた。入れ違いに近衛兵が戻ってきた。

近衛兵は、ローゼンに対して事務的なことを伝えて。早朝は霧に

なるだろうから、どうすればいいかと指示を仰いだ。ローゼンは、濡れて困るものは天幕に仕舞え、と命令した。

伝えることを伝えて、聞くことを聞いた近衛兵はすぐに天幕から出て行つた。

同じ国の人間で、同じ敵に立ち向かおうとする関係でも、指揮官とそれに従う兵士には見えない壁が存在する。今会話がその最たるところだろう。

すべての人間と心通わせることはできない。だからこそ、自分が心通わせた相手だけは死ぬ氣で守る。それが俺の騎士道だ、とローゼンは静かに誓つた。

まだ確たる覚悟は決められない。それでもすでに剣を握るだけの気概は戻つている。あとは何か、何かきつかけがあればローゼンはゴードレスを斬ることができる。

早朝はやはり霧となつた。それも深い霧だ。わずか先の視界が確保できるだけで、とてもではないが戦闘などできない。

この霧では敵がすでに布陣を済ませたかどうかも確認できない。だからこそ帝国の指揮官は、後衛部隊のリシャーナを除いて兵たちに休息を取らせた。

その判断が帝国軍を窮地に陥れこととなつた。

「バルトシュタイン辺境伯に申し上げます！ 共和国のものと思われる部隊が渡河、こちらに進軍中です！」

それは霧に紛れての奇襲だつた。帝国軍は知る由もないことだが、先の戦で勝利した共和国軍も、すでに兵力の多くを失つていたのだ。その総兵力は荷駄役を除けばわずかに三千を数えるだけだつた。

この寡兵で勝ちを得るために、もはや奇襲しか策は選べない。そう判断したゴードレスは普通なら明るいうちに済ませる布陣をわざと深夜に行つた。そして霧に隠れての進軍を敢行した。少人数の

軍は進軍速度が速い。それが幸いしたのだ。

気づかることなく帝国軍の至近距離に至った共和国軍の部隊指揮官はカール・スレットマンだった。

先の戦で多くの戦功を挙げたカールは、この奇襲戦において先陣を斬るという名誉を許されたのだ。当然ながら期待に応えようとする彼は自ら前線で剣を振るつた。

誰よりも早く敵兵を斬り捨て、カールは声高々に叫んだ。

「一番槍は、コーハリス共和国軍副司令官である、カール・スレットマンが頂いた！」

その勢いに触発された共和国軍兵士は、躊躇なく帝国軍前衛部隊に突撃を開始する。単純な兵力では総勢一千五百人を有する帝国軍前衛部隊が勝る。しかしながら、わずか千人のカールの部隊によつて徐々に押されつづあつた。

さらに、共和国軍司令官代理である、ゴードレスの奇襲はこれに留まらなかつた。

「北から新たな敵が迫つています！ その数、およそ五百…」

どこからか金切り声が聞こえた。ローゼンは天幕を出て、すぐに北へ視線を向けた。共和国軍の部隊が、帝国軍前衛部隊を側面から襲い掛かるところだつた。

奇襲は完全に成功したといつていい。その証拠に、帝国軍前衛部隊は混乱して、後方に控える中衛部隊に助けを求めることがすらできない（実際にはこの時点で中衛部隊にも共和国軍の部隊が攻撃を開始していた）。

まさに優秀な司令官だからこそ成し遂げることができた、兵法の見本のような見事な奇襲。仮にこの戦が共和国軍の勝利で終われば、確実に後の世までこの奇襲戦は語り継がれことになるだろう。これはそれほどまでに統率が執れた攻撃だつた。

しかし。

この状況において、ローゼンは耐え難い失望感を覚えていた。

それは奇襲によって簡単に混乱してしまつた兵士たちに対しても

はない。むしろ、味方にはローゼン自身も失望するほど期待などしていなかつた。

失望した相手 それは、アルドリア・ゴードレスだった。

「……俺が尊敬した男は、自分の誇りを忘れてしまつたようだな」かつて「ゴードレスから言われたことをローゼンは余すことなく覚えていいる。

騎士たるもの敵とは正々堂々と戦わなくてはならない。それが個人戦であつても、集団戦であつても。

ローゼンの知つてゐる、ゴードレスという男は決して奇襲などする男ではなかつた。ならば、何故奇襲が行われたのだろうか。

それは単純に考えれば分かることだ。国を追われて「一ハリス共和国に落ち延び、帝国に抗うためには自分の信念を突き通してばかりではいられなくなつたのだろう。それを周囲の状況が許さなかつたのだろう。

自身の誇りを捨てる それは、ゴードレスにとつて耐えがたいことだつた。ローゼンもそう思つた。

だが、それ以上にローゼンは失望していた。

「どうか、ならば俺も 」

騎士としての誇りをあれだけ頑なに守つていた男でも、あつさりと崩れてしまうものだ。そう考えると、ローゼンは急に身体が軽くなつた。もう無駄な力はすべて抜けた。

今なら一切の遠慮もなく剣を振るうことができる。

「さて、そろそろ行くか」

ローゼンは歩き出す。実にゆつくりとした足取りで。

その目指す先は、敵将カール・スレットマンが奮戦する最前線である。

もう覚悟は決まつた。

第三十六話 ～聖騎士の実力～

細身の両刃剣は、軽装の兵士を背後から貫いた。身に着けていた鎖かたびらを軽々と粉碎して。

ローゼンは特に何も考えずに剣を振るつた。やはり身体は軽かつたが、それでも彼自身としては微妙に太刀筋に満足がいかなかつた。最前線で一兵卒に混じりながら剣を振る前衛部隊の司令官。時折その姿を認めて、聖騎士ローゼン・バルトシュタインであると気がついた敵兵もいた。しかしぬるの瞬間には一太刀で絶命させられる。敵味方が入り乱れる最前線において、彼は的確に敵だけを斬り捨てて、尚且つ自らはかすり傷すらも負つていなかつた。これは普通ならば奇跡に等しいことだが、そこは聖騎士であるローゼン。この程度のことなど当然であつた。

やがてその存在が最前線から負傷によつて離脱した敵兵の口より、後方の敵兵に囁かれる。帝国軍は聖騎士を参戦させている。そのことが大きく戦局を左右することとなる。

休むことなく剣を振るい、共和国の兵士を駆逐していくローゼン。その武勇によつて鼓舞された帝国軍の兵士は、辺境伯の後に続け、などと叫びながら突撃していく。先ほどまで優勢であつた共和国の部隊が徐々に後方に追いやられ、ついには両軍の間に流れる川まで後退を余儀なくされた。

この状況を打破すべく、共和国軍副司令官たるカール・スレットマンはさらに自ら前に出た。ローゼンの真似をするように剣を振るい、その姿を示すことによつて部下たちの勢いを回復しよつと図つたのだ。

真に珍しいことが起きた。両部隊の司令官がそれぞれ直接顔を合わせることとなつたのだ。

周囲から響く怒号にかき消されないよつ、カールは肺の空氣をすべて吐き出すほどの大聲で尋ねた。

「バルトシュタイン辺境伯家当主ローゼン・バルトシュタイン殿とお見受けした！私は共和国軍副司令官カール・スレットマンだ！」一人が直接対決になることを考えたのだろう、両軍の兵士はまるで示し合わせたようにその場から離れた。一騎打ちに相応しい状況に、今の二人はいた。

「いかにも、私がローゼン・バルトシュタインだ。バルトシュタイン辺境伯家当主であり 誇り高き聖騎士だ」

自ら聖騎士だと戦場で名乗るのは随分と久しぶりだった。その相手が貴族でないことは少々腑に落ちなかつたが、それでも腐りきつた支配者に対して眞面目に名乗るよりは数段気分が晴れやかだつた。この男は実力だけで副司令官に登りつめたのだろう、とローゼンは確信した。何度か視界の端でその武勇を目にしたからだ。その太刀筋は、どこか自分と似ていた。

「その剣術だが、師は誰だ？」

「アルドリア・ゴードレス共和国軍司令官代理である
やはりそうだったか、とローゼンは自身の直感が外れなかつたことに対して複雑な気分だつた。つまり、このカールという男と自分は兄弟弟子ということになるからだ。

今度はカールが口を開いた。

「聖騎士の実力とは、やはり恐ろしい。敵を斬る際に微塵も迷いがない。考えるよりも先に腕が動いているようですな」

カールもまたローゼンの剣技を観察していた。そして妬むことなく正直な賞賛を口にした。落ち着いているように見える彼だが、その心は少年のように弾んでいた。騎士の中でも選りすぐりの強者たる聖騎士には、例え敵であるうと尊敬の念を抱かずにはいられなかつたのだ。

しかしながら、カールも共和国軍の副司令官である。彼は笑顔を消して、ゆっくりと剣を構えた。

「あなたは確かに強い。それどこで討ち取らせてもうう、このカール・スレットマンが！」

いざ勝負、と声高々に叫び、上段の構えのまま駆け出す。この構えは一見すると隙だらけに見えるが、それを甘く見るローゼンではなかつた。

上段に構えていようと、剣を素早く扱える者ならば隙とはならぬいのだ。現にカールの腕力は相当な代物だった。上段から振り下ろされた剣を受け太刀したローゼンはその重さに舌を巻いた。

完璧に受け太刀したかと思われたローゼンの身体が徐々に押される。一撃目こそ威力を重視したカールだが、それ以降は反撃の隙を与えないほど間隔の短い斬撃に切り替えた。

息を荒げながらも次第に重くなる腕を休めないカール。意志の力だけで斬撃の速度を維持している。その姿はまさに騎士に相応しいものだつた。

だが努力だけでは埋まらない差が、この世には存在することも事実だ。

(そろそろ限界だろ？)

必死に剣を振るうカールに対して、受け太刀するローゼンは涼しい顔をしていた。傍目からすればカールが一方的に攻め立てているように見えるが、事実は逆である。ローゼンは必要最低限の力で相手をしているのだ。押されている彼だが、それはわざと下がつているだけに過ぎない。

(こいつの剣速はそれなりに速い。まともに受け止めては身体に響く)

さりげなく後方に下がることで、カールの力をほとんど分散していたのだ。ローゼンとしては犬猫と戯れている感覚に等しかつた。騎士としては恥ずかしくない実力者であるカールも、この聖騎士からすれば肩慣らし程度の相手でしかなかつたのだ。

(さて、そろそろ先に進む頃合いだな)

ローゼンは受け太刀することを終わりにした。その代わりに素手でカールの剣を受け止めた。

真剣を素手で受け止められる　その状況がカールには理解不能

だつた。その表情を見たローゼンは、肩慣らしの礼として種明かしをした。

「そう驚くことはない。俺が聖騎士だろ？と剣で斬られれば無事じやすまない。これは単純に、指の力だけで刃を挟んでいるだけだ」それはいわば花を摘む際の手の動きだつた。ローゼンは片手で受け止めたように見せかけて、本当は親指と人差し指、中指だけで事足りていたのだ。

圧倒的実力の差を見せつけながらもローゼンは平然としていた。すでに戦意を喪失したカールに向つて一言だけ言葉をかけた。

「さすがは『コードレス男爵の弟子だ。俺と同じで才能はあるようだな」

命があればまた戦おう そう告げて、下段から容赦なく斬り上げた。カールの鎧が紙くず同然に粉碎され、少し遅れて鮮血を撒き散らせた。

部隊長が敗北したことで敵部隊は雪崩を打つて後退を始めた。追い打ちを仕掛ける部下たちとは違い、ローゼンはゆっくりとした足取りで先に進んだ。

急いでも有利にはならない、とローゼンは確信していた。この先には、カールを遙かに凌ぐ実力者が待ち受けているからだ。

「コードレスに勝てる可能性 それはまだ五分五分だつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9009n/>

白い記憶～聖少女との日々～

2011年11月15日03時17分発行